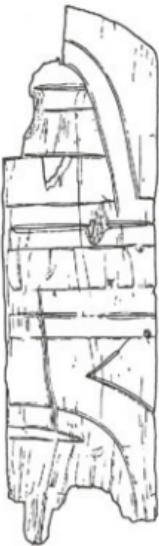


## 中垣内遺跡

—学校法人大阪産業大学校舎（12号館）新築工事に伴う—



直弧文入り木製品

2005年3月

大東市教育委員会

# 中 垣 内 遺 跡

— 学校法人大阪産業大学校舎（12号館）新築工事に伴う —

2005年3月

大東市教育委員会

## 序 文

本書は大東市教育委員会が昭和 62 年に大阪産業大学構内において実施した中垣内遺跡の発掘調査報告書であります。

中垣内遺跡といえば昭和 34 年の遺跡発見以来、長らく弥生時代前期の集落遺跡として周知されてきましたが、ここ十数年来の調査機会の増加により、縄文時代の遺構、弥生時代中期の遺構、後期の遺構、古墳時代後期の水田跡等、各時期の遺構の検出とそれに伴う遺物が出土し、新たな知見が得られつつあります。その先駆けとなったのが、今回報告をいたします本調査であります。詳しい調査成果は本報告に譲りますが、本遺跡内において初めて古墳時代前期の集落跡が確認され、素文鏡や直弧文の刻まれた木製品など特色ある遺物が出土しました。

弥生時代から古墳時代といいますと、この地は当時河内平野を覆っていた河内潟・河内湖の東縁部にあたり、その周辺には幾つもの集落が営まれていたことがわかつています。今回発見された集落跡も他の地域と同様にその水際に立地していた集落のひとつであることがいえるでしょう。

今とはちがって、その当時の人々の生活は自然環境の変化に大いに左右されたものと推察されますが、今回の調査結果は弥生時代から古墳時代にかけての集落立地場所の変遷を辿るうえでも、また当時の河内潟・河内湖の汀線を復元する意味においても大変貴重な発見であったと思われます。そして、先に述べました新たな知見に加え、中垣内遺跡全体の更なる解明と、ひいては弥生時代社会・古墳時代社会の解明・研究の一助になれば幸いかと存じます。

最後になりましたが、調査報告書の刊行が遅れましたことをお詫び申し上げるとともに、調査の実施にあたり、多大なるご協力を賜りました学校法人大阪産業大学をはじめ、関係機関・各位に対し厚く御礼を申し上げます。

平成 17 年 3 月

大東市教育委員会  
教育長 中 口 馨

## 例　　言

1. 本書は学校法人大阪産業大学校舎(12号館)新築工事に伴い、大東市教育委員会が実施した中垣内遺跡(調査名：NGT I 後にNGT87-1に改め)の発掘調査報告書である。
2. 調査地は大東市中垣内4丁目に所在する。
3. 調査は事業者である学校法人大阪産業大学の依頼を受け、大東市教育委員会歴史民俗資料館が主に調査事務業務を担当し、現地調査は大阪府教育委員会文化財保護課の協力を受け、同課技師松岡良憲を担当者として実施した。
4. 現地における調査は昭和62(1987)年6月23日～同年10月15日まで実施した。内業整理作業は現地調査と併行して実施していたが、現地調査終了後、大東市教育委員会が引き継ぎ、他の発掘調査の作業と調整を計りつつ、断続的に内業整理及び報告書執筆作業を行い、平成17年(2005)年2月に脱稿し、本書の刊行をもってすべての作業を完了した。
5. 本書の執筆・編集は大東市教育委員会歴史民俗資料館黒田淳(調査当時大東市教育委員会嘱託)が寝屋川市教育委員会文化振興課濱田延允(調査当時大阪府教育委員会調査員として参加)の協力・助言を得て行った。
6. 調査に要した費用はすべて事業者の負担によるものである。厚く感謝の意を表する次第である。
7. 現地調査及び整理作業に参加した者は下記の通りである。記して感謝の意を表したい。

山川浩仁、奥田良治、堀ノ内泉、藤井真奈美、高橋加奈子、貴志典子、石川博章、中川善隆、野村香枝、山本芳子、宮田八重子(以上：順不同)
8. 調査及び整理の実施にあたっては、以下の方々の協力を得た。(所属機関は調査当時)

三好孝一(財団法人大阪文化財センター)、阿部幸一・三宅正浩・宮崎泰史(大阪府教育委員会)  
(敬称略・順不同)
9. 本書で使用した座標は国土座標第IV系によるものであり、方位は座標北を示している。また、標高は東京湾標準潮位(T.P.)を基準としている。
10. 調査において作成した実測図・写真・カラースライド等は大東市立歴史民俗資料館に保管されている。今後広く活用されることを希望する。

## 本文目次

### 序文

### 例言

|                       |    |
|-----------------------|----|
| 第1章 位置と環境 .....       | 1  |
| 第2章 調査に至る経過 .....     | 8  |
| 第3章 調査成果 .....        | 12 |
| 第1節 層序 .....          | 12 |
| 第2節 第1～第3遺構面の概要 ..... | 17 |
| 第3節 第4遺構面の遺構と遺物 ..... | 20 |
| 第4章 まとめ .....         | 60 |
| 遺物観察表 .....           | 67 |
| 木製品観察表 .....          | 80 |
| 報告書抄録 .....           |    |

## 挿図目次

|                            |       |
|----------------------------|-------|
| 第1図 大東市位置図 .....           | 2     |
| 第2図 大東市埋蔵文化財分布図 .....      | 5～6   |
| 第3図 調査区位置図 .....           | 9     |
| 第4図 調査区地区割図 .....          | 10    |
| 第5図 調査区南壁土層断面図 .....       | 13～14 |
| 第6図 第4遺構面平面図 .....         | 21～22 |
| 第7図 S B-01平面図・断面図 .....    | 23～24 |
| 第8図 S B-01出土遺物 .....       | 25    |
| 第9図 S E-01上層平面図・断面図 .....  | 26    |
| 第10図 S E-01下層平面図・断面図 ..... | 27    |
| 第11図 S E-02平面図・断面図 .....   | 27    |
| 第12図 S E-02出土遺物(1) .....   | 28    |
| 第13図 S E-02出土遺物(2) .....   | 28    |
| 第14図 S K-06出土素文鏡 .....     | 29    |
| 第15図 S K-07平面図・断面図 .....   | 29    |
| 第16図 S K-07出土遺物 .....      | 30    |
| 第17図 S K-08出土遺物 .....      | 30    |
| 第18図 S K-09出土遺物 .....      | 30    |

|      |                  |    |
|------|------------------|----|
| 第19図 | S K-10上層平面図・断面図  | 31 |
| 第20図 | S K-10最下層平面図・断面図 | 32 |
| 第21図 | S K-10出土遺物(1)    | 33 |
| 第22図 | S K-10出土遺物(2)    | 34 |
| 第23図 | S K-10出土遺物(3)    | 35 |
| 第24図 | S K-10出土遺物(4)    | 36 |
| 第25図 | S K-11平面図・断面図    | 36 |
| 第26図 | S K-11出土遺物       | 37 |
| 第27図 | S K-15平面図・断面図    | 38 |
| 第28図 | S K-15出土遺物(1)    | 39 |
| 第29図 | S K-15出土遺物(2)    | 40 |
| 第30図 | S K-17出土遺物       | 41 |
| 第31図 | S K-19・20平面図・断面図 | 41 |
| 第32図 | S K-19出土遺物       | 42 |
| 第33図 | S K-20出土遺物       | 42 |
| 第34図 | S K-27出土遺物       | 43 |
| 第35図 | S D-13出土遺物       | 44 |
| 第36図 | S D-18平面図・断面図    | 44 |
| 第37図 | S I-01出土遺物(1)    | 45 |
| 第38図 | S I-01出土遺物(2)    | 46 |
| 第39図 | S I-03出土遺物       | 47 |
| 第40図 | S I-04出土遺物       | 47 |
| 第41図 | S I-08出土遺物       | 47 |
| 第42図 | S I-09出土遺物       | 48 |
| 第43図 | S I-10出土遺物       | 48 |
| 第44図 | S T-02出土遺物(1)    | 49 |
| 第45図 | S T-02出土遺物(2)    | 49 |
| 第46図 | S T-02出土遺物(3)    | 50 |
| 第47図 | S T-02出土遺物(4)    | 50 |
| 第48図 | S T-02出土遺物(5)    | 50 |
| 第49図 | S T-02出土遺物(6)    | 51 |
| 第50図 | S T-02出土遺物(7)    | 52 |
| 第51図 | S T-02出土遺物(8)    | 53 |
| 第52図 | S T-02出土遺物(9)    | 54 |

|      |            |    |
|------|------------|----|
| 第53図 | 包含層出土遺物(1) | 55 |
| 第54図 | 包含層出土遺物(2) | 55 |
| 第55図 | 包含層出土遺物(3) | 56 |
| 第56図 | 包含層出土遺物(4) | 57 |
| 第57図 | 包含層出土遺物(5) | 57 |
| 第58図 | 包含層出土遺物(6) | 58 |
| 第59図 | 包含層出土遺物(7) | 59 |
| 第60図 | 包含層出土遺物(8) | 60 |

## 表 目 次

|     |            |    |
|-----|------------|----|
| 第1表 | 中垣内遺跡調査一覧表 | 10 |
| 第2表 | 第1遺構面遺構一覧表 | 17 |
| 第3表 | 第2遺構面遺構一覧表 | 18 |
| 第4表 | 第3遺構面遺構一覧表 | 19 |

## 写 真 目 次

|     |                |    |
|-----|----------------|----|
| 写真1 | 第1遺構面検出状況(東より) | 17 |
| 写真2 | 第2遺構面検出状況(西より) | 18 |
| 写真3 | 第3遺構面検出状況(西より) | 20 |

## 図 版 目 次

|      |  |
|------|--|
| 図版一  | 遺構(第4遺構面) 全景(西より)                        |
| 図版二  | 遺構(第4遺構面) SK-07(北東より)/SK-10上層(北西より)      |
| 図版三  | 遺構(第4遺構面) SK-11下層(南西より)/SK-15(北より)       |
| 図版四  | 遺構(第4遺構面) SK-19・20(南西より)/SB-01(東より)      |
| 図版五  | 遺構(第4遺構面) SI-01(東より)/10区東側側溝土器棺出土状況(南より) |
| 図版六  | 遺物(土器) SB-01、SE-02、SI-01                 |
| 図版七  | 遺物(土器・土製品) SI-01・04・08・10                |
| 図版八  | 遺物(土器) SI-10、SK-07・08・09・10              |
| 図版九  | 遺物(土器) SK-10                             |
| 図版十  | 遺物(土器) SK-10                             |
| 図版十一 | 遺物(土器) SK-11                             |
| 図版十二 | 遺物(土器) SK-15                             |
| 図版十三 | 遺物(土器) SK-17・19・20・27                    |

図版十四 遺物(土器) S T-02、包含層

図版十五 遺物(土器・土製品) 包含層

図版十六 遺物(石製品・骨角製品) S T-02、包含層

図版十七 遺物(石製品・骨角製品・金属製品・木製品)

S K-06、S K-10、S T-02

図版十八 遺物(木製品) S K-10、包含層

図版十九 遺物(石製品・木製品) S E-02、S K-10、S T-02、包含層

## 第1章 位置と環境（第1・2図）

中垣内遺跡の所在する大東市は河内平野の北東部に位置している。かつてこの河内平野には、縄文時代前期～中期頃に起こった海進現象により河内湾が形成されていたことが判っている<sup>(40)</sup>。河内湾は現在の生駒山麓まで及んでいたため、本市の平野部のほとんどが水に浸かっていたことになる。このような自然環境の中、遺跡の立地はその影響を強く受けているため、本市での遺跡分布はおのずと河内湾縁辺部と山裾の間に残された丘陵部に集中している状況となっている。

本市で確認されている最も古い遺物は、本遺跡から出土したナイフ形石器<sup>(41)</sup>であり、今から約2万年～1万2000年前の後期旧石器時代のものである。周辺における旧石器時代の遺跡は、生駒山地の北方に広がる交野台地から枚方丘陵に数多く知られているが<sup>(42)</sup>、本市でも丘陵部にこの時代の遺跡の存在が推定される他、河内湾形成以前の、今は厚く堆積する沖積層の下にもこの時期の未発見の遺跡が存在している可能性も否定できないことをここに付け加えておく。

縄文時代では未だ集落を示す具体的な遺構は検出されていないが、北条遺跡、宮谷古墳群で草創期の有舌尖頭器がそれぞれ出土・採集<sup>(43)</sup>されていることから、かなり早い時期から集落が形成されていたことが窺える。本遺跡では土坑と推定される遺構内より、中期末の土器が出土<sup>(44)</sup>しているが、これが今のところ本市において遺構に伴うものと推定される唯一の例で、この時代の集落に関しては不明な点が多い。本遺跡内ではこの他、晩期までの各時期の土器も出土しているが、弥生時代の遺物を含む自然河川からであり<sup>(45)</sup>、また、鍋田川遺跡でも早期末～前期初頭、中期後半、晩期等の各時期の土器が出土しているが<sup>(46)</sup>、やはり包含層中からの出土である。しかし、これらの遺物には磨耗の少ないものも含まれていることから、東方の丘陵地に集落が存在したことは十分に推察されるところである。

弥生時代になると、河内湾は次第に淡水化が進み河内潟へと変化する。この時代を代表する遺跡として、前期～中期にかけて集落が営まれていた本遺跡<sup>(47)</sup>がある。最近の調査では北方の野崎条里遺跡、北条西遺跡でも前期の土器が出土しており、そしてさらに北方には雁屋遺跡(四條畷市)、高宮八丁遺跡(寝屋川市)が所在し、これらは河内潟縁辺部に立地した集落であったと考えられている。また、後期になると集落の立地に変化が見られ、本遺跡の北方の丘陵地に位置する堂山古墳群では、弥生時代後期頃と推定されている溝<sup>(48)</sup>が検出されており、北条遺跡では後期の竪穴住居が検出されている<sup>(49)</sup>。さらに東方に位置する鍋田川遺跡<sup>(45)</sup>でも後期の土器が出土していることから、丘陵地での立地が目立つようになる。

古墳時代になると河内潟は河内湖へと変化するが、これに伴い汀線が西へ後退することにより、集落を形成するための土地が広がることになり、湖岸での集落形成が活発となる。本遺跡では本書で報告する前期の集落跡が検出されており、鍋田川遺跡では前期の土器とともに滑石製有孔円板・ト骨・刻骨等の祭祀色の強い遺物が出土している<sup>(41)</sup>。中期～後期の集落跡の検出例こそ少ないが、各所で土師器・須恵器が採集されているので、背後の丘陵地に築かれた古墳の造営基盤



大東市位置図



## 大東市

Daitoh City

North Latitude

34° 44' 30" N

East Longitude

135° 37' 35".5 N



第1図 大東市位置図

となる集落が存在していたことが推定される。ところで、鍋田川遺跡、堂山下遺跡では格子タタキ文のある韓式系土器が採集<sup>(注13)</sup>されており、メノコ遺跡では鳥足文を施した土器や初期須恵器が出土<sup>(注14)</sup>していることなどから、当時この地域が朝鮮半島と深いつながりがあったことが窺える。東方の丘陵地には多くの古墳が周知の遺跡として登録されているが、既に消滅してしまったものや未調査のものが大半を占めている。その中でも堂山古墳群は発掘調査によってその内容が解明されている数少ない古墳の一つである。同古墳群は同じ丘陵上に8基の古墳が造営され、第1号墳とされているものが古墳時代中期の終り頃で、他は後期に属している。第1号墳は周囲に埴輪列を伴う径約25mを測る円墳で、初期須恵器とともに三角板皮綴短甲・衝角付冑・鉄刀・鉄鎌等の多量の鉄製武器・武具類が出土していることから、当時朝鮮半島との関係が深かった首長級の墓と推定されている<sup>(注15)</sup>。この他の古墳を挙げると、峯垣内古墳<sup>(注16)</sup>・六地蔵古墳<sup>(注17)</sup>・十林寺古墳<sup>(注18)</sup>・城の越古墳<sup>(注19)</sup>・城の越上の段古墳<sup>(注20)</sup>・大谷神社古墳<sup>(注21)</sup>・寺川古墳群<sup>(注22)</sup>・大谷古墳群等があり、採集されている遺物等から後期古墳と推定されている。

飛鳥・奈良時代では寺川遺跡で古墳時代終末～奈良時代前半と推定される掘立柱建物<sup>(注23)</sup>が検出され、瓦堂遺跡ではほぼ同時期(白鳳期)の布目瓦<sup>(注24)</sup>も出土している。また、北新町遺跡では、奈良時代自然河川より人面墨書き土器が出土している。今のところこの時期の集落の内容・性格は明らかではないが、寺川遺跡では墨書き須恵器<sup>(注25)</sup>が出土しており、通常の集落とは性格の異なる官衛的な施設の存在も推定されている。

平安時代～鎌倉時代では、寺川遺跡でこの時期の遺構が確認されている。<sup>(注26)</sup>この頃になると河内湖はさらに縮小して池となり、平安時代頃には勿入湖(ないりそのふち)<sup>(注27)</sup>の名称で、鎌倉時代には広見池(ひろみいけ)<sup>(注28)</sup>の名称で呼ばれていたことが文献より窺える。池の東側には河内平野を南北に走る東高野街道が発達し、街道沿いには集落が形成された。北新町遺跡<sup>(注29)</sup>では12～13世紀の集落跡が検出されており、また池の西側の御領遺跡<sup>(注30)</sup>では13～14世紀の集落跡が検出されている。

戦国時代には本遺跡の背後にある飯盛山に飯盛山城が存在していたことが知られており、一時的ではあるが畿内一円の支配に成功した戦国武将三好長慶の居城になっていた。同じ頃、眼下の深野池に浮かぶ島にはその支城である三箇城があり、長慶の臣下であった城主の三箇賴照は洗礼を受け、三箇サンチョと呼ばれる熱心なキリスト教信者として知られていた。その賴照のことやこの城の様子は当時日本に滞在し、キリスト教布教に努めていたイエズス会宣教師ルイス＝フロイスによって克明に記録されているのであるが、残念ながら、現状では発掘調査による具体的な知見は得られていない。

戦国時代末期には豊臣秀吉による大坂城築城の際に、飯盛山中より石垣用の石材が切り出されていたことが知られており、また、近世初頭の徳川氏による大坂城再築の際にも石材の供給地となっており、これに携わった諸藩を示す刻印や矢穴の残る石<sup>(注31)</sup>が、飯盛山中やその麓に残っている。

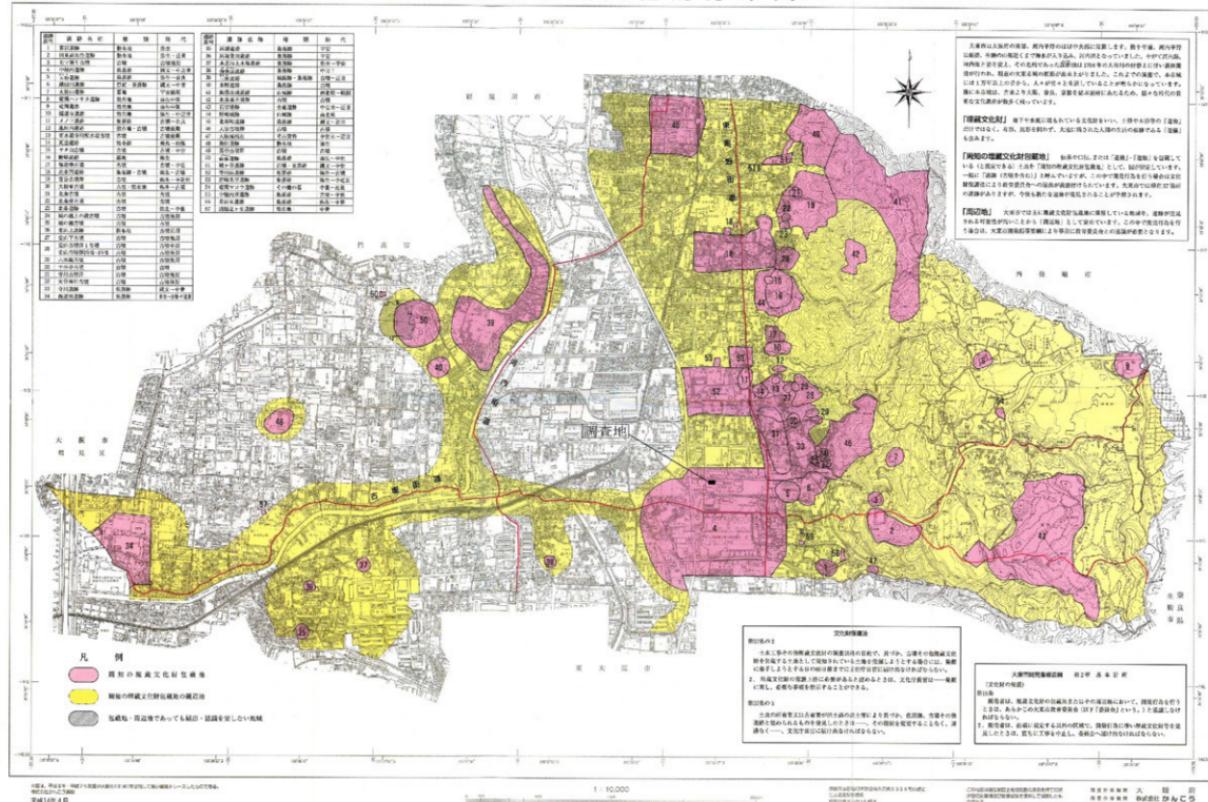
河内湖の名残である広見池は近世初頭頃にはさらに規模を縮小させ、「深野池」と「新開池」と呼ばれる二つの池となっていた。新開池は隣市の東大阪市に、深野池は本市域に存在し、南からは旧大和川の分流である吉田川<sup>(162)</sup>、北からは寝屋川が流れ込み、流域や池の周辺は水害が絶えない地域であった。しかし、近世中頃の宝永元年(1704)に行われた大和川付け替え工事により、両池とも干拓され新田開発が行われその姿を消し、本市の現在の地形が出来上がった。

## 註

- (1) 梶山彦太郎・市原実『大阪平野のおいたち』1986青木書店
- (2) 『大阪府史・別巻』1991大阪府教育委員会
- (3) (2)に同じ。  
※枚方市域では津田トッパナ遺跡、星ヶ丘遺跡をはじめとして10数箇所が、交野・寝屋川・四條畷市域で合わせて8箇所が確認されている。また、本市の南、東大阪市域でも生駒山麓沿いの丘陵や段丘上で日下遺跡、鬼虎川遺跡等8箇所が確認されている。
- (4) 『寺川・北条跡発掘調査報告書』1987大東市教育委員会
- (5) 『中垣内遺跡発掘調査報告書(大東市立民体育館建設工事に伴う)』1997大東市教育委員会  
※浅い円形状の土坑と推定されるSK-09から北白川C式に属する土器が出土している。
- (6) 『中垣内遺跡(大阪産業大学校舎建設工事等に伴う)』2005大東市教育委員会
- (7) 『今川・鍋田川遺跡発掘調査報告書(学校法人大阪産業大学内所在)』1991大東市教育委員会
- (8) 中垣内5丁目にあらる関西電力大阪変電所ににおける調査。  
『中垣内遺跡発掘調査報告書(関西電力株式会社大阪変電所内所在)』1990大東市教育委員会  
『中垣内遺跡(関西電力株式会社空送電線鉄塔N24建替に伴う発掘調査報告書)』2004大東市教育委員会
- (9) 『堂山古墳群発掘調査概要』1973大阪府教育委員会  
『堂山古墳群』1994大阪府教育委員会 ※中期以降、立地場所は丘陵地に移る傾向が見られる。
- (10) (4)に同じ。
- (11) 『鍋田川遺跡発掘調査概要・I』1992大阪府教育委員会
- (12) 『大東市史』1973大東市教育委員会 ※昭和33年の鍋田川防護堤建設工事の際に発見された。
- (13) (12)に同じ。  
※また、(7)の調査でも出土している他、市内の山手の各遺跡から出土している。
- (14) 『メノコ遺跡発掘調査報告書』1998大東市教育委員会
- (15) (9)に同じ。
- (16) 河内一治『大東市の埴輪』『寺川・北条遺跡発掘調査報告書』1987大東市教育委員会  
※現在、大東市埋蔵文化財分布地図では「峯垣内遺跡」の名称で登録されているが、円筒埴輪が採集されていることから、ここでは古墳として名前を挙げた。
- (17) (16)に同じ。 ※円筒埴輪が出土。
- (18) (12)に同じ。 ※前方後円墳と伝えられるが定かではない。また、石棺が出土したとも伝えられる。
- (19) (12)に同じ。 ※円筒埴輪が出土したと伝えられる。
- (20) (12)に同じ。 ※円墳で石棺のみ基出土したと伝えられる。
- (21) 勾玉が出土したと伝えられる。
- (22) (12)に同じ。 ※石棺、円筒埴輪、土師器、須恵器が出土した。
- (23) (7)に同じ。
- (24) (12)に同じ。
- (25) 『寺川遺跡発掘調査報告書(倉庫付事務所建設に伴う)』1997大東市教育委員会
- (26) (4)に同じ。 ※(25)の調査でも検出されている。
- (27) 清少納言『枕草子』の中に記述がある。
- (28) 『藤原源高源状案』河内水走家文書・鎌倉道文十ノ七四四五
- (29) 『北新町遺跡第1次発掘調査概要報告書』1986大東市北新町遺跡調査会  
『北新町遺跡第2次発掘調査概要報告書』1991大東市北新町遺跡調査会

## 大東市埋蔵文化財分布図

1:10,000



第2図 大東市埋蔵文化財分布図

- 『北新町遺跡第3次発掘調査概要報告書』1997大東市北新町遺跡調査会  
『北新町遺跡第4次発掘調査概要報告書』1998大東市北新町遺跡調査会  
『北新町遺跡発掘調査報告書(都市計画道路四条堀駅前西線建設に伴う)』1994大東市教育委員会  
『北新町遺跡発掘調査報告書(店舗付共同住宅建設に伴う)』1997大東市教育委員会
- (30) 『御領遺跡(御領地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書)』1999大東市教育委員会
- (31) 本市の竜門山中には「 $\square$ ・ $\circlearrowleft$ ・ $\ominus$ ・ $\triangle$ ・ $\bigcirc$ 」の多種類の刻印石が存在しており、国見高地遺跡では「 $\bigcirc$ 」の刻印石が発見されている。また中垣内1丁目には大阪底残石と呼ばれる巨石が存在しており、「 $\oplus$ ・ $\square$ ・ $\ominus$ ・ $\times$ 」といった刻印が見られる。
- (32) 大和川付け替え以前、その分流である久宝寺川、平野川、玉串川等の諸河川は河内平野を北流していた。吉田川は玉串川の分流のひとつ。

## 第2章 調査に至る経過(第3・4回)

中垣内遺跡は大東市中垣内から平野屋、寺川、そして東大阪市善根寺町にかけて所在し、関西電力東大阪変電所を中心に東西約1km、南北約800mの広がりをもつと推定されている遺跡である。遺跡は東方の生駒・飯盛山系の山間部より流れだす大川や鍋田川などの中小河川によって形成されたと考えられる標高3.5～6.0mを測る扇状地の扇央～扇端部に位置している。

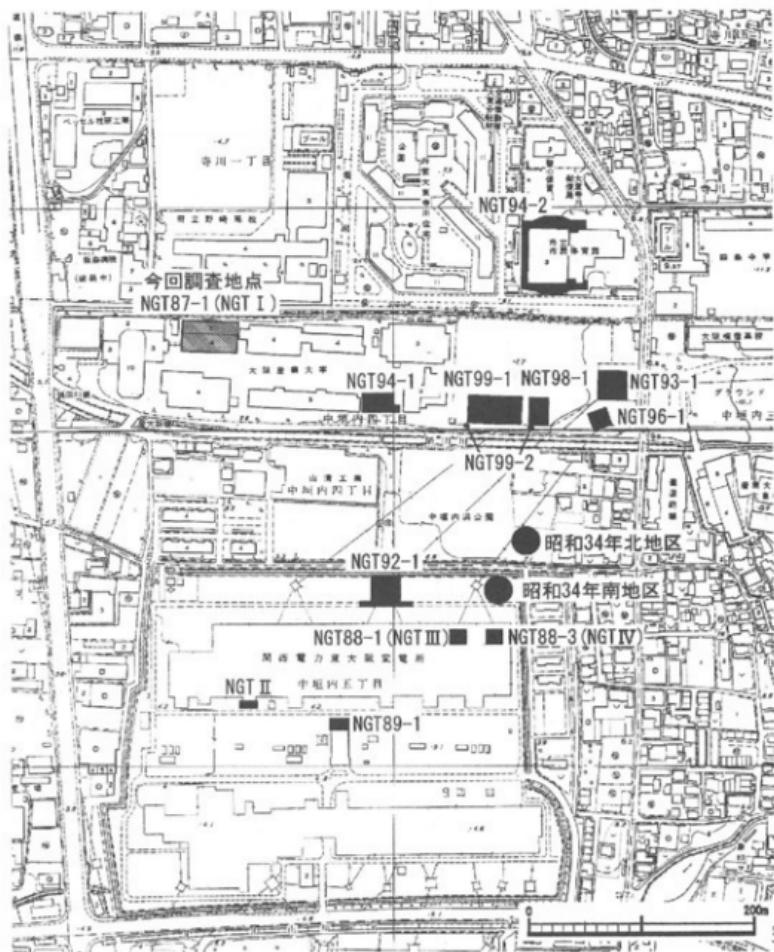
遺跡発見の歴史は比較的古く、昭和34年に現在中垣内5丁目に所在する関西電力株式会社東大阪変電所建設工事の際に弥生時代前期の遺構と遺物が発見され周知されるようになり、今日に至っている。

現在、変電所の敷地面積は約12,000m<sup>2</sup>にもなる広大なものであるが、当時、発掘調査を実施し得たのは、変電所敷地の北東隅（南地区）と敷地の北側（北地区）との2箇所のみで、しかも15日間という短期間の調査であったという。それにもかかわらず大量の遺物が出土し、南地区では一辺約2mの方形の竪穴住居跡が検出され、弥生時代前期土器や磨製石斧、石包丁、打製石鏃、獸骨、淡水産貝殻、炭化米などが出土し、北地区では東北から南西に走る杭列が検出され、弥生時代前期～後期の土器、少量の土師器、須恵器の他、磨製石斧、打製石鏃、木製鋤、網代が出土した。<sup>(111)</sup>このように短期間のうえ調査範囲も狭小であったにもかかわらず多くの成果が得られ、ここに弥生時代前期の集落が存在したことが判明した。出土した弥生土器は、『弥生式土器集成』<sup>(112)</sup>にも掲載されており、集落の規模や内容は未だ不確定な部分もあるが、今日では向内潟周辺に展開した拠点的性格をもった弥生集落の一つとして位置付けられている重要な遺跡である。

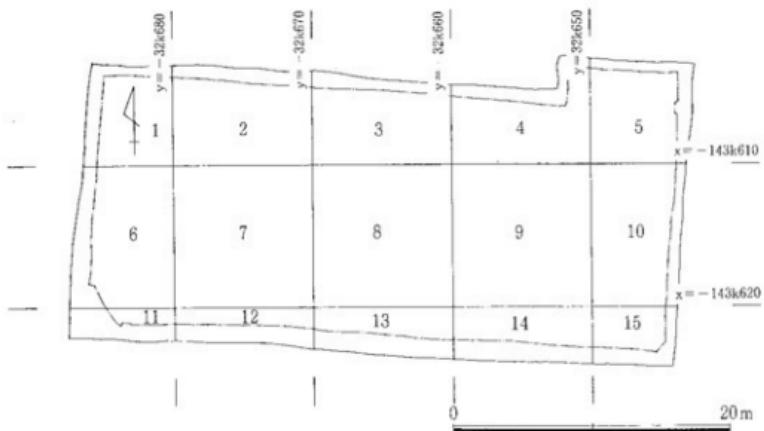
また、集落が営まれていたのは前期だけではなく、中期から古墳時代にかけても営まれていたことが、その出土遺物の内容から推定されたのであるが、明確な遺構が検出されなかつたため、その実態は不明のままであった。

その後長らく発掘調査の機会がなかったが、昭和62(1987)年7月に変電所の北側にキャンバスがある学校法人大阪産業大学より校舎新築工事の計画が出された。当時、市教委では、市内の埋蔵文化財包蔵地の範囲を改定したところであり、このとき本遺跡も従来に比べその範囲を大きく拡大したことにより、計画予定地が中垣内遺跡に含まれることになった。このため文化財保護法に基づき第57条の2第1項の届出をしてもらい、協議の結果、まず試掘調査を実施することになった。試掘調査は昭和62年5月27日に実施し、その結果、現地表面より4.5～5m付近に古墳時代前期の土師器を大量に含む遺物包含層が確認され、遺物の状態から遺構面が存在する可能性の高いことが判明した。市教委では保護措置について大学側と協議するが、建物の種類が工学部の実験棟という性格上、設計変更も不可能なため、事前に発掘調査を実施することになった。ここに火に約30年ぶりに本遺跡内の発掘調査が実施されることになったのである。

しかし、当時市教委では既に複数の調査を実施中であったため、即時に調査に対応することは



第3図 調査区位置図



第4図 調査区地区割図

困難な状況であった。迅速な対応を迫られていたため、考古学専攻のある大学に調査を依頼することも検討したのであるが、最終的には大阪府教育委員会が調整に入り、調査協力をすることで解決をみた。ただし府教委は現地調査の応援ということで、調査担当者を派遣してもらい、市教委は調査事務を行うという調査体制で調査に臨んだ。

現地調査は昭和62(1987)年6月23日～同年10月15日まで実施し、その後の内業整理作業を市教委が引き継いで行った。

調査区の地区割は第4図に示すとおりで、国土座標第IV系に基づいて調査区内に10m四方のメッシュを想定して、1から順に番号を付して設定した。

なお、本遺跡内ではこれを皮切りに、昭和62年以降今日(2005年2月現在)に至るまで、変電所

第1表 中垣内遺跡調査一覧表

| 調査名              | 所在地    | 面積                 | 用途    | 調査期間              | 備考            | 文献 |
|------------------|--------|--------------------|-------|-------------------|---------------|----|
| NGT87-1(NGT I)   | 中垣内4丁目 | 714m <sup>2</sup>  | 校舎新築  | 87.6/23～87.10/15  | 大阪産業大学構内      | 本書 |
| NGT II           | 中垣内5丁目 | 51m <sup>2</sup>   | 遮断器取換 | 87.10/14～87.10/30 | 関西電力東大阪変電所敷地内 | ①  |
| NGT88-1(NGT III) | 中垣内5丁目 | 100m <sup>2</sup>  | 遮断器取換 | 88.5/1～88.5/8     | 関西電力東大阪変電所敷地内 | ①  |
| NGT88-3(NGT IV)  | 中垣内5丁目 | 100m <sup>2</sup>  | 遮断器取換 | 88.10/11～88.11/30 | 関西電力東大阪変電所敷地内 | ①  |
| NGT89-1          | 中垣内5丁目 | 127m <sup>2</sup>  | 建物    | 89.7/25～89.8/18   | 関西電力東大阪変電所敷地内 | ①  |
| NGT92-1          | 中垣内5丁目 | 676m <sup>2</sup>  | 鉄塔建替他 | 92.6/22～92.10/30  | 関西電力東大阪変電所敷地内 | ②  |
| NGT93-1          | 中垣内4丁目 | 676m <sup>2</sup>  | 鉄塔建替  | 93.2/16～93.4/19   | 関西電力          | ③  |
| NGT94-1          | 中垣内4丁目 | 575m <sup>2</sup>  | 校舎新築  | 94.8/10～94.11/22  | 大阪産業大学構内      | ※1 |
| NGT94-2          | 寺川1丁目  | 1206m <sup>2</sup> | 体育館増築 | 94.11/14～95.3/14  | 市立市民体育馆       | ④  |
| NGT96-1          | 中垣内4丁目 | 117m <sup>2</sup>  | 鉄塔建替  | 96.9/24～96.7/31   | 関西電力          | ※2 |
| NGT98-1          | 中垣内4丁目 | 436m <sup>2</sup>  | 建物    | 98.11/24～99.2/26  | 大阪産業大学構内      | ⑤  |
| NGT99-1          | 中垣内4丁目 | 1154m <sup>2</sup> | 校舎新築  | 99.5/6～00.1/31    | 大阪産業大学構内      | ⑤  |
| NGT99-2          | 中垣内4丁目 | 28m <sup>2</sup>   | 下水道施設 | 99.5/10～99.6/4    | 大阪産業大学構内      | ⑤  |

敷地内で機器の老朽化のための建替え工事、変電所北側に所在する市立体育館増築工事、また、産業大学構内においても校舎の建替えや新築工事とそれに付随する工事等が相次ぎ、これらに伴う発掘調査が実施されてきており、多くの成果が得られている。詳細は各調査報告に委ねるとして、ここに現在までの調査箇所と調査期間を図・表に示しておく。(第3図・第1表)

文献①『中垣内遺跡発掘調査報告書(関西電力株式会社東大阪変電所内所用)』1990大東市教育委員会  
文献②『中垣内遺跡(関西電力株式会社架空送電線鉄塔N-24建替え等に伴う発掘調査報告書)』2004大東市教育委員会  
文献③『中垣内遺跡(関西電力株式会社架空送電線鉄塔N-23建替え等に伴う発掘調査報告書)』2004大東市教育委員会  
文献④『中垣内遺跡(大阪産業大学校舎校舎建設等に伴う発掘調査報告書)』1997大東市教育委員会  
文献⑤『中垣内遺跡(大阪産業大学校舎校舎建設等に伴う発掘調査報告書)』2005大東市教育委員会  
※1弥生時代前期～中期、古墳時代の遺物が出土。弥生時代前期～古墳時代の遺構が確認されている。  
※2弥生時代の自然河川、古墳時代前期の水田跡等が検出されている。

#### 註

- (1) 『大東市史』1973大東市教育委員会
- (2) 小林行雄・杉原莊介編『弥生式土器集成 本編』1969東京堂出版

## 第3章 調査成果

### 第1節 層序(第5図)

調査区壁面の土層断面は後世の攪乱の影響を大きく受けしており、特に東壁及び北壁は既存の浄化槽により大きく削られていた。ここでは比較的影響の少なかった南壁土層断面を参考にして、層序と遺構面の関係を説明する。

#### 1層

盛土である。約2.2mもの厚さで堆積しており、大学キャンパスの整備工事に伴うものであろう。なお、調査前の地表面の標高はT.P.+6.25m前後を測った。

#### 2層

1層の直下に堆積していた暗緑灰色微砂～シルトである。盛土がなされる前の地表面である。当時この付近一帯は水田や畠として利用されており、その耕作土である。キャンパス整備時の削平・攪乱の影響を大きく受けしており、調査区西半部分では消失しており、確認することができなかつた。

#### 3層

2層の直下に堆積していた緑灰色粘土である。耕作土である2層に伴う床土であろう。調査区全体で確認することができた。本層の上面で第1遺構面とした近世～近代の耕作面を検出している。

#### 4層

3層の直下に堆積していた暗緑灰色砂混じり粘質シルトである。3層とともに第1遺構面のベース層を構成しており、調査区全体で確認することができた。

#### 5層

5層は4層の直下に堆積していた暗緑灰色砂混じりシルトであるが、調査区東半部分でしか確認することができなかつた。本層の上面で中世～近世の耕作面である第2遺構面を検出している。

#### 6層

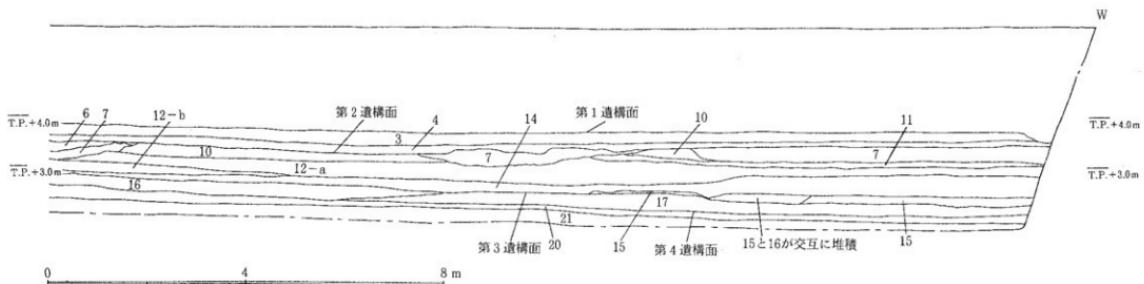
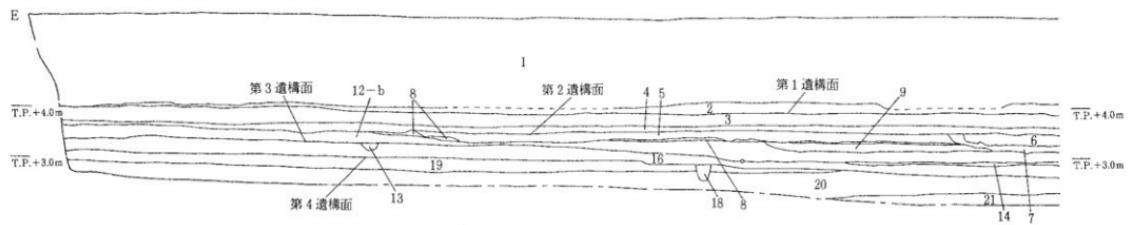
4層直下に部分的に堆積する暗オリーブ灰色砂混じりシルトである。5層とともに第2遺構面の検出面となっているところもある。

#### 7層

6層の直下に堆積していた黒褐色粗砂と青灰色粗砂の混合層である。本層も調査区西側部分では第2遺構面の検出面となっている。

#### 8層

5層直下に部分的に薄く堆積していたオリーブ灰色砂質シルトで、部分的に明黄褐色粗砂が含まれているところもある。第2遺構面のベース層を構成している層の一つである。



1. 盛土  
 2. 暗緑灰色微砂～シルト (7.5GY4/1)  
 3. 緑灰色粘土 (5G1.7/1)  
 4. 茶緑灰色砂混じり粘質シルト (10GY4/1)  
 5. 暗緑灰色砂混じりシルト (5G4/1)  
 6. 暗オリーブ灰色砂混じりシルト (2.5GY4/1)  
 7. 黒褐色粗砂 (2.5Y5/4) と青灰色粗砂  
 (5BG5/1) の混合層  
 8. オリーブ灰色砂質シルト (10Y5/2)  
 (明黄褐色粗砂 (2.5Y6/6) を含む)
9. 灰色砂混じりシルト (N5/1)  
 10. 暗緑灰色砂混じり粘質シルト  
 (10GY4/1) 〈黄褐色微砂を含む〉  
 11. 灰黄褐色砂混じりシルト (10YR4/2)  
 12-a. オリーブ灰色砂混じりシルト  
 (10Y4/2) 〈粗砂を多く含む〉  
 12-b. オリーブ灰色砂混じりシルト (10Y4/2)  
 13. 黒色粘質シルト (N2/1)  
 14. オリーブ黑色砂混じり粘質シルト (10Y3/1)  
 と黄褐色粗砂 (2.5Y5/4) が交互に堆積
15. 灰白色砂層 (7.5Y7/1)  
 16. 青黒色砂混じりシルト (5PB1.7/1)  
 17. 青黒色砂混じり粘土 (5B1.7/1)  
 18. 黑色粘質シルト (N2/2)  
 19. オリーブ灰色砂混じりシルト (5GY5/1)  
 20. 緑灰色砂混じり砂質シルト (7.5GY5/1)  
 21. 緑灰色粘質シルト (7.5GY5/1)

第5図 調査区南壁土層断面図

9層

8層直下に部分的に薄く堆積していた灰色砂混じりシルトで、第2遺構面のベース層を構成している。

10層

調査区西半部分で4層直下に堆積していた暗緑灰色砂混じり粘質シルトで、黄褐色微砂を多く含んでいる。上面は第2遺構面の検出面となっている。

11層

7層直下に堆積する灰黄褐色砂混じりシルトで、第2遺構面のベース層を構成している。

12-a層

調査区の西半部分で10層及び11層直下に堆積していたオリーブ灰色砂混じりシルトである。粗砂を多く含んでいる。

12-b層

調査区の東半部分で5・8・9層直下に堆積していたオリーブ灰色砂混じり土である。12-a層と土色は同じであるが、こちらには粗砂があまり含まれていなかった。

13層

土層断面で確認された遺構の埋土で、黒色粘質シルトである。第3遺構面で検出したピットの断面であろう。

14層

12-a・12-b層直下に堆積していたオリーブ黒色砂混じり粘質シルトと黄褐色粗砂が交互に堆積を示す層で、調査区西半部分から現れ始め、西側へ行く程、層厚を厚くしている。

15層

14層直下に堆積していた灰白色砂である。調査区の西側のみで確認されており、第3遺構面で検出したSD-05の埋土であろう。

16層

12-b層、14層直下に堆積していた青黒色砂混じりシルトである。本層の上面で第3遺構面を検出している。

17層

16層と同色であるが、砂混じり粘土である。調査区西側では16層に代わり第3遺構面の検出面になっている。

18層

土層断面で観察された遺構の埋土で、黒色粘質シルトである。第4遺構面で検出したピットの断面であろう。

19層

調査区東側で16層直下に堆積していたオリーブ灰色砂混じりシルトである。本層の上面が第4

遺構面の検出面となっている。

20層

19層直下に堆積していた緑灰色砂混じり粘質シルトである。19層と同様に本層上面が第4遺構面の検出面となっている。調査区全体で観察されている。

21層

20層直下に堆積していた緑灰色粘質シルトで、今回の調査において確認し得た最下層の層である。調査区の東側へ行くほど、弥生時代の遺物が含まれるようになる傾向があった。

## 第2節 第1～3遺構面の概要

### 第1遺構面(写真1)

第1遺構面は近世から近代の耕作面である。盛土と旧耕作土である2層の暗緑灰色微砂～シルトを除去した時点で検出しており、3層の緑灰色粘土上面を検出面としている。検出面の標高は調査区の東側でT.P.+約4.0m、西側でT.P.+約3.8mを測る。

近現代の耕作と攪乱の影響が大きく、その証拠に、通常は盛土層の直下に均一に堆積している旧耕作土である2層が調査区の西半では削平のためほとんど観察されていない。

遺構は調査区のほぼ中央の3・8・13区で、南北方向に走る杭列が検出され、約5cm程のわずかな段差(東側の上段をSM-01、西側をSM-02とした)が認められた。杭列と段差は区画の境界を示すものであろう。検出面全体が耕作地の跡で、水田或いは畠として利用されていたことを示している。

また、調査区東側の5・10・15区では溝SD-01を検出している。蛇行しながら南北方向に走り、東側の肩の大半が東側側溝で寸断され調査区外になるので規模は測り難いが、土層断面観察用のセクションを設置した地点では幅5.6m、深さ35cmを測り、同程度の規模を保ちながら北へ

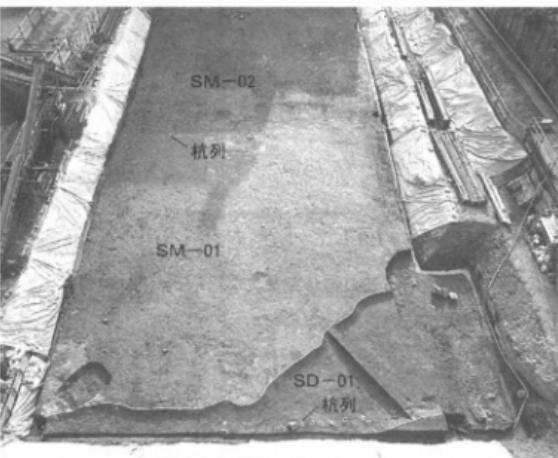


写真1 第1遺構面検出状況(東より)

第2表 第1遺構面遺構一覧表

| 遺構名   | 地区                    | 検出規模     | 方向            | 深さ   | 形状 | 埋土   | 備考  |
|-------|-----------------------|----------|---------------|------|----|--|---|
| SD-01 | 4/5/10/<br>15         | 5.6×16.4 | NW→SE<br>～N→S | 0.35 | 蛇行 | 黒灰褐色粘土・黒灰褐色砂泥じり<br>粘土質土・暗褐色砂泥じり粘土・暗<br>灰色砂泥じり粘土質土・暗灰色細砂泥<br>じり粘土質土・灰褐色砂質土・粗砂泥じ<br>り・暗褐色砂質土・暗灰色粘土質土・<br>暗褐色粘土 | 調査区外へ続く・東側側溝に切ら<br>れら・溝内に石と杭                              |
| SM-01 | 3/4/8/9/<br>13/14     | —        | —             | —    | —  | —  | 南北方向に走る耕作地の区画の<br>杭列を窓にして、SM-02より一段<br>高くなっている(0.05～0.1m) |
| SM-02 | 1～3/6<br>～8/11<br>～13 | —        | —             | —    | —  | —  | 南北方向に走る耕作地の区画の<br>杭列を窓にして、SM-01より一段<br>高くなっている(0.05～0.1m) |

向かって流れていたのであろう。埋土は上部より黒褐色粘質土、黒褐色砂混じり粘質土、暗灰色砂混じり粘質土の順に堆積しているが、西側肩部に粗砂を多く含む灰褐色砂質土が前述の層を切り込んでブロック状に堆積している。堆積状況から徐々に幅が縮小して埋没したものと推定される。

本遺構面からの出土遺物は希薄で、近世の染付や土師器小片が出土しているに過ぎない。

#### 第2遺構面(写真2)

第2遺構面は第1遺構面のベース層となっている3層と4層の暗緑灰色砂混じり粘質シルトを除去した時点で検出しており、主に5層の暗緑灰色シルト、7層の黒褐色粗砂・青灰色粗砂、10層の

暗緑灰色砂混じり粘質シルトをベース層としている。検出面の標高は調査区の東側でT. P. +約3.4m、西側でT. P. +2.9~3.0mを測る。

本遺構面では南北方向に走る溝(小溝群)と、それにつながっていた不定形の浅い不明土坑(SK-01・02)を検出している以外、特に目立った遺構は検出していない。小溝群は耕作痕(鋤跡)



写真2 第2遺構面検出状況(西より)

第3表 第2遺構面遺構一覧表

| 遺構名   | 地区                | 検出規模                    | 方向  | 深さ   | 形状  | 埋土          | 備考                                    |
|-------|-------------------|-------------------------|-----|------|-----|-------------|---------------------------------------|
| SK-01 | 4/9               | 2.8×3.5                 | —   | 0.14 | 不定形 | 暗緑灰色砂混じりシルト | 南へ小溝2条(小溝群-3)が派生する                    |
| SK-02 | 8/9               | 2.5×4.65                | —   | 0.05 | 不定形 | 暗緑灰色砂混じり粘質土 | 北へ小溝3条(小溝群-2)が派生し、南へ小溝2条(小溝群-2)が派生する  |
| SD-02 | 1/6/11            | 1.25×17.8               | N→S | 0.15 | 直線  | 灰黄褐色砂混じりシルト | 調査区外へ続く                               |
| SD-03 | 2/7/12            | 0.72×17.65              | N→S | 0.12 | 直線  | 灰黄褐色砂混じりシルト | 調査区外へ続く                               |
| 小溝群-1 | 3/8/13            | 0.45×2.2                | N→S | 0.05 | 直線  | 暗緑灰色砂混じりシルト | 小溝2条、北端は途切れで消滅し、南端は調査区外へ続く            |
| 小溝群-2 | 3/4/8/9<br>/13/14 | 0.32×17.60<br>0.32×11.5 | N→S | 0.05 | 直線  | 暗緑灰色砂混じりシルト | SK-02から北へ小溝3条が派生し、南へ小溝2条が派生する、調査区外へ続く |
| 小溝群-3 | 4/9/14            | 0.23×6.4<br>0.23×9.28   | N→S | 0.03 | 直線  | 緑灰色粘質土      | SK-01から南へ小溝2条派生し、先端は袋状に終わる            |

第4表 第3遺構面遺構一覧表

| 遺構名   | 地区                | 検出規模                | 方向    | 深さ   | 形状          | 埋土            | 備考                       |
|-------|-------------------|---------------------|-------|------|-------------|---------------|--------------------------|
| SK-03 | 8/9/13/<br>14     | 0.98×3.24           | —     | 0.41 | 不定形<br>(溝状) | オリーブ灰色砂混じりシルト | 南西へSD-07を派生する            |
| SK-04 | 7                 | 0.98×1.88           | —     | 0.06 | 不定形         | オリーブ灰色砂混じりシルト |                          |
| SK-05 | 7/8               | 2.1×2.95            | —     | 0.13 | 不整円形        | オリーブ灰色砂混じりシルト |                          |
| SD-04 | 7~9               | 0.22~1.24×<br>19.24 | ほぼE→W | 0.63 | やや蛇行        | 明黄褐色粗砂        | 東端、西端とも袋状に終わる            |
| SD-05 | 1/2/6/7/<br>11/12 | 8.0×17.85           | ほぼN→S | 0.85 | ほぼ直線        | 緑灰色砂混じり粘質シルト  | 東側の肩部のみ検出・ST-02上層        |
| SD-06 | 9/10              | 0.18~0.95×<br>8.2   | E→W   | 0.12 | やや蛇行        | 明黄褐色粗砂        | 東端、西端とも袋状に終わる            |
| SD-07 | 13                | 1.08×2.2            | NE→SW | 0.13 | 直線          | 明黄褐色粗砂        | 北東端はSK-03に続く・南西端は調査区外へ続く |
| SD-08 | 3                 | 0.28×8.2            | ほぼE→W | 0.11 | 直線          | 明黄褐色粗砂        | 両端とも途切れて消滅               |
| SD-09 | 2                 | 0.62×1.85           | ほぼN→S | 0.1  | 直線          | 明黄褐色粗砂        | 南端は袋状に終わる、北は調査区外へ続く      |
| SP-01 | 13                | 0.6×0.62            | —     | 0.26 | 円形          | オリーブ黒色砂混じり粘質土 | 柱痕                       |
| SP-02 | 8/13              | 0.4×0.42            | —     | 0.27 | 隅丸方形        | オリーブ黒色砂混じり粘質土 | 柱痕                       |
| SP-03 | 2                 | 0.18×0.35           | —     | 0.1  | 不整長円形       | オリーブ灰色砂混じり粘質土 |                          |
| SP-04 | 2                 | 0.18×0.22           | —     | 0.13 | 円形          | オリーブ灰色砂混じり粘質土 |                          |
| SP-05 | 2                 | 0.37×0.46           | —     | 0.05 | 隅丸方形        | 黒褐色粗砂混じり土     |                          |
| SP-06 | 2                 | 0.24×0.32           | —     | 0.02 | 不整長円形       | 黒褐色粗砂混じり土     |                          |
| SP-07 | 2                 | 0.42×0.43           | —     | 0.04 | 隅丸方形        | 黒褐色粗砂混じり土     |                          |
| SP-08 | 2                 | 0.22×0.25           | —     | 0.09 | 不定形         | 黒褐色粗砂混じり土     |                          |

の一部であり、この他にも、無数の細溝が調査区全体で観察されている。

第1遺構面と同様、出土遺物は希薄で、染付に混じり瓦器塊、土師器皿片が出土していることから、中世から近世の耕作面と推定される。

### 第3遺構面(写真3)

第3遺構面は第2遺構面のベース層となっている3・4層を除去した時点で検出しておらず、16層の青黒色砂混じりシルト、17層の青黒色砂混じり粘土をベース層としている。検出面の標高は調査区の東側でT. P. +約3.3m、西側でT. P. +約2.3mを測る。

本遺構面では土坑や溝、ピット等が検出されている。

土坑は不定形及び不整円形のもの(SK-04・05)、溝状を呈する不定形のもの(SK-03)があり、SK-03は溝SD-07と連続していた。埋土はいずれもオリーブ灰色砂混じりシルトで、遺物の出土量は少ないが、須恵器片が含まれていた。

溝は南北方向に走るもの(SD-05・09)、東西方向に走るもの(SD-04・06・08)、そして前述のSK-03に連続する北東から南西方向に走るSD-07がある。SD-04・06は両端が袋状に終結し、SD-09も北側は調査区外へ続くが南端は袋状に終結している。埋土はいずれも明黄褐色粗砂が堆積しており、遺物は出土していない。これらの溝はいずれも幅は均一で

はなく、深さも部分的に深い箇所があり、整った形状をしていないことから、人為的に掘削されたものとは断定し難く、自然に形成されたものと推定される。

調査区の西側で検出したSD-05は西へ向かって緩やかに傾斜する浅い落ち込み状の遺構である。第4遺構面で検出したST-02の上面を検出したもので、次項で説明をする。

ピットは8個検出しているが、検出状況からして、建物に伴う柱穴とは言い難く、また遺物も出土していないので時期も明確ではない。

第3遺構面の時期であるが、遺構からの出土遺物量が少ないため明確ではないが、上下の遺構面の時期を考慮に入れて推定すると、古墳時代後期～奈良・平安時代頃と考えられる。

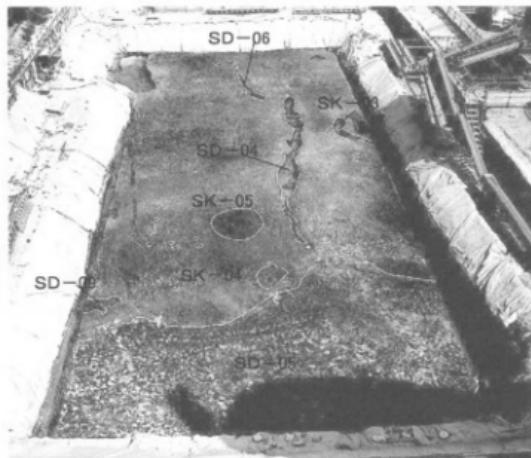


写真3 第3遺構面検出状況(西より)

### 第3節 第4遺構面の遺構と遺物

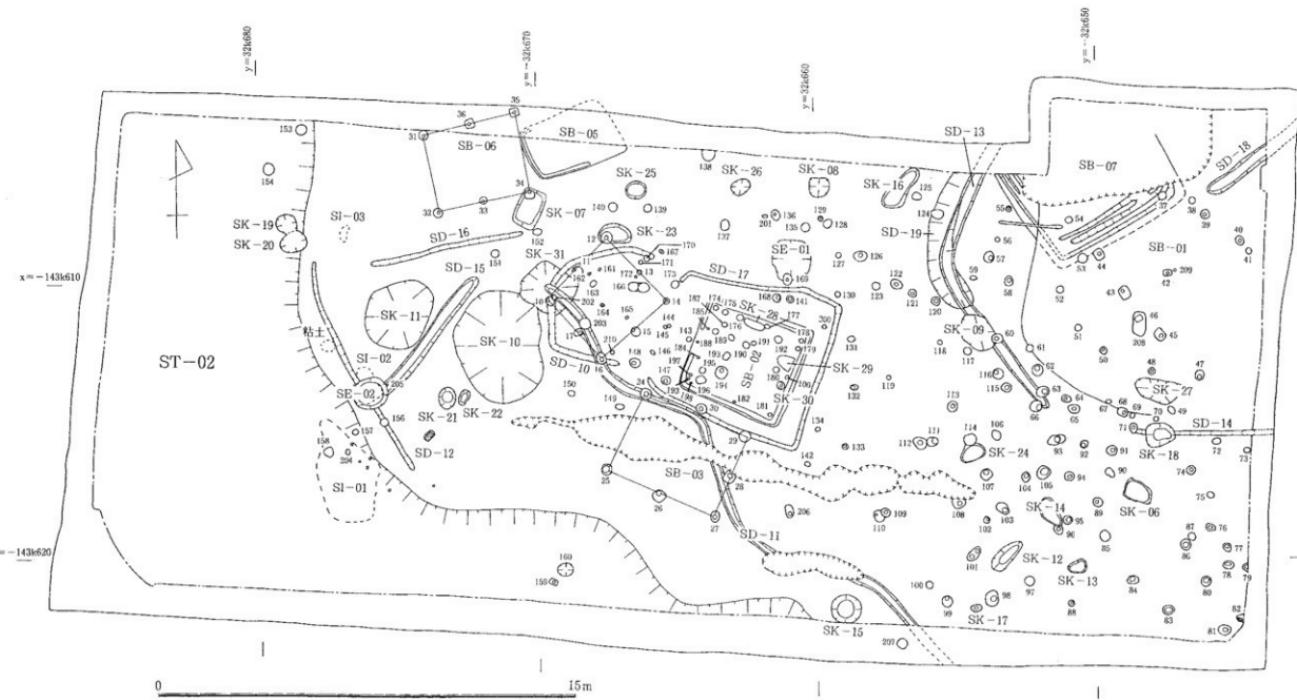
#### 第4遺構面(第6図)

第4遺構面は第3遺構面のベース層となっている16・17層を除去した後の19層のオリーブ灰色砂混じりシルト、20層の緑灰色砂混じり砂質シルトをベース層として検出している。検出面の標高は調査区の東側でT.P.+約3.2m、西側でT.P.+約2.3mを測る。

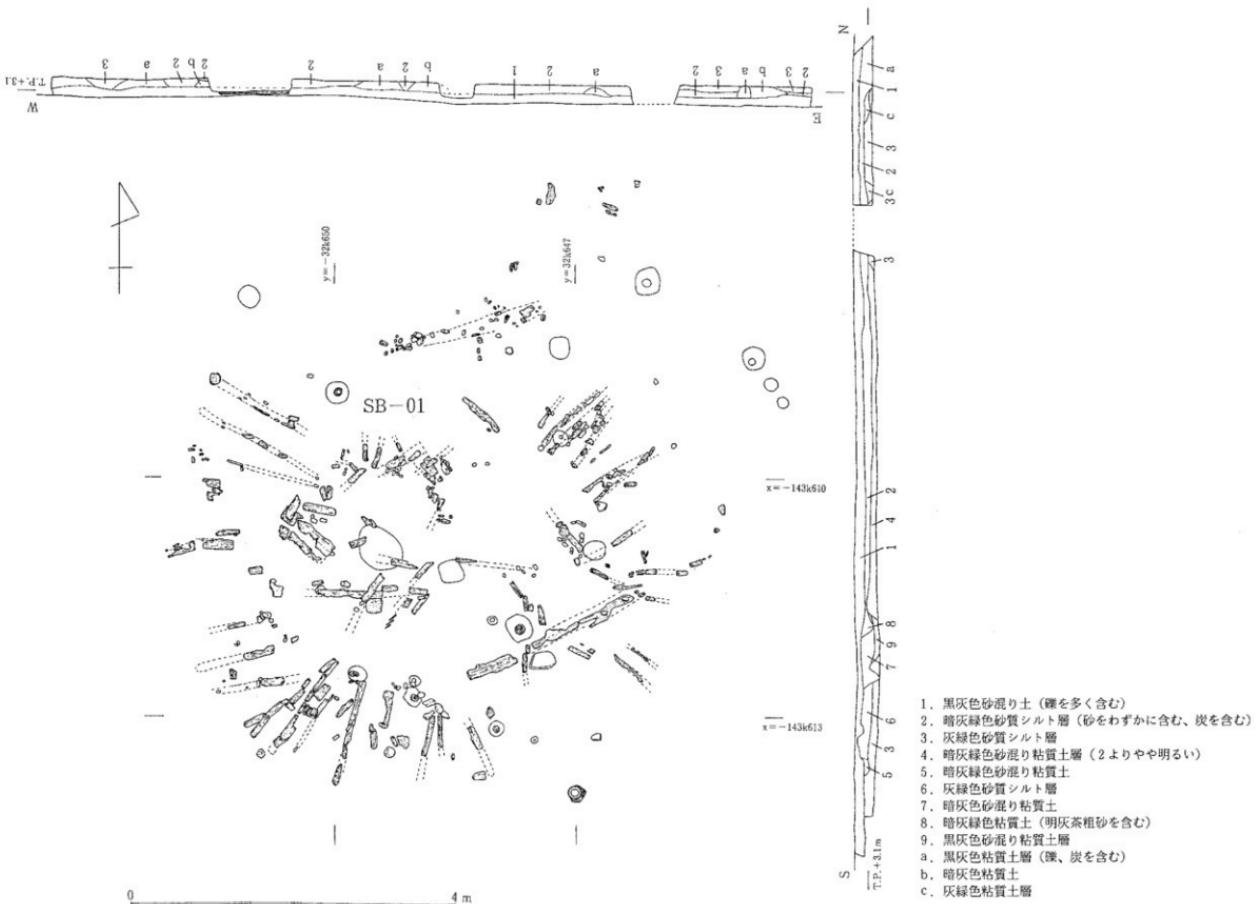
本遺構面では調査区西側で、落ち込み状の遺構ST-02が検出され、東側では掘立柱建物や堅穴住居をはじめ、土坑、ピット、溝等、多数の遺構を検出している。遺物は弥生時代中期～後期、庄内式期、布留式期の土器等や素文鏡、管玉、獸骨、桃種等が出土している。また、木製品は主にST-02内から多岐にわたる種類のものが出土している。

#### SB-01(第7・8図)

4・5・9・10区で検出している焼失堅穴住居である。北東隅での検出のため北側側溝と東側側溝に切断され、既存の浄化槽による搅乱を受けている。さらに堅穴住居SB-07に切られてい。壁溝は明確に検出されておらず、このような状況で全体の規模を復元することは困難であるが、焼失木材が約7.0×8.0mの範囲にわたり散在しており、なかでも放射状に検出された径4～8cm前後の丸木材は屋根部分に使用された垂木材と推定され、その状況から同程度の範囲内で

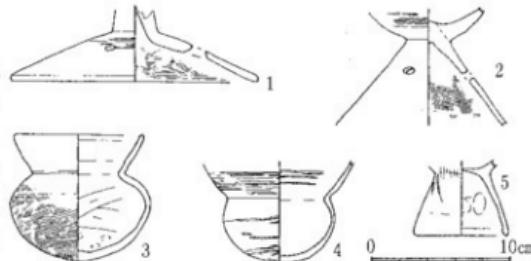


第6図 第4構造面平面図



第7図 SB-01平面図・断面図

取まる規模を有していたものと推定される。焼失木材にはその他、幅8~16cm程度の板材があり、検出状況は垂木材と方向を同じくするものと直交するものが遺存していたが、どの部材に使用されていたのか不明である。内部では複数のピットが検出されており、このうちS P - 44・45・48・50



第8図 SB-01出土遺物

に柱根が残存していた。これら複数のピットから、主柱穴を特定することは困難であるが、仮に、遺構面検出時に検出した住居輪郭線と対応するように並ぶS P - 47・48・50~52等の柱穴を主柱穴とすると、その並び方から、平面プランは多角形を呈していた可能性も否定できない。同じ場所での建替えも考慮すると、さらに複雑になる。この他、内部では前述した柱穴以外に土坑SK-27や土器群S I - 04・08~10が検出されている。埋土は凡そ3層に分かれている。上層は砂礫を多く含む黒灰色砂混じり土が堆積しており、ほとんどの焼失木材がこの層に含まれることから、家屋が焼失・崩壊後に堆積した土であると考えられる。この層を除去すると暗灰緑色砂質シルトとなり、上層と比較すると砂礫をあまり含まない層であるが、炭化物が含まれている。最下層は暗緑灰色粘質シルトで、遺構面のベース層となっている土である。住居床面は中層の暗緑灰色砂質シルトの上面と考えられ、最下層の暗緑灰色粘質シルトを用いて貼床としているものと推定される。遺物は上層埋土から古墳時代前期の土師器が出土しており(第8図: 1~5)、高坏(1)、器台(2)、小型丸底壺(3・4)、甕脚台部(5)等がある。1~3・5は庄内式期~布留式、4の小型丸底壺は布留式期の特徴をもっている。5は東海系S字口縁甕の脚台部である。また、SK-27からも庄内式期の甕(第34図: 64)が出土している。これに対して、土器群S I - 04・08~10の出土土器(第40図~第43図)は弥生時代後期のものがほとんどであった。SB-01に伴うものとすると、SB-01の時期は弥生時代後期まで遡る可能性も否定できないと考えられる。

#### SB-02

8区で検出している方形堅穴住居である。長軸の長さ3.8m、短軸の長さ3.6mの規模を持ち、ほぼ正方形を呈する。検出面から床面までの深さは約5cmを測り、上部に暗灰色砂混じり粘質土、床面上に暗灰色粘土を含む灰緑色砂質土が堆積していた。住居の壁に沿って幅約15cm前後、深さ20cm前後の壁溝が巡る。壁溝内の埋土は暗灰褐色粘土混じり砂質土であった。西壁溝では約0.9mの間で壁溝が途切れた形となっていた。その西壁溝が途切れたちょうど中間に径約7cm程のピットS P - 188と両先端の住居内部側には径10cm程のピットS P - 184・185が検出されており、さらに壁溝に沿ってその内側には径8~16cmの小型のピットが複数検出されている。この他にも床面

内部では複数のピットを検出しているが、竪穴住居の構造上、主柱穴となり得るのは S P - 194・199の2個の柱穴と推定される。S P - 199内には土師器小片が入っており、柱抜き取り後に混入したものと推定される。北壁溝に沿った内側には長円形を呈する土坑 S K - 28が検出されており、検出規模は  $1.0 \times 2.7$ m、深さは8cmを測る。東壁溝に接する箇所には検出規模  $0.5 \times 0.6$ m、深さ5cmで半長円形を呈する土坑 S K - 29とその南側には検出規模  $0.3 \times 0.3$ m、深さ17cmで不整円形を呈する土坑 S K - 30を検出している。S K - 30内には板状の木質遺物が残存していた。また、住居の外周には壁溝と平行して、幅0.18m、深さ6cmの浅い溝 S D - 17が検出されている。西壁溝側を除いて、コの字状に巡っているが、東壁溝、南壁溝からの距離は約0.6m、北壁溝からは0.6～1.1mを測り、北東隅部分が少々いびつに膨らんでいた。壁溝からの距離を考えると、ちょうど住居の屋根の先端が地面に接地する場所にあたり、屋根から垂下した水滴によって形成された痕跡であろうか。

#### S B - 03

8区で検出している掘立柱建物である。規模は梁間2間(3.2m)×桁行2間(4.1m)で、主軸はE-26°-Sである。柱穴掘形は長円形もしくは隅丸方形で、柱痕が確認されている。遺物は出土していない。

#### S B - 04

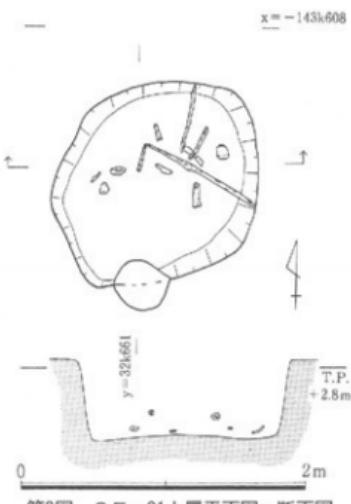
3・8区で検出している掘立柱建物である。規模は2間(3.1m)×2間(3.1m)で、平面形はほぼ方形を呈し、主軸を北東～南西方向とすると、E-47°-Sとなる。柱穴掘形は長円形もしくは円形で、すべての柱穴に柱根が残存していた。

#### S B - 05

2・3区で検出している。L字状にほぼ直角に曲がる溝 S D - 18が検出され、竪穴住居に伴う壁溝の一部と判断した。壁溝の深さは5cmを測る。全体の規模は北側側溝に切断され、調査区外に続いているため明確ではないが、平面形が方形もしくは長方形を呈する  $3.0 \times 4.0$ m程の規模を有するものと推定される。内部での主柱穴及びその他土坑等は検出していない。

#### S B - 06

2区で検出している掘立柱建物である。北側の一部が調査区外に続いているが、北側側溝内と北壁土層断面において柱穴を確認している。規模は梁間1間(2.8m)×桁行2間(3.4m)で、主軸はE-15°-Nである。南東隅の柱穴 S P - 34は S K - 07

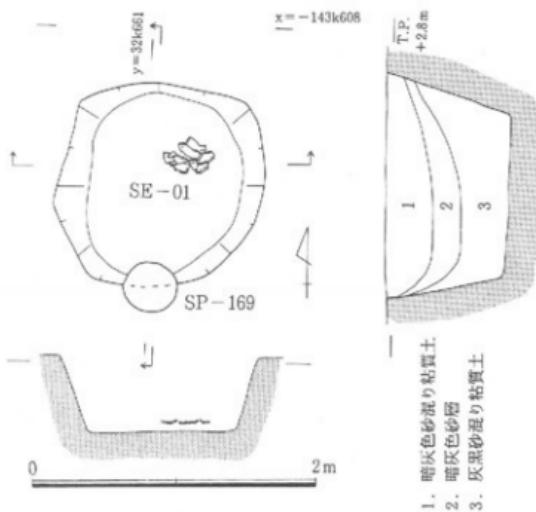


第9図 S E - 01上層平面図・断面図

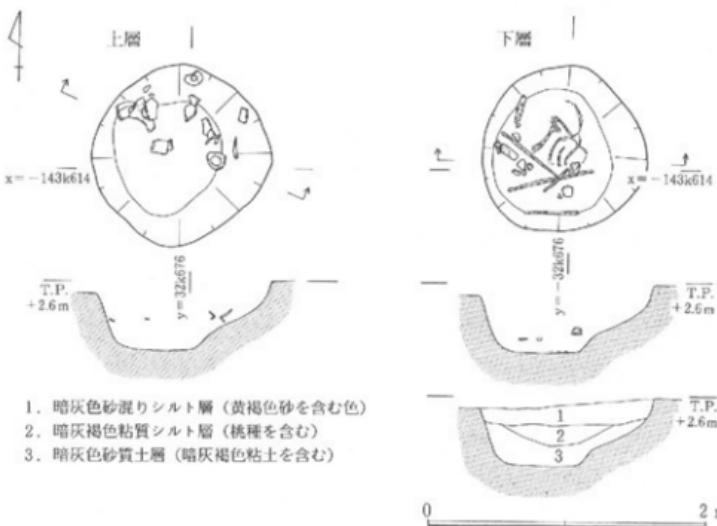
を切り込んで検出している。柱穴掘形は隅丸方形もしくは円形で、すべての柱穴に柱根が残存していた。

#### S B - 07

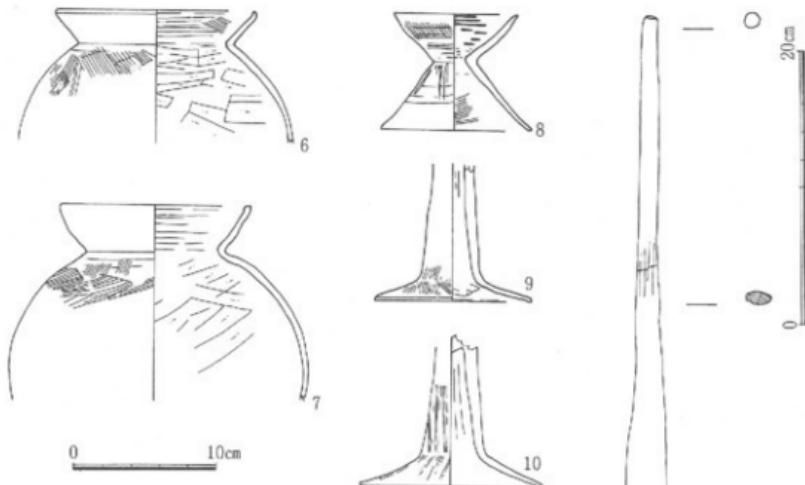
4・5区で検出している堅穴住居で、S B - 01を切っている。北側側溝に切断され、さらに既存の浄化槽による搅乱を受けており、検出状況が悪いため全体の規模は不明であるが、平面形が方形を呈する $5.0 \times 5.0\text{m}$ 程度の規模を有するものと推定される。幅8~12cm



第10図 SE-01下層平面図・断面図



第11図 SE-02平面図・断面図



第12図 SE-02出土遺物(1)

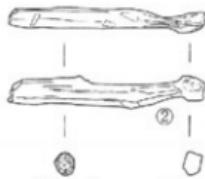
程度の3条ないし1条の溝が平行に巡り、最も外側の溝が略溝ではないかと推定される。深さは5cmを測る。内部でSP-37・54を検出しているが、主柱穴になり得るかどうか不明である。

#### SE-01(第9・10図)

3区で検出している不整円形を呈する井戸である。検出規模は1.44×1.46m、深さは88cmを測り、南側でSP-169に切られる状態で検出している。埋土は上部から暗灰色砂混じり粘質土、暗灰色砂、灰黑色砂混じり粘質土の順に堆積している。遺物は、遺構上層部で棒状の木質遺物が重なる状態で出土し、下層の遺構底面付近からは土師器甕片が出土している。

#### SE-02(第11~13図)

7区で検出している長円形を呈する井戸である。検出規模は1.18×1.18m、深さ49cmを測る。埋土は上部から黄褐色砂を含んだ暗灰色砂混じりシルト、暗灰褐色粘質シルト、暗灰褐色粘土を含む暗灰色砂質土の順に堆積している。遺物は遺構の中層付近に集中して庄内～布留式期の土器(第12図:6~10)が、それと同レベルもしくは、下部に木質遺物が重なるようにして検出された。その他に桃種が出土している。6・7は布留甕である。6は口縁端部を上方につまみあげており、7は内側に肥厚し平坦面をもつ。8の器台は受部を内湾気味に外に開き端部は外反し薄く丸味をもつ。9・10は庄内～布留式期の高环脚部で、9は端部に丸味をもたせて下方につまむ。10は端部が丸味をもって終わる。木質遺物はほとんどが自然木であったが、



第13図 SE-02  
出土遺物(2)

それに混じって製品が2点(第13図:①・②)含まれていた。①は棒状の材の一方をヘラ状に加工している。長さ39.6cmでヘラ状に加工された先端部で幅3.2cmを測る。②は棒状を呈し、先端部を彎状に削り出しており、弓の一部と推定される。

#### SK-06(第14図)

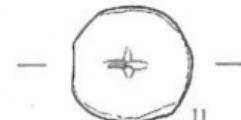
10区で検出している不定形の土坑で、検出規模は $0.8 \times 1.0\text{m}$ 、深さは12cmを測り、浅いすり鉢状を呈する。埋土は灰色砂混じり土である。遺物は素文鏡(第14図:11)が遺構上面の精査時に出土しているが、土器は出土していない。素文鏡はその出土状況から確実に遺構内部から出土したとは断定できないが、本遺構出土遺物として取り扱っておく。素文鏡は青銅製で、径21.7~20.5mmを測り、きれいな円形ではなくいびつである。中央に鉢を持ち径2mm程の円形の孔が貫通する。鉢までの高さは2.7mmである。

#### SK-07(第15・16図)

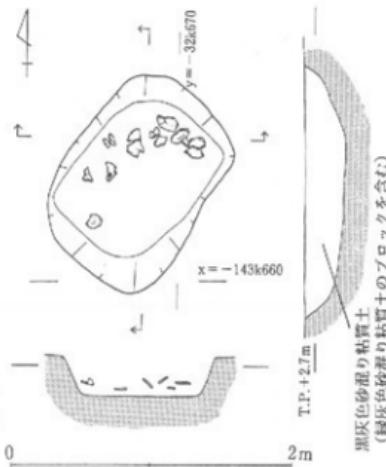
2・3区で検出している隅丸長方形を呈する土坑である。検出規模は $1.56 \times 1.12\text{m}$ 、深さは16cmを測り、北西隅でSB-06を構成する柱穴SP-34に切られる状態で検出している。埋土は緑灰色砂混じり粘質土のブロックを含む黒灰色砂混じり粘質土が堆積している。遺物は桃種や布留式期の土器(第16図:12~14)が出土している。12・13は高坏である。12は丸味のある底部から大きく外反する口縁部をもち、端部は丸味をもつ。13は坏部のみである。上方に大きく開き、端部は薄く外反する。14は器台で、脚部は下方にラッパ状に開き、受部は頸部から口縁部にかけて外方に伸び、端部は丸味をもつ。

#### SK-08(第17図)

3・4区で検出している不定形の土坑である。検出規模は $0.78 \times 0.79\text{m}$ 、深さ28cmを測る。埋土は上部より暗灰色砂混じり粘質土、黒灰色砂混じり粘質土、灰黒色砂混じり粘質土の順に堆積している。遺物は布留式期の土器や獸骨(イノシシ)が出土している。土器で図化し得たのは高坏(第17図:15)の1点のみである。水平方向に伸びる裾部から直立する脚柱部にゆるやかに外上方に向かう坏部をもつ。器壁には厚みがあり、端部はやや薄くなる。坏底部に布目の痕が残る。



第14図 SK-06  
出土素文鏡



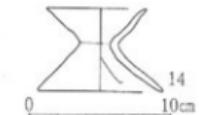
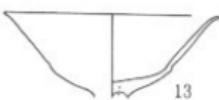
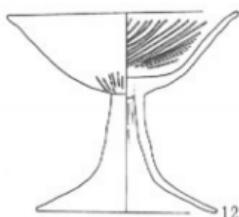
第15図 SK-07平面図・断面図

### SK-09(第18図)

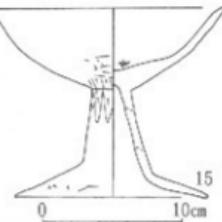
9区で検出している不定形の土坑である。検出規模は1.25×1.25m、深さは42cmを測り、SD-13を切り、柱穴SP-60に切られる状態で検出している。埋土は上部より白色粘土を含む暗灰色砂混じり粘質土、植物遺体と炭化物が混じる黒灰色砂混じり粘質土、緑灰色砂混じり粘質土、灰黑色砂混じり粘質土の順に堆積している。遺物は庄内式～布留式期の土器が出土しているが、図示し得たのは複合口縁壺(第18図：16)の1点のみである。肩部から口縁部の残存で、直立した頸部と水平方向に伸びた後、稜をなして大きく外反する口縁をもち、端部は内傾する平坦面をもつ。調整は口縁部外面がヨコナデ、内面はヨコハケとヨコナデによる。

### SK-10(第19～24図)

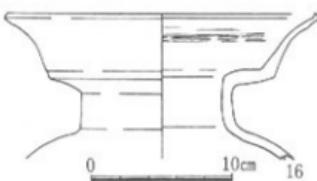
7・8区で検出している不定形の土坑である。検出規模は4.14×2.8mと大型で、深さは70cmを測る。SK-31に切られている。埋土は上部に黒灰色砂混じり粘質土、暗褐色砂質土、炭化物を含む灰黑色砂混じり粘質土、暗灰色砂混じり粘質土の順に堆積しており、これらの層から主に土器(第21図：17～26・第22図：27～41)が出土している(SK-10上層)。下部は炭化物を含む暗灰色砂混じり粘土、暗灰色砂混じりシルト、そしてそれを切り込むように中央部に黒褐色粘土が堆積している。また、暗灰色砂混じりシルトの上面には一面に焼土が薄く堆積しているのが観察された。これらの層には自然木を含む木製品(第24図：③～⑨・第25図：⑩)が含まれていた(SK-10下層)。その他に大量の桃種と獸骨(イノシシの牙を含む)と碧玉製管玉が1点出土している。土器は主に布留式期のもので、壺(17)、丸底鉢(18・19)、高杯(20～24)、器台(25・26)、甕(27～30)、複合口縁壺(31)、小型丸底壺(32～41)等がある。17は体部のみの残存である。最大径が体部下半にあり、平底を呈する。肩部に櫛状工具によるゆるやかな波状文が施され、中段より下はヘラミガキが施されている。東海系(バレスタイル)の複合口縁壺であろう。18・19は有段口縁をもつ丸底鉢で、19は小型の部類に入る。



第16図 SK-07出土遺物



第17図 SK-08出土遺物



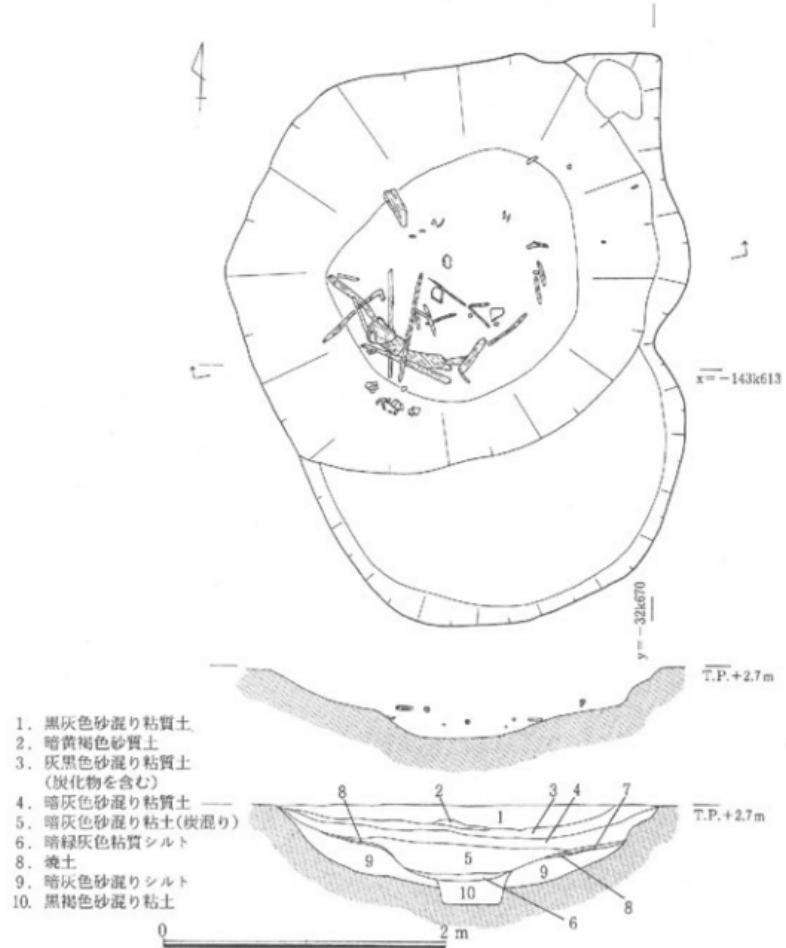
第18図 SK-09出土遺物

20~24の脚柱部にはいずれも絞り痕が残っている。25は細かくハラミガキが施された赤橙色を呈する精製された土器である。脚台部の内面はハケメが施されている。26は脚台部に円形の透かし孔が3方より穿たれている。27は内湾して立ち上がる口縁部をもち、端部は内側に肥厚し丸味をもって終わる。28の端部はわずかに外傾する平坦面を有している。29は逆ハの字形に開く口縁部をもち、端部は内側に肥厚し外傾する平坦面を有する。30は小型の甕で、球形の体部にくの字に屈曲した頸部から外上方に伸びた口縁部をもち、端部はやや外傾し平坦面を有す。器壁は厚めである。31は



第19図 SK-10上層平面図・断面図

口縁部を欠くが、肩部の張らない体部に外上方に直立する頸部をもち、体部と頸部の境界に角張った貼付突帯をめぐらしている。小型丸底甕には口縁部が退化気味のもの(32・33)と発達したもの(34~39・41)がある。40は口縁部を欠く。41はやや平底気味の底部をもつ。③は厚さ6mmの薄い板材の両側を若干内側に削り、下端は三角上に大きく削り込んでいる。上部に約1cm程度の孔が貫通している。用途は不明であるが、人形木製品として報告しておく。④は薄い板状を呈し、円孔が1箇所穿たれている。用途不明製品である。⑤・⑦は薄い板状で、その形状よりなすび形農工具の刃先部分であると考えられる。⑥は用途不明製品である。つる状のものを巻いた痕跡が残り、先端に炭化米が付着していた。農工具の柄の部分と推定される。⑧は手斧の柄で、つる状のものを巻いた痕跡が2箇所残る。⑨は棒状を呈している。用途は不明である。⑩はえぶりである。柄

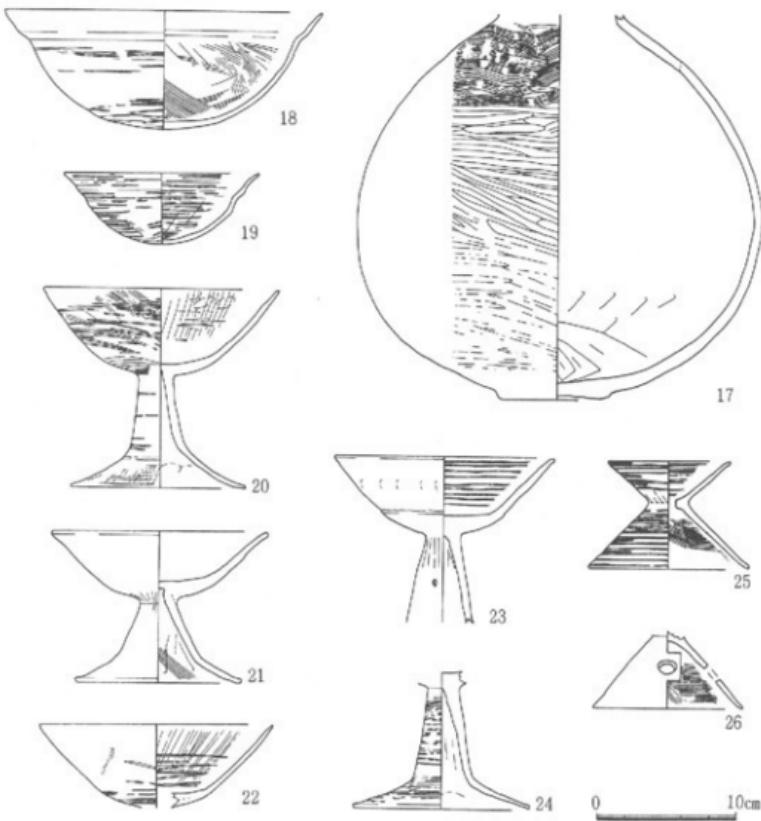


第20図 SK-10最下層平面図・断面図

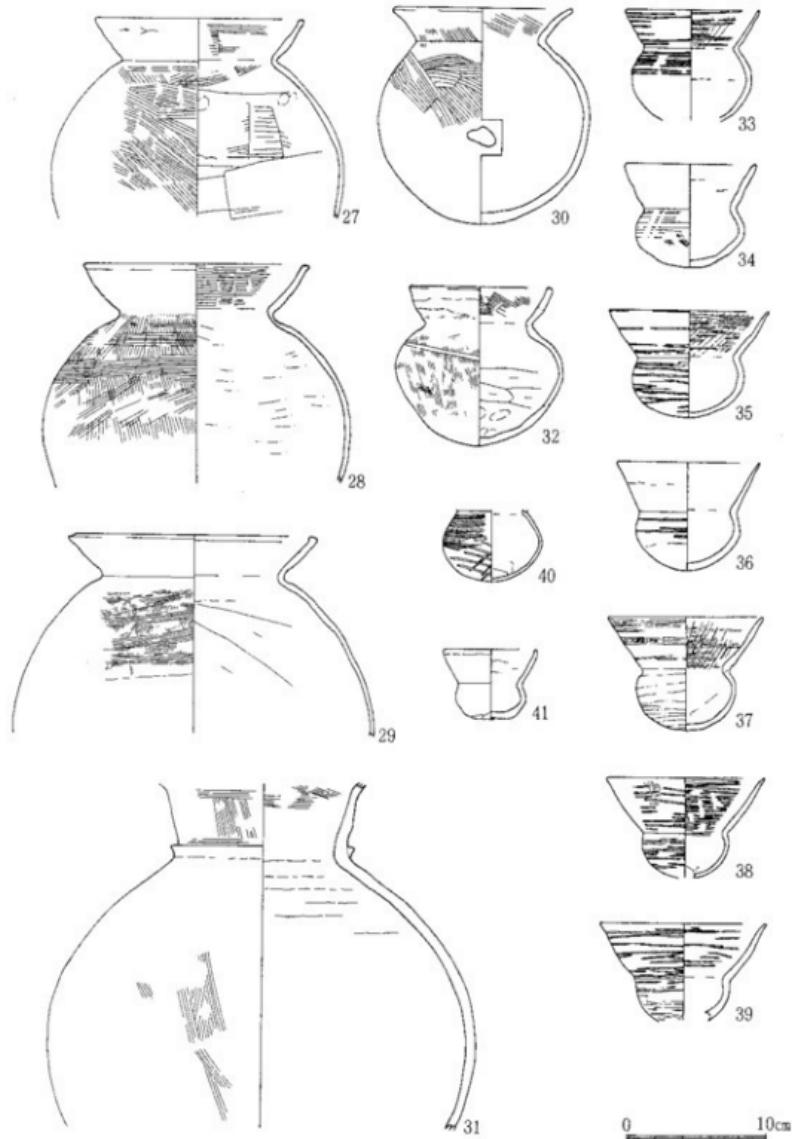
を差し込む孔と左右2箇所に支え木の挿入孔となる方形孔をもつ。

S K-11(第25・26図)

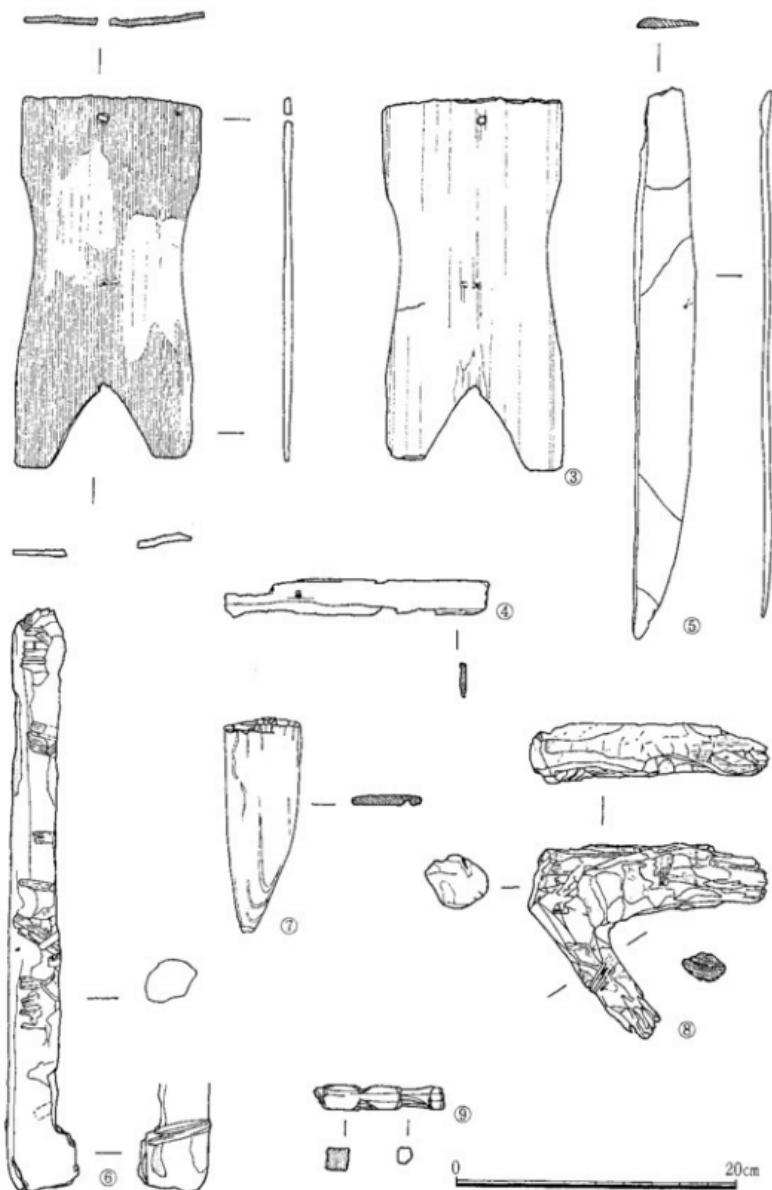
2・7区で検出している不定形の土坑である。検出規模は2.46×2.4m、深さは49cmを測る。埋土は上部より灰黒色砂混じり粘質土、植物遺体を含む暗茶褐色粘質土、黄灰色砂、灰黒色粘土、暗灰色砂混じり粘土、暗緑灰色砂混じり土の順で堆積している。遺物の出土状況は上層と下層に分かれる。上層では土師器片と板状の木質遺物が散在し、下層では遺構底面近くより壺が出土し



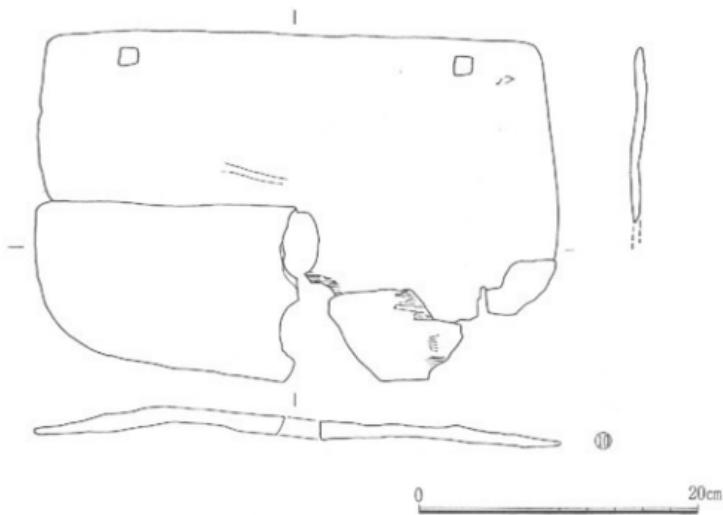
第21図 SK-10出土遺物(1)



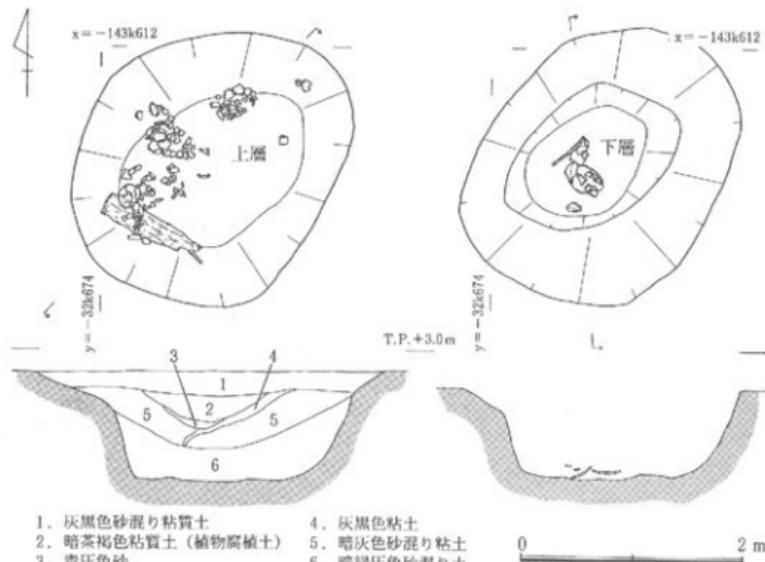
第22図 SK-10出土遺物(2)



第23図 SK-10出土遺物(3)

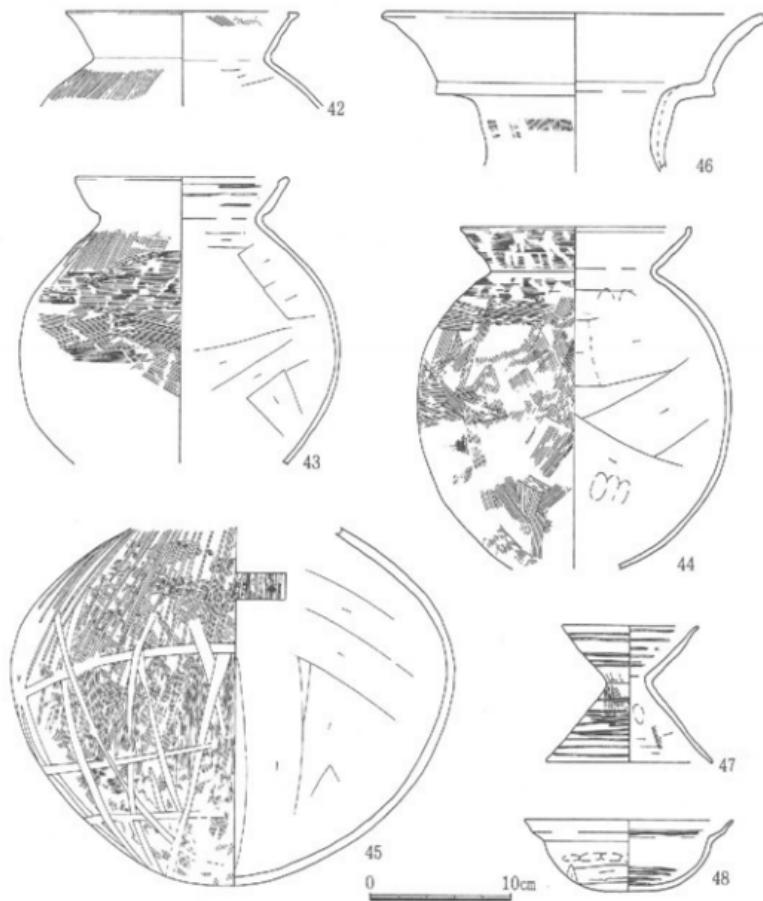


第24図 SK-10出土遺物(4)



第25図 SK-11平面図・断面図

ている(第26図: 42~48)。その他獸骨が出土している。遺物は布留式期のものである。42~44は布留甕で、口縁端部が内側に肥厚して上部に面をもつもの(42)、内傾する面をもち内側に肥厚するもの(43)、内傾して内側に肥厚するもの(44)がある。45は壺で口縁部を欠く。体部最大径は中位よりやや上にあり肩の張った体部をもつ。体部の中位から底部付近に、使用時に用いたと推



第26図 SK-11出土遺物

定されるカゴメの痕がくっきりと残っている。46は複合口縁壺で、口頸部のみ残存する。細く縮まった頸部から水平に伸び、屈曲部は肥厚し稜をなす。口縁部は大きく外反し、端部は丸味をもって終わる。47は器台で、円錐状の脚柱部に内湾気味に外に開く受部をもち、端部は外反し薄く丸味をもって終わる。48は有段口縁をもつ丸底鉢で、外反する口縁部をもち、端部は薄く丸味をもつ。

#### SK-12

9・14区で検出している不整長円形を呈する土坑である。検出規模は $0.65 \times 1.35m$ 、深さは22cmを測る。埋土は上部より灰黒色砂混じり土、暗緑灰色砂混じり土が堆積している。

#### SK-13

14区で検出している不整楕円形を呈する土坑である。検出規模は $0.42 \times 0.75m$ 、深さは28cmを測る。埋土は灰黒色砂混じり土が堆積している。

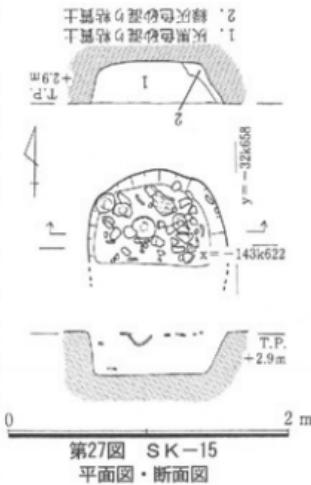
#### SK-14

9区で検出している不整長円形を呈する土坑である。検出規模は $0.6 \times 1.1m$ 、深さは20cmを測る。SP-96を切っている。埋土は上部より灰黒色砂混じり粘質土、暗緑灰色砂混じり土が堆積している。

#### SK-15(第27～29図)

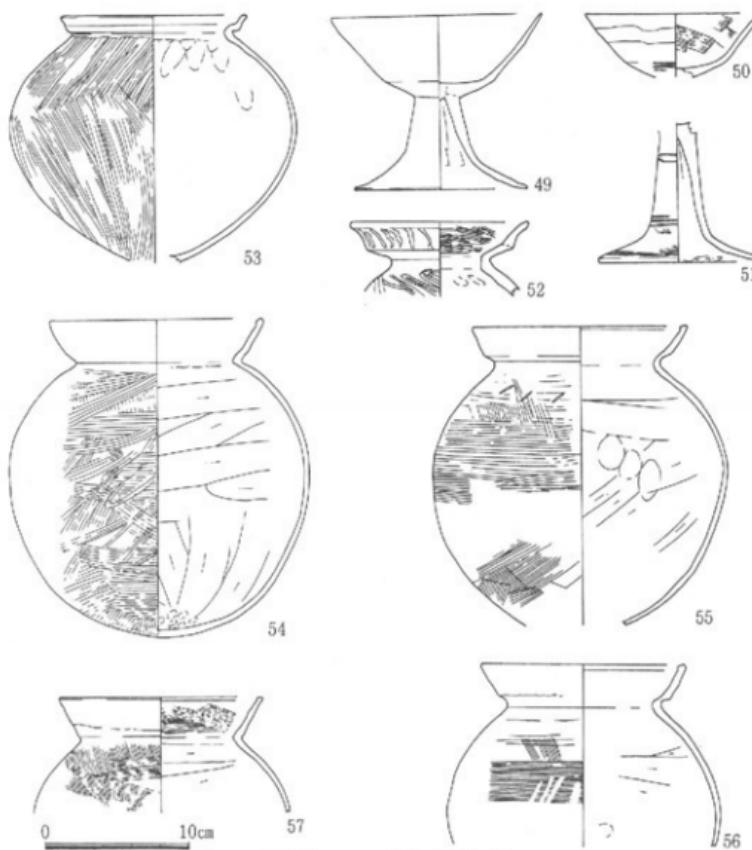
14区で検出している円形を呈する土坑である。南側側溝に切断されているが、検出規模は $0.78 \times 0.96m$ 、深さは30cmを測る。埋土は上部より灰黒色粗砂混じり粘質土、緑灰色砂混じり粘質土が堆積している。遺物は遺構内部にぎっしり詰まつた状態で土器(第28図:49～57)が出土している他、板材(第29図:⑪)が1点出土している。土器は布留式期のものである。49～51は高坏である。

49は壺部に稜線をもつもので、口縁部は外上方へ開き、端部は薄い。摩滅が著しく調整が不明瞭であるが、外部にヘラミガキ、内部に放射状暗文の痕跡が微かに残っている。50は壺部のみで、稜はもたない。底部から屈曲し外上方に内湾気味にのびる口縁部で端部は外反気味に薄く終わる。51は脚部のみで、水平に伸びる辯部と直立する脚柱部をもつ。辯部端部はわずかに面をもつ。52は複合口縁壺である。細い頸部とS字状の口縁をもち、端部はわずかにつまみあげ丸味をもつて終わっている。口縁部外面にやや太めのヘラミガキをタテ方向に等間隔で施し、内面はヨコ方向の密なヘラミガキを施している。53はS字状口縁をもつ東海系台付甕である。脚台部を欠く。全面に熱を受けた痕が残り、煤が付着している。54～57は布留甕である。54はやや綫長の球形の体部に外上方に開く口縁部をもつ。端部は丸味をもち内傾して内側に肥厚し



第27図 SK-15  
平面図・断面図

ている。体部外面はタテハケの後肩部にヨコハケ、内面はヘラケズリを施している。55は球形に近い体部にやや内湾気味に開く口縁部をもつ。端部は内側に肥厚し上方に平坦面をもつ。頸部に強いヨコナデが施されており、肩部にタテハケの後ヨコハケを施し、烈点文を配している。56は体部中位から下を欠いているが球形の体部と推定され、頸部に強いヨコナデが施されている。内湾気味に開く口縁部をもち、端部は内側に肥厚しわずかに内傾する面をもつ。57は体部下半を欠く。逆ハの字状に開く口縁部をもち、端部は内側に肥厚している。⑩は厚さ3.8cmの板状を呈する。側縁部近くにヒビが入る。手斧によるものであろう加工痕が残る。



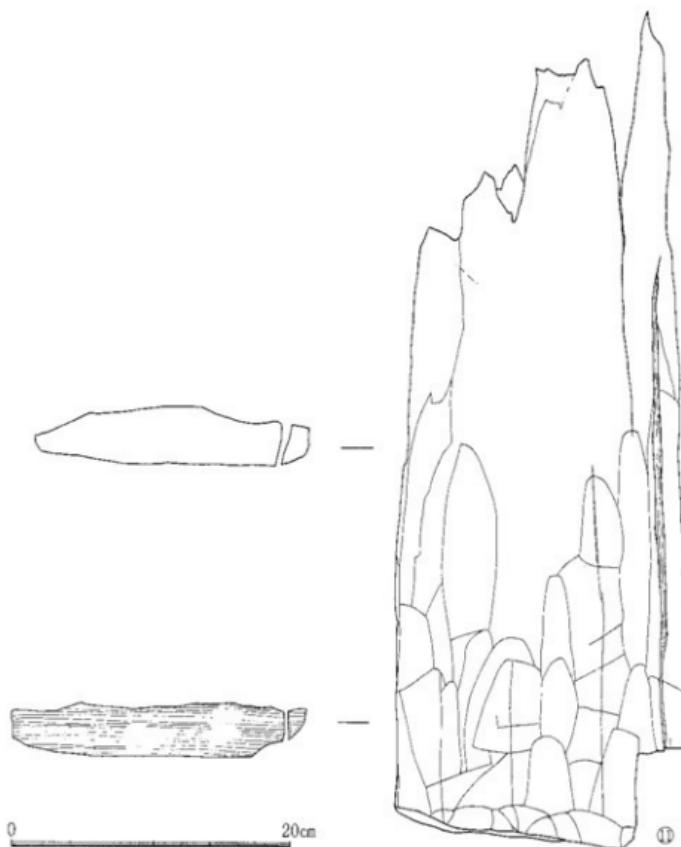
第28図 SK-15出土遺物(1)

### S K-16

4区で検出している不整長円形を呈する土坑である。検出規模は $0.74 \times 1.82m$ 、深さは18cmを測る。埋土は上部より炭化物が混じる灰黒色砂混じり粘質土、暗緑灰色砂混じり粘質土が堆積している。

### S K-17(第30図)

14区で検出している楕円形を呈する土坑である。検出規模は $0.23 \times 0.25m$ 、深さは26cmを測る。埋土は灰黒色砂混じり粘質土で、遺物は小型丸底壺(第30図: 58~60)が出土している。58・59は



第29図 S K-15出土遺物(2)

いずれも口縁部を欠く。58は粗雑なつくりで表面の剥離が著しいが、肩部にタテハケがわずかに残る。59は平底気味の底部をもつ。表面の剥離が著しい。60は球形の体部に外上方に開く短い口縁部をもち、端部は丸味をもって終わる。粗雑なつくりである。

### SK-18

10区で検出している不定形を呈する土坑である。検出規模は $0.85 \times 1.0$ m、深さは25cmを測る。SD-14を切っている。埋土は上部より黄灰色粗砂を含む灰黒色砂混じり土、灰黒色砂混じり粘質土、緑灰色砂混じり土が堆積している。

### SK-19(第31・32図)

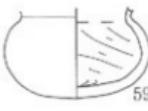
2区で検出している不整楕円形を呈する土坑である。ST-02が西側へ向かって落ちていくちょうど肩部で検出しておらず、検出規模は $0.78 \times 0.88$ m、深さは30cmを測る。南側に接してSK-20を検出しているが、土層断面の観察からSK-20に切られている。埋土は黒灰色粘質土で、遺物は布留甕(61)、小型丸底壺(62)等が出土している。61は球形の体部にやや内湾気味に逆への字状に開く口縁部をもち、端部は内側に肥厚し上方に平坦面を有す。体部外面はタテハケの後、肩部にヨコハケが施されている。62は球形の体部に逆への字状に開く短い口縁部をもつ。端部は丸味をもって終わっている。調整は全体にナデが施されている。粗雑なつくりである。

### SK-20(第31・33図)

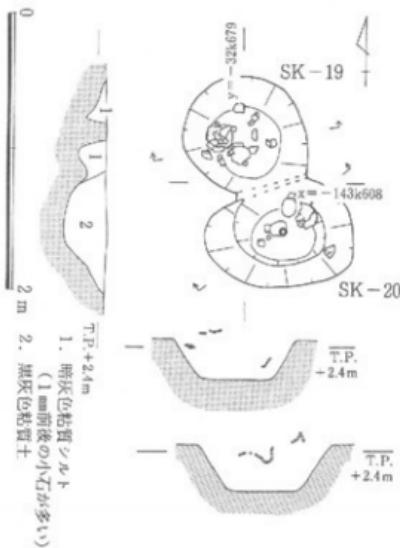
SK-19を切っている不定形を呈する土坑である。検出規模は $0.7 \times 1.04$ m、深さは20cmを測る。埋土は暗灰色粘質シルトで、土師器壺、小型丸底壺(63)等が出土している。63は偏球形の体部に大きく発達した逆への字状に開く口縁部をもち、端部は薄く丸味をもって終わる。外面は丁寧にヘラミガキが施され、口縁内部に放射状暗文が残る。

### SK-21

7区で検出している長円形を呈する土坑



第30図 SK-17  
出土遺物



第31図 SK-19・20平面図・断面図

である。検出規模は $0.64 \times 0.78$ m、深さは40cmを測る。埋土は上部より灰緑色細砂を含む暗灰黒色粘質シルト、暗褐色砂混じりシルト、灰緑色細砂、暗灰色粘質シルト、暗灰緑色細砂を含む暗灰色粘質シルトが堆積している。東側に隣接してSK-22を検出している。

#### SK-22

SK-21の東側で検出した楕円形を呈する土坑である。検出規模は $0.39 \times 0.57$ m、深さは16cmを測る。埋土

は上部より暗灰色砂質シルト、炭化物を含む暗灰色砂混じりシルトが堆積している。

#### SK-23

3区で検出している不整長円形を呈する土坑である。検出規模は $0.7 \times 1.15$ m、深さは19cmを測る。埋土は炭化物を含む黒灰色砂混じり粘質土が堆積している。SB-04を構成する柱穴SP-12によって切られている。

#### SK-24

9区で検出している不定形を呈する土坑である。検出規模は $0.65 \times 0.96$ m、深さは16cmを測る。埋土は上部より暗灰褐色砂混じり粘質土、茶褐色砂質シルト、暗灰色砂質シルト、緑灰色砂質シルトが堆積している。SP-114によって切られている。

#### SK-25

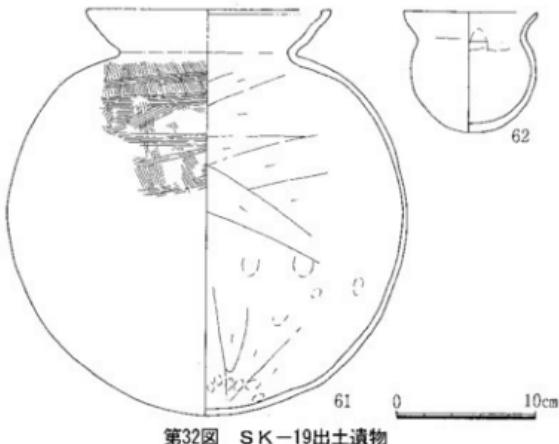
3区で検出している楕円形を呈する土坑である。検出規模は $0.65 \times 0.75$ m、深さは15cmを測る。埋土は上部より炭化物を含む黒灰色砂混じり粘質土、緑灰色砂質シルトが堆積している。

#### SK-26

3区で検出している不整楕円形を呈する土坑である。検出規模は $0.6 \times 0.7$ m、深さは33cmを測る。埋土は砂を含む黒色粘土が堆積している。

#### SK-27(第34図)

10区で検出している不定形を呈する土坑である。検出規模は $1.8 \times 0.8$ m、深さは20cmを測る。



第32図 SK-19出土遺物



第33図 SK-20  
出土遺物

埋土は黒灰色粘質土で、遺物は庄内甕(64)が出土している。64は体部からくの字に屈曲する口縁部をもち、端部は上方につまみあげて終わる。体部外面はタタキメが残り、内面はヘラケズリが施されている。SB-01内に位置しており、関連する遺構として、SB-01の時期を示唆しているものと考えられる。

#### SK-28

8区で検出している。SB-02床面内部で検出しており、既にSB-02の項で述べているが、埋土は暗灰色粘質土が堆積している。

#### SK-29

8区で検出している。SB-02床面での検出で、埋土は暗灰色砂混じり粘質土が堆積している。

#### SK-30

10区で検出している。SB-02床面での検出で、埋土は暗灰色砂混じり土が堆積しており、木質遺物が残存していた。

#### SK-31

2・3・7・8区にまたがり検出している隅丸長方形を呈する土坑である。検出規模は1.68×1.82m、深さは15cm程度を測る。浅いすり鉢状を呈している。SD-10・11及びSB-04の柱穴SP-10に切られている。埋土は黒色粘質シルトが堆積している。

#### SD-10

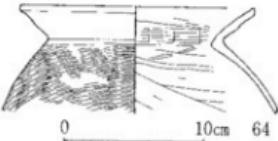
3・8区で検出している円弧状に走る溝である。円弧状と表したが、正確には角度をもって巡っている。SK-31を切るが、途中SD-11によって2度切られており、また、SB-04を構成する柱穴SP-10・16にも切られている。幅0.2m、検出長3.75m、深さ7cmを測り、埋土は黒色粘質シルトが堆積している。なお、本遺構は検出状況から竪穴住居の壁溝の可能性を残している。

#### SD-11

8・13・14区で検出している。蛇行しながら北西から南東方向に走り、北西端は袋状に終結し、南東端は南側側溝により切られているが、調査区外へと続いているものと推定される。幅0.25m、検出長16.15m、深さは23cmを測る。途中SP-203、SB-03の柱穴SP-24・28とSB-04の柱穴SP-16に切られ、北西端でSD-10、SK-31を切っている。埋土は黒色粘質シルトが堆積している。

#### SD-12

2・7区で検出している。ST-02の東縁に沿うように北東から南西方向にほぼ直線状に走る溝で、幅0.1m、長さ4.15m、深さは15cmを測る。途中SE-02とSP-156によって切られており、両端は袋状に終結している。埋土は青黒色砂混じり粘質シルトが堆積する。



第34図 SK-27出土遺物

### SD-13(第35図)

4・9区で検出している円弧状に走る溝である。検出規模は幅0.5m、長さ9.0m、深さは11cmを測る。北端は北側側溝に切断されているが、調査区外へ続いているものと推定され、南端は袋状に終結する。北端から途中までは幅が約2倍を測るSD-19と重複して検出しているが、これを切っている。また、SK-09、SP-60・63・66に切られている。埋土は黒色粘質シルトである。遺物は小型丸底壺(65)が出土している。65は球形の体部で頸部はある

ま  
りすばまらず口縁部へ続いている。口縁端部を欠いているが、内湾気味に開く口縁部はあまり発達せずに終わるようである。

### SD-14

10区で検出している東西方向に直線状に走る溝である。検出規模は幅0.15m、長さ4.2m、深さ10cm前後を測り、東端は東側側溝に切断されるが、調査区外へ続いており、西端はSP-71に切られて終結する。途中SK-18にも切られている。埋土は灰黒色砂混じり粘質シルトが堆積している。遺物は布留式期の小型丸底壺が出土している。

### SD-15

7区で検出しているSK-10・11の間を北東から南西方向へ直線状に走る溝である。検出規模は幅0.5m、長さ5.25m、深さ8cmを測る。北東端は袋状に終結し、南西端はSE-02に切られて終結している。埋土は暗灰褐色粘質シルトが堆積している。

### SD-16

2区で検出しているほぼ東西方向に走る溝である。検出規模は幅0.18m、長さ5.5m、深さ6cmを測る。両端とも袋状に終結し、埋土は黒灰色砂混じり粘質土が堆積している。

### SD-17

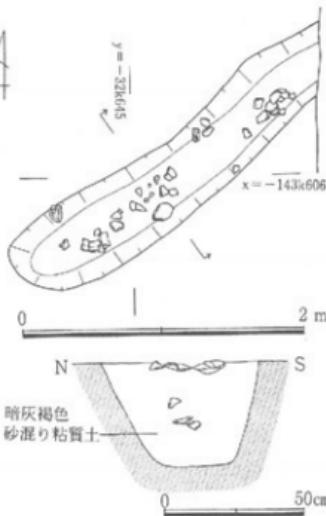
8・9区で検出している。SB-02の項で記述したように、幅0.18m、深さ6cmを測り、SB-02の西壁側を除いて、コの字状に巡る溝である。埋土は黒色粘質シルトが堆積している。

### SD-18(第36図)

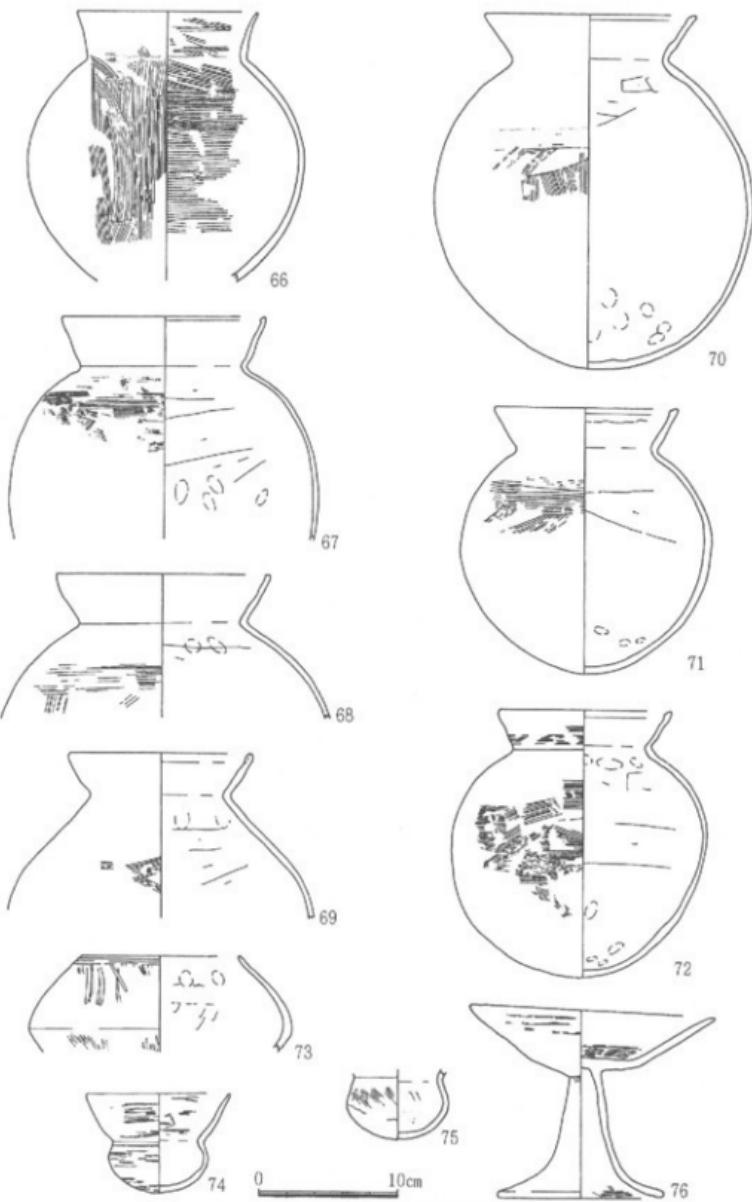
5区で検出しておおり、北東から南西方向へ直線状に走る溝である。検出規模は幅0.6m、長さ2.8m、深さ37cmを測り、東端は東側側溝に切断されるが、調査区外へ続いているものと推定され、西端は袋状



第35図 SD-13  
出土遺物



第36図 SD-18平面図・断面図



第37図 S I - 01出土遺物(1)

に終結する。S B-01内に位置しており、これを切っていることになる。埋土は暗灰色砂混じり粘質土で、遺物は土器器甕等の他、獸骨が出土している。

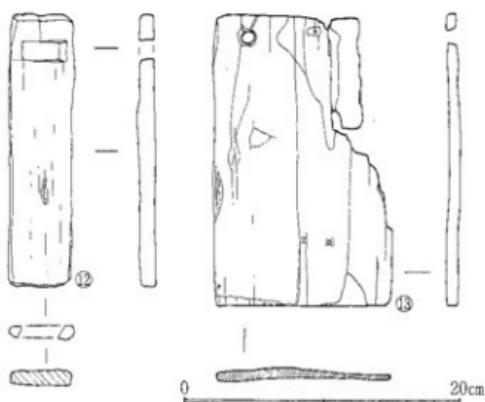
#### S D-19

S D-13の項で既に説明しているが、S D-13に途中まで切られながら重複して検出されている。検出規模は幅0.9m、長さ5.0m、深さ15cmを測る。北塁は北側側溝に切断されているが、調査区外へと続いている。埋土は黒灰色粘質シルトが堆積している。

#### S I-01(第37・38図)

7区で検出している土器溜りで、S T-02の肩部に約2.5×3.8mの範囲で土器が集積していた他、木質遺物(第38図:⑪・⑫)が出土している。遺物は布留式期のものがほとんどであるが、弥生時代後期の土器も含まれていた(第37図:66~76)。66~72は布留甕である。口縁部が直線的に立ち上がるもの(66)、逆ハの字状のもの(67~72)がある。67は内湾気味に開く口縁部をもち、端部は丸味をもって内側に肥厚して終わる。器壁は薄い。68も内湾気味に開く口縁部をもつが、端部は上方に向かって平坦面をもち内側に肥厚している。

69も内側に肥厚するが、折り返しが雑である。体部は肩が張らない、なで肩をしている。70・71・72は球形の体部をもつ。口縁端部は内傾する平坦面をもち、内側に肥厚している。73は弥生時代後期の無頸甕である。胴部最大径から大きく屈曲して内傾する口縁部をもち、端部は丸く終わる。口縁部外面に3条の擬凹線が施されている。体部下半を欠くため、断言はできないが、台が付くことも考えられる。74・75は小型丸底甕である。74は扁球形の体部に、やや内湾し直行して開く口縁部をもつ。器壁は薄い。体部外面はヘラミガキ、底部はヘラケズリの後ヘラミガキが施されている。75は口縁部を欠くが、同様の体部をもつ。76はほぼ完形の高坏である。脚柱部から短い裾部が水平方向にのび、端部は外側に面をもつ。坏部は浅く大きく開き、端部は丸味をもって終わる。坏部外面はヨコハケの後ヨコナデで、内面はヨコナデと見込みに放射状にハケメが施されている。脚柱部は内外面ともヘラケズリ、裾部は外側がナデ、内面はヨコハケが施されている。木製品では板材に方形の孔を施したもの(⑪)、円形の孔を施したもの(⑫)が出土している。いずれも用途は不明である。



第38図 S I-01出土遺物(2)

### S I -03 (第39図)

2区で検出した土器溜りで、S T -02肩部から東へ約1.5mの地点に位置している。小型丸底壺(77)が出土している。77は稜が明確な算盤球形の体部に外上方に直行して開く口縁部をもつ。端部は丸味をもって終わっている。口縁部外面はヨコナデ、内面はハケメによる調整で、体部外面は稜より下半から底部を含めヘラケズリ、内面はナデが施される。粗雑なつくりである。

### S I -04(第40図)

S B -01内の土器群である。土師器土器片の他に土質支脚(78)が出土している。手捏ねによる製作で、左上から右下へ薬指、中指、人差し指の3本で成形したことが窺える。

### S I -08 (第41図)

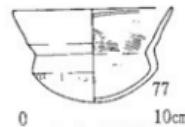
S B -01内で検出された土器群である。

遺物は弥生時代後期の土器が出土している

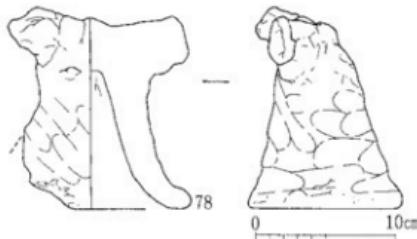
(第41図：79～83)。79・80はミニチュアの壺である。81は鉢で、底部を欠いているが内湾しつつ上方へ伸びる体部から外反する口縁部もち、端部は丸味をもって終わっている。82は壺である。中央がわずかに凹心底部をもつ。外面はタタキメ、内面はハケメとヘラミガキで調整が施されている。体部上半から口縁部を欠くが、故意に打ち欠いたようで、鉢に転用したものであろうか。83は壺である。体部上半から口縁部を欠く。体部は内外面ともヘラミガキが施されている。底部は外面が未調整でワラ状の痕跡が残り、内面に突き込み痕の凹みが残る。

### S I -09(第42図)

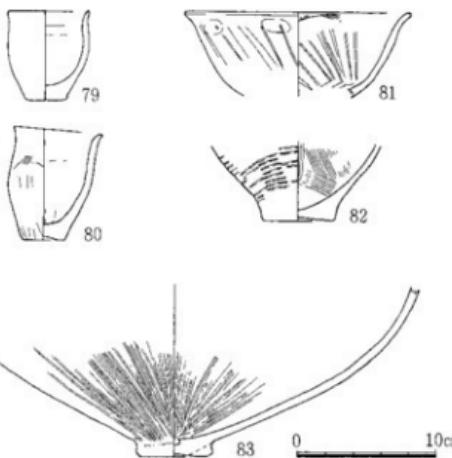
S B -01内で検出された土器群である。遺物は弥生時代後期の長頸壺(第42図：84)が出土し



第39図 S I -03  
出土遺物



第40図 S I -04出土遺物



第41図 S I -08出土遺物

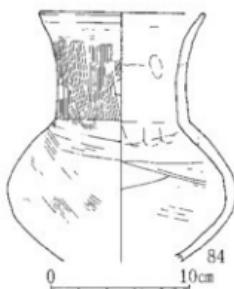
ている。底部を欠くが、張りのある体部に直立して立ち上がる頸部をもつ。口縁部は外反して口縁部外面に強いナデを施し、端部は丸味をもって終わる。体部外面は上半部が板状工具によるナデ、中位下間にナナメハケメが施されている。内面は板ナデと肩部に指頭圧痕が残る。

#### S I -10(第43図)

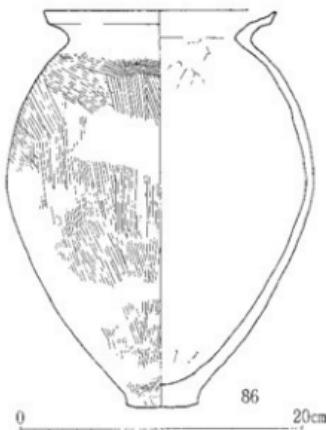
S B -01内で検出された土器群である。遺物は弥生時代中期～後期の土器が出上している(第43図:85・86)。85は鉢である。壺形の体部から内湾気味に外上方に伸びる。口縁端部は薄く丸く終わっている。体部外面は摩滅が著しく、板ナデ状の原体痕がかすかに残る。内面は板ナデが残る。86は甕で、外上方に大きく開く口縁部は外反する端面をもち、端部は上方につまみあげている。体部外面はタテハケ、内面にはヘラケズリが施されている。

#### S T -02(第44～52図)

調査区の西側で検出された落ち込み状の遺構である。前述の第3遺構面検出の段階において既に現れていたが(S D -05)、第4遺構面では調査区の南(12・13区)ではかなり東側へ入り込んだ状況で検出された。最も落ち込んでいるのは調査区の南西隅付近で、T. P. +2.28mを測り、全体に南西に向かって傾斜している。埋土は灰白色粗砂が所々に混入する青黒色砂混じり粘土が堆積している。当時の河内湯・河内湖の汀線と推定され、ある時期にはこの辺りまで水が来ていたのではないかと推定される。水際の近くに木質遺物を含む土器が集積する所(S I -01～03)があり、土器や木製品が廃棄された場所と考えられる。土器集積以外に、S T -02を掘り下げていく段階において多くの遺物が出土しており、土器・土製品(第44図:87～97)、石器(第45図:98)、骨角製品

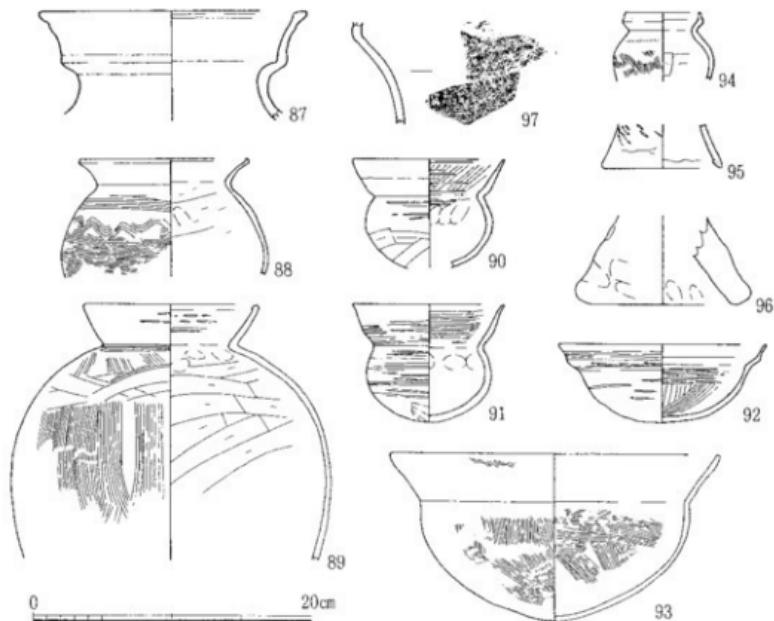


第42図 S I -09出土遺物



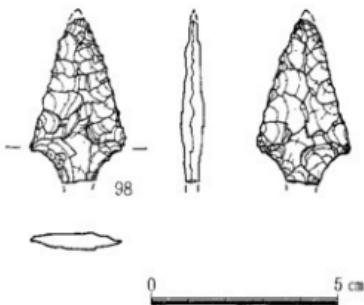
第43図 S I -10出土遺物

(第46図:99・第47図:100・101)の他に木製品(第48図:⑪・第49図:⑫・第50図:⑬～⑯・第51図:⑭～⑯・第52図:⑰～⑲)などがあり、桃種や獸骨類も出土している。土器は布留式期のものがほとんどであるが、庄内式期まで遡るものも含まれている。87は複合口縁壺である。体部の大半を欠く。頸部から外反して立ち上がる口縁部をもち、端部は肥厚して内側に内傾する平坦面をもち外反気味に終わる。内外面ともナデによる調整が施されている。88・89は甕である。

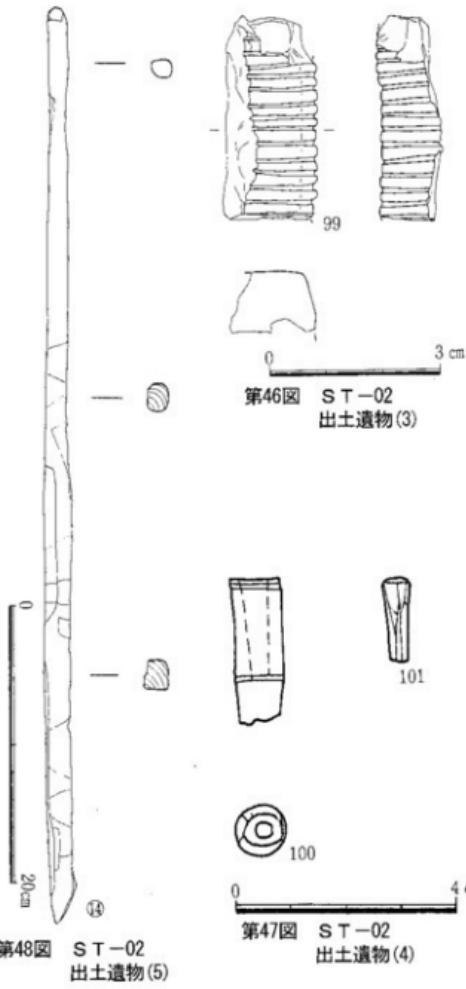


第44図 ST-02出土遺物(1)

88は球形の体部にくの字に屈曲する口縁部をもち、端部は内上方につまみあげ丸味をもって終わる。肩部に粗いヨコハケと波状文、体部内面はヘラケズリが施されている。器壁は薄い。庄内～布留式期にかけてのものであろう。89は体部からやや内湾気味に外方へ伸びる口縁部をもつ。端部は内傾する平坦面をもち、肥厚して終わる。体部外面はタテハケの後肩部をヨコハケ、内面はヘラケズリが施されている。90・91は偏球形の体部をもつ小型丸底壺である。90は外上方に内湾気味に立ち上がる口縁部をもち、端部は薄く尖り気味に終わる。体部外面は上半部分がヘラミガキ、下半部分がヘラケズリで口縁部内面に放射状暗文が施された後ヨコ方向のヘラミガキが施されている。91の口縁端部は薄く丸味をもって外反して終わる。口縁部の外外面はヨコ方向のヘラミガキ、体部は外面がヘラミガキと下半がヘラケズリ、内面はヘラミガキが施されている。92・93は丸底



第45図 ST-02出土遺物(2)



第46図 ST-02  
出土遺物(3)

第46図 ST-02  
出土遺物(3)

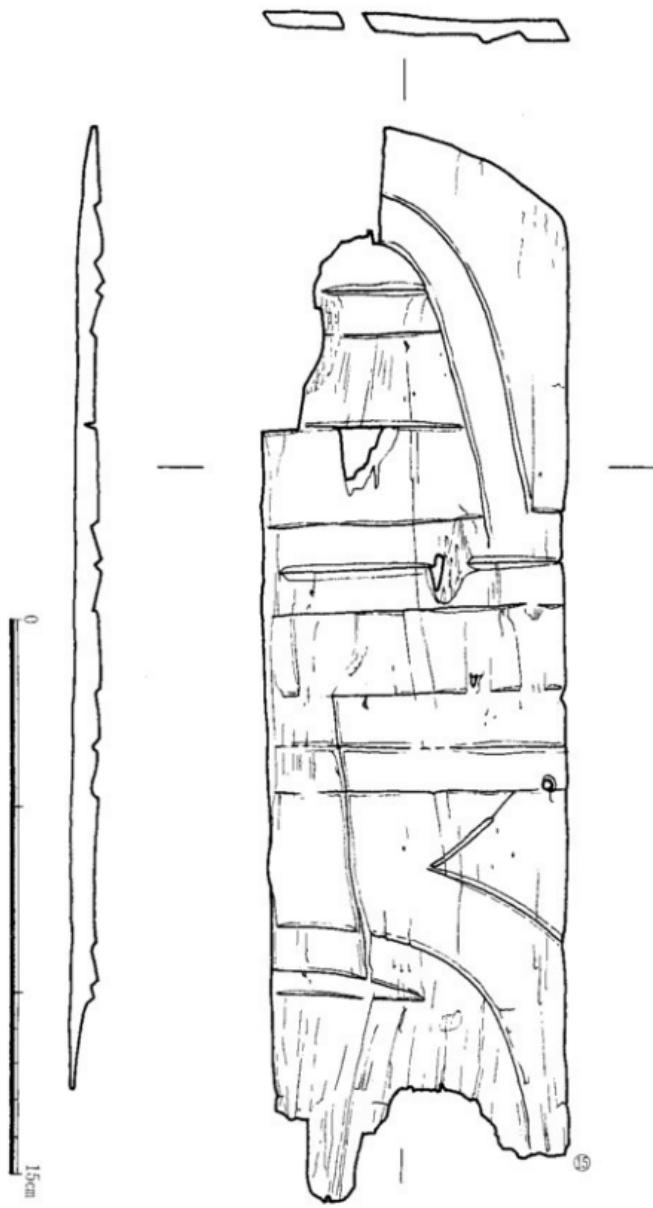
第47図 ST-02  
出土遺物(4)

る。⑩は直弧文が刻まれた板材で、長さ29.3cm、幅8.1cm、厚さ7mmを測る。直弧文は片面のみに施されており、右端に径3mm程の円形孔が貫通する。縦方向に破損しており、実際はこれのはほぼ倍近くの幅があったものと推定され、左右対称の文様を推定することが可能である。用途は不明である。⑪は手斧柄で、刃の装着部分を三方に削り出している。焼けて炭化している部分がある。⑫は舟形木製品で、何か容器の破片であろうか。⑬・⑭・⑮・⑯は編具と推定される。

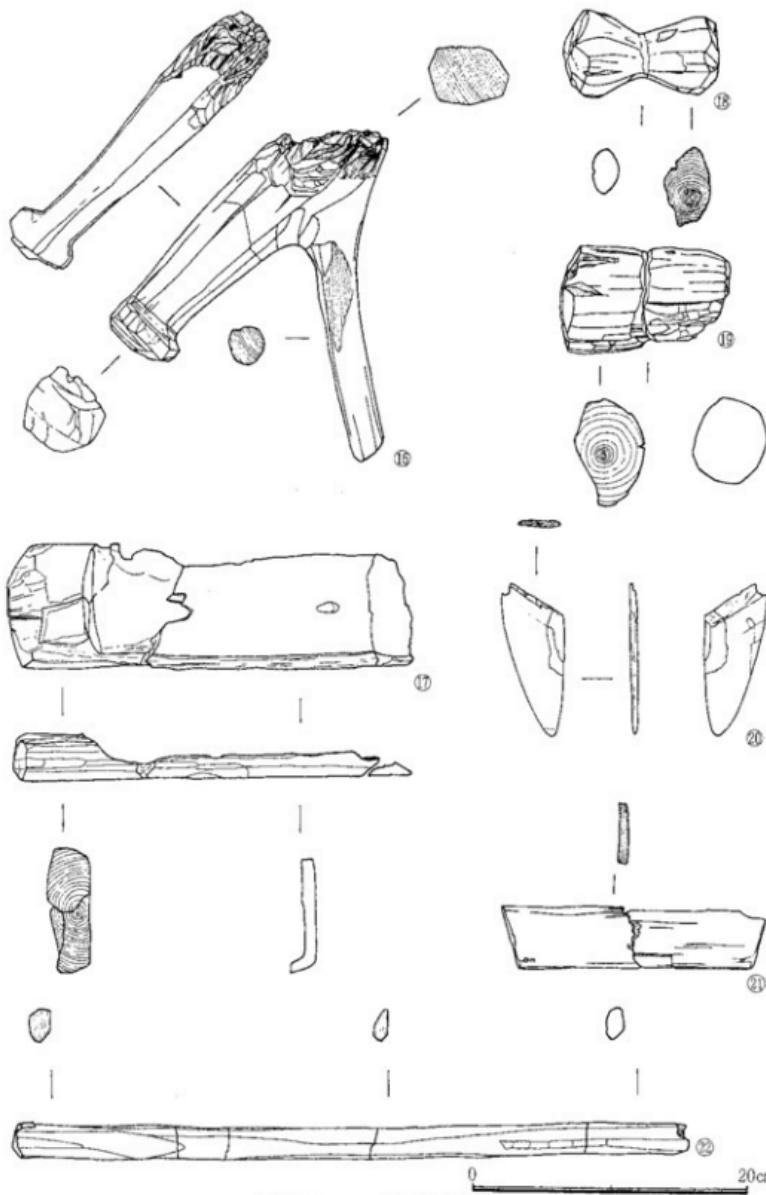
鉢である。92は小型で、丸底から内湾して立ち上がり、2段に屈曲した口縁部をもつ。端部は薄く丸味をもって終わる。体部は外面がヘラケズリの後へラミガキが施され、内面は放射状暗文を施した後ヨコ方向のヘラミガキによって調整されている。

93は底部からくの字に屈曲する口縁部をもち、端部は丸味をもって終わる。体部は内外面ともタテハケ・ヨコハケによる最終調整が施されている。94はミニチュア壺で、内湾する体部にくの字に屈曲した後内傾する口縁部をもつ。端部は丸味をもって終わる。庄内～布留式期のもので山陰地方からの搬入土器と考えられる。95は壺脚台部の破片である。東海系S字状口縁壺の脚台部と考えられる。96は土製支脚の破片である。手捏ねによる成形がなされている。97は線刻が施された壺体部片で弥生時代後期の土器の可能性もある。石器は有茎石巒(98)が出土している。骨角製品では線刻を施した弓箭の一端(99)、根抜み(100・101)が出土している。

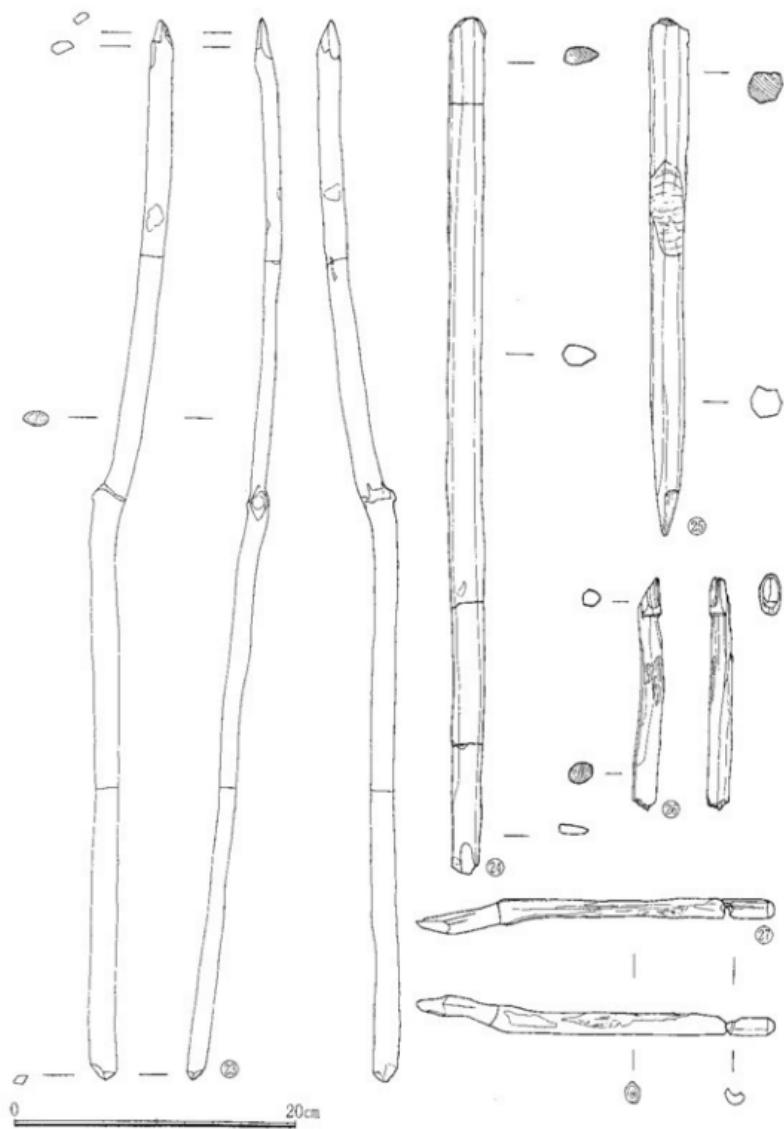
木製品は農工具をはじめ多種が出土している。⑩は棒状を呈し、先端部を尖り気味に加工している。長さ68cm、幅1.9cmを測る。用途は不明である。



第49图 ST-02出土遗物(6)



第50図 ST-02出土遺物(7)



第51図 S T -02出土遺物(8)



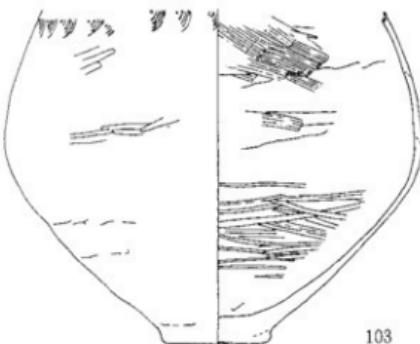
第52図 ST-02出土遺物(9)

⑮は中央がくびれた鼓形を呈する。⑯は中央部を溝状に削り凹みを作り出している。㉑・㉒は方形の孔を穿っている。㉓は木製包丁あるいはなすび型農耕具の先端部分であろう。厚さ5mmを測る。㉔は板状を呈し、下部の両端に穿孔が2箇所ある。用途は不明である。㉕は棒状を呈するが、中央部は平たい。用途は不明である。㉖は棒状の自然木の両端を加工し、一端を尖らせている。尖頭棒か。長さ77.2cmを測る。㉗は棒状を呈し、片方の側縁部を鈍く尖らせて木刀のような形状をしている。長さ62cm、幅2.4cm、厚さ1.6cmを測る。㉘は棒状を呈し、先端を尖らせている。㉙は先端部に済部分が作り出されており、弓の一部分であろう。㉚は全体に焼けた痕跡があり、鐵痕と考えられる円形の孔がある。火鑄り臼と推定される。㉛・㉜は板状を呈する木製品で、㉝には片方の端に2箇所、穿孔が施されている。いずれも用途は不明である。

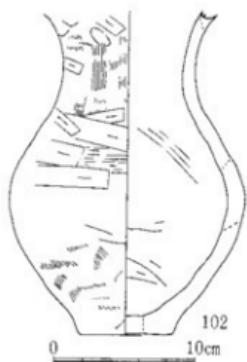
#### 包含層出土遺物(第53~60図)

包含層出土遺物として扱ったもののうち、図化し得たものを掲載している。土器(第53図:102・

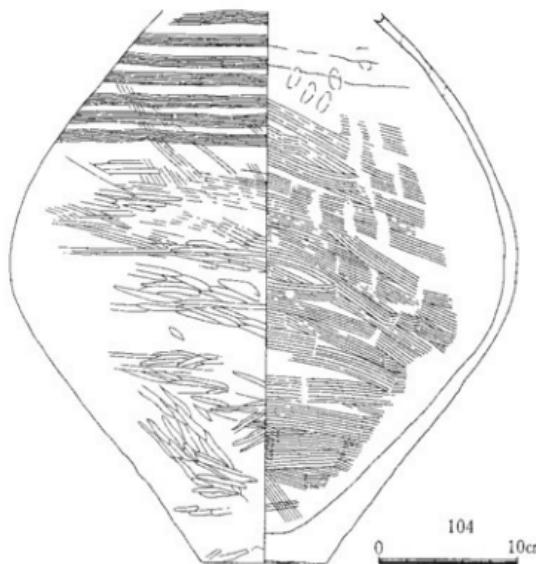
第54図：103・104、第55図：105～119)、石製品(第56図：120・第57図：121・第58図：122～124)、木製品(第59図：③・第60図③)がある。102は19層より出土している弥生土器長頸壺である。体部中位に最大径をもち、頸部との境は緩やかである。103と104は弥生時代中期の土器で、10区東側側溝内の20層から出土している。103は器壁が薄く、口縁部は欠損している。外面に櫛描扇形文が施されている。104も口縁部を欠く。頸部下外面に櫛描直線文が7帯施されている。以下体部下半は板状工具によるナデの後ヘラミガキが施されている。103と104とも口縁部を欠く壺の体部と考えられ、その擬口縁部分を合わせるようにして検出された。その出土状況から土器棺として使用されていたものであろう。105は体部下半を欠くが、S字状口縁をもつ東海系の台付壺である。16層から出土している。小型丸底壺(106・107)も16層からの出土である。偏球形の体部に内湾気味に開く口縁部をもつ。108は4区北側側溝内の19層から出土した小型丸底壺である。偏球形の体部にさほど縮まらずに大きく外方に



103

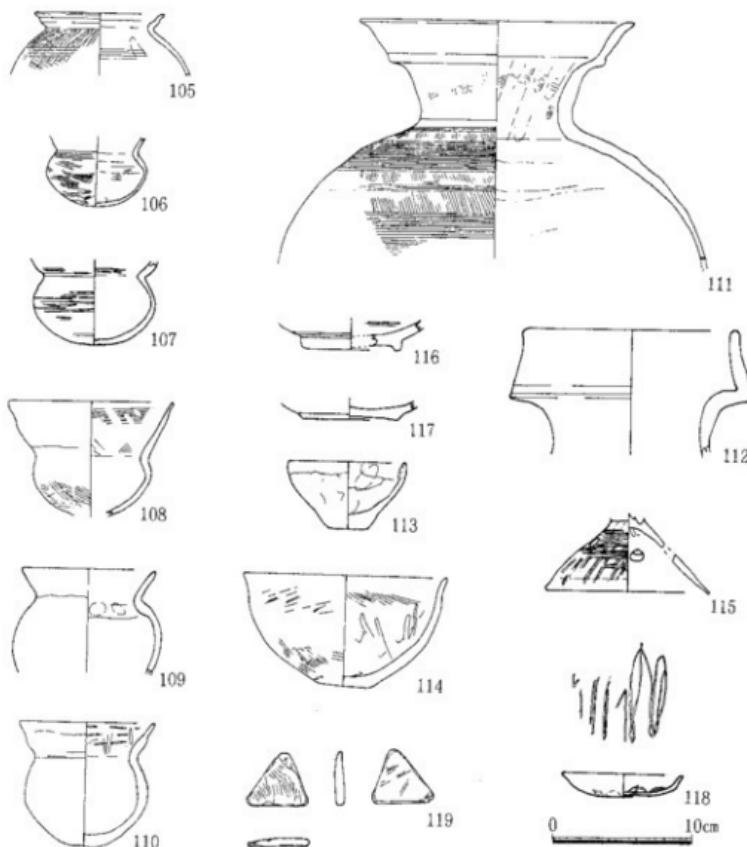


第53図 包含層出土遺物(1)



第54図 包含層出土遺物(2)

開く口縁部をもち、端部は丸味をもって終わる。小型丸底壺(109・110)は第3遺構面検出時にS D -05(S T-02の上面)内で土器群Bとして取り上げた土器であるが、包含層出土遺物として扱っている。109は球形の体部に短く外方へ開く口縁部をもち、端部は丸味をもって終わる。110も球形の体部を呈するが、外方へ直線的に開く短い口縁部をもち、端部はやや尖り気味に終わる。同じく複合口縁壺(111・112)も土器群Aとして取り上げた土器である。111は張りのある肩部から頸部が開き気味に立ち上がり、口縁部は短く水平に伸びた後外上方へ開く。口縁端部は外反し丸味をもって終わる。体部外面はタテハケの後カキメ状のヨコハケが施されている。体部下半を欠いている。



第55図 包含層出土遺物(3)

112は体部を欠く。頸部はわずかに上方に開き水平に伸びた後、逆の字に屈曲している。口縁部は内頸して立ち上がり、端部は外反気味に丸味をもっておわる。113は弥生土器ミニチュア鉢で、5層からの出土である。平底から内湾する体部をもつ。縁削陶器(116・117)、瓦器皿(118)も5層からの出土である。116は硬質で、断面台形を呈する高台もつ。疊付けのみが無釉である。体部の立ち上がりの角度からすると塊であると推定される。117は軟質で、平高台をもつ。体部の立ち上がりがゆるいので皿と推定される。疊付のみが無釉である。118は口縁部が外反し、端部は丸味をもって終わる。外面に指頭圧痕が残り、見込みにジグザグ状の暗文が施されている。弥生土器鉢(114)は北東隅側溝、器台(115)と土製三角板(119)は北側側溝掘削時に17層から出土したものである。114は体部が内湾して立ち上がり、口縁部で外反する。端部は丸味をもって終わる。115は受部を欠いている。脚台部は下方に向かってやや内湾し、端部はわずかにつまみ内側に肥厚する。3方に円形の透かし孔を穿つ。石製品では棗玉(120)が19層、石包丁(122)、管玉未製品(124)が16層からの出土で、石包丁未製品(121)は土器群Aからの出土で

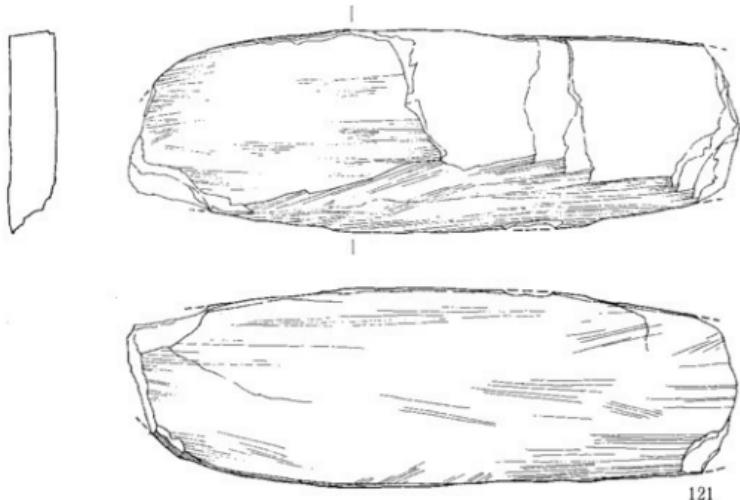


120



0 1 cm

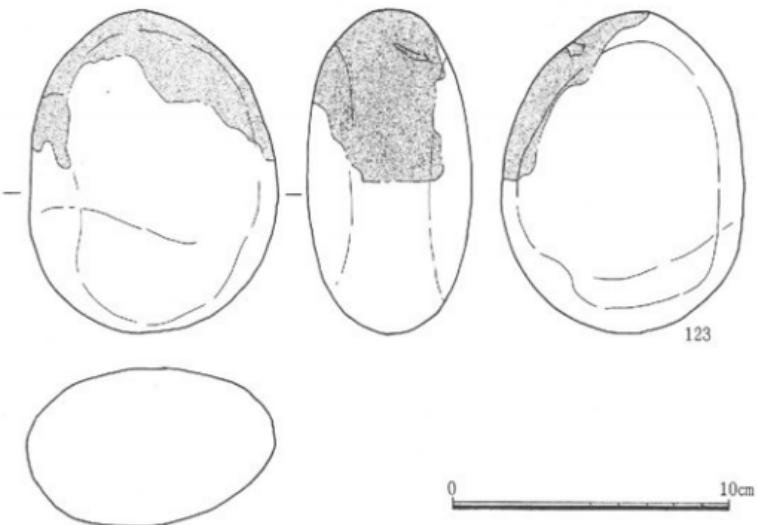
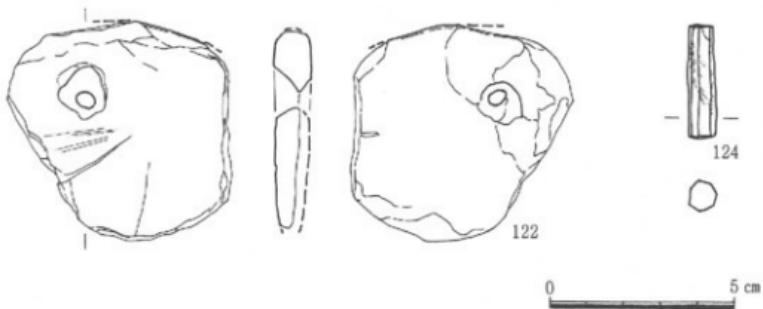
第56図  
包含層  
出土遺物(4)



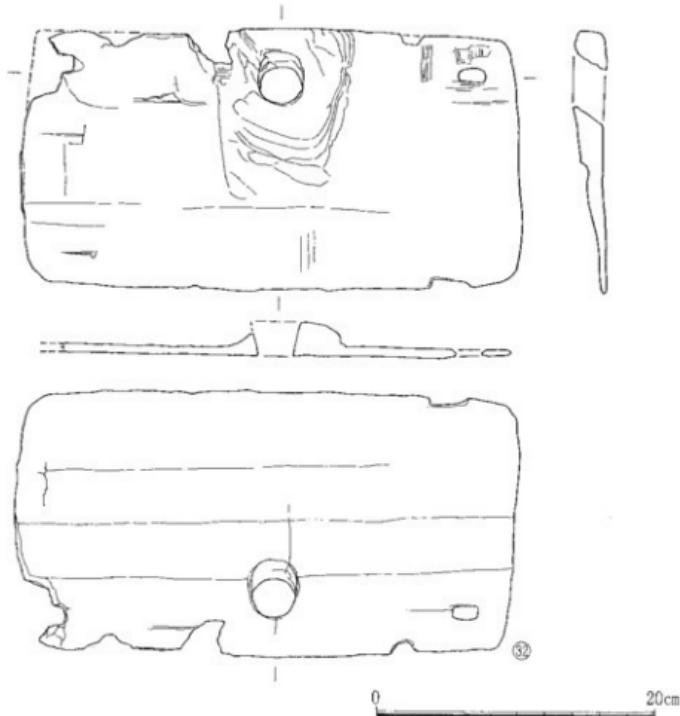
121



第57図 包含層出土遺物(5)



第58図　包含層出土遺物(6)



第59図 包含層出土遺物(7)

ある。121・122は結晶片岩、124は頁岩である。また、北東隅側溝内よりくぼみ石(123)が出土している。斑レイ岩である。木製品では1区北側側溝内よりえぶり(②)が出土しているが、S T -02 埋土からの出土と考へて差し支えないであろう。③は5区浄化槽搅乱内から出土した。鍛未製品である。

第4遺構面の時期であるが、出土遺物から推定すると古墳時代前期であると考えられるが、一部遺構には弥生時代後期末から古墳時代前期初頭頃まで遡れる可能性もあるものも存在していることが確認された。

## 第4章　まとめ

昭和34年以来、約30年ぶりの調査となった本調査は、既述したように多くの成果を上げている。しかし、今日に至るまで(平成17年2月末現在)遺跡内では10箇所の調査が実施され、報告書も既に刊行されているものもある。そのため本調査を実施した当時と比べると、中垣内遺跡に対しての認識・見解についても大きく変化してきているのが現状である。ここでは時間的には前後するが、現在までの成果も踏まえながら、本調査のまとめを行うこととする。

### 1. 第1遺構面

第1遺構面では南北方向に打ち込まれていた杭列と約5cm程度の段差を持つ田・畑の跡SM-01・02と調査区東側において水路として機能していたと推定される溝SD-01を検出している。また無数の耕作痕(鉛縄)も検出している。盛上層直下にある本遺構面は当地が開発される前の昭和20~30年代の地表面であり、包含層から出土する遺物を考慮すると近世以前頃から耕作地として利用され続けられて近現代にまで至っていることが推測される。

### 2. 第2遺構面

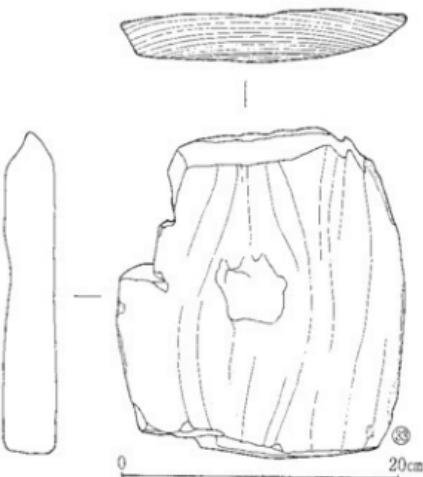
第2遺構面でも耕作痕と推定される南北方向に走る小溝群及び鍛溝を検出している。出土遺物には瓦器塊、土師器皿等が含まれていることから中世~近世の耕作面と推定される。

### 3. 第3遺構面

第3遺構面では土坑や溝、ピット等が検出されているが、性格不明の遺構が多く、耕作痕等は確認されていないので、どのような土地利用がされていたのか不明である。本遺構面の時期は出土遺物量が少ないため明確ではないが、上下の遺構面の時期を考慮すると、古墳時代後期~奈良・平安時代頃と推定される。また、調査区西側では第4遺構面で検出したST-02の上層部分であるSD-05を検出している。ST-02は後述するように河内潟・河内湖の汀線に相当するものと推定され、検出状況から既に埋没していたと考えられ、本遺構面の時期には汀線は西側へ後退していたものと推測される。

### 4. 第4遺構面

第4遺構面では庄内~布留式期に相当する遺構を検出しており、遺構の構成内容から集落跡を検出したものと推定される。



第60図 包含層出土遺物(8)

## ① 集落の性格について

素文鏡や管玉、イノシシの骨、桃種の出土、また、高壙埋納土坑の検出等、従来、祭祀に関連づけられてきた要素をもち、何らかの祭祀に関連した場所を想定することができる。ただ、集落の全体像が明らかにされていないので、その評価については慎重にすべきであろう。今後の調査例に期待したい。

## ② 壺穴住居について

壺穴住居はこれまで、本遺跡内において昭和34年に実施された関西電力東大阪変電所建設工事に伴う発掘調査で弥生時代前期の壺穴住居が3基検出されている<sup>(11)</sup>他、北条遺跡においても弥生時代後期後半の壺穴住居が1基検出されている<sup>(12)</sup>が、古墳時代と推定されるものが検出されたのは今回が初めてのことである。しかもSB-01のように大型の壺穴住居が検出されたことも大きな成果であった。

SB-01は全体を検出していないものの、平面規模は径約7.0~8.0mの円形と推定されるが、多角形の可能性も否定できない。この時期の壺穴住居は方形が主流となるが、そのなかでの大型の円形、多角形住居をどのように位置付けるべきか検討が必要であろう。

## ③ ST-02について

調査区の西側で検出した落ち込み状の遺構ST-02は、検出状況から当時の河内潟・河内湖の汀線と推定される。汀線は東西に移動を繰り返しながらも、徐々に西へ後退していくのであろうが、本遺構を検出できたことは、今後、遺跡の範囲や当時の集落の立地場所を検証するうえで指針となるものであり、意義が大きい。

## ④ 弥生時代中期の遺構

今回の調査では明確に生活面を検出していないが、調査区東側の側溝内で土器館が出土している。周辺に遺構を伴わず単独で出土しており、近くにこの時期の集落が存在することを示唆するものであったが、その後、調査地東側の大学構内において実施されたNGT94-1の調査において、同時期の遺構・遺物が確認され、調査地の東側で集落が展開されていたことが裏付けられた。今日までの状況から中期の集落は調査地を西限として立地しているものと推定される。

## ⑤ 直弧文入り木製品

ST-02より出土した直弧文<sup>(13)</sup>が刻まれた板材は下部を欠き、また縦方向に破損しているため、全体の大きさと形状は不明であるが、その文様構成から左右対称形であると仮定すると、幅は17~18cm前後、左右の両端に径3mmの円形孔が貫通しているものと推定される。残念ながら全長は不明である。今日、直弧文の定義については、「直線や弧線で重なりあう帯を表現した古墳時代独特の文様。貝輪、刀装具、収などの器物のほか、埴輪、石棺、石障など埋葬に関わる備品や施設に施されることが多く、辟邪など呪術的な役割を果たした文様と考えられる。刀装具や石棺・石障の直弧文はX字形の軸線のまわりに帯がめぐる」という構図上

の法則が認められるが、埴輪や鏡などでは簡便化したものが多い。弥生時代後期から終末期にはこれらに先行する圓文があり、それらも含めて直弧文という場合がある。<sup>(44)</sup>とされており、この種の文様が入った遺物が出土した遺跡(遺構)に対しては、祭祀や呪術関連の評価がなされることが多い。前述したように今回の調査で検出した集落の性格は祭祀色をもつ可能性もあり、この直弧文入り板材は、盾を模したミニチュアの木製品で、何らかの祭祀に使用されたという可能性もあるが、現段階ではそこまで言及はできないであろう。確かに、その文様は直線と弧線(曲線)から構成されてはいるものの、従来の直弧文がもつ幾何学的要素やパターン化された連續性を想起させるものではなく、趣が少し異なっているように思われる。はたして、この文様がいわゆる直弧文の範疇に入るのかどうか意見の分かれるところであり、さらに検討が必要であろう。今後の出土例の増加に期待したい。

#### ⑥ 古墳時代の集落について

従来、弥生時代前期集落として認識されてきた中垣内遺跡であるが、古墳時代前期の集落が発見されたことは、調査当時としては画期的なことであった。その後、今日に至るまで本遺跡内で実施された各調査(第3図・第1表を参照)においても未だ明確に古墳時代前期の集落を検出しておらず、集落の動向と展開を論ずるまでは至っていないが、今回の調査地点から東へ約400mに位置するNG T93-1の調査<sup>(45)</sup>では古墳時代前期と推定される水田が検出され、近接のNG T98-1、99-1<sup>(46)</sup>でも同時期と推定される水田が検出されている。今回検出された集落と同時期であることが推定されるのであるが、検出面の標高は集落がT.P.+2.3~3.2m、水田がT.P.+6.0m前後を測り、集落の方が低い。現段階で、400mを隔てて位置している両者を関連付けて論ずるのは少々無理があるかも知れないが、居住域と水田域との関係からすると、水利の便が良い低所に水田、水はけのよく居住に適した高所に集落を営むことが通常考えられ、しかも、集落は当時の河内湯・河内湖の汀線近くに立地しており、地形的には安定した土地ではなかったと推定されることから、両者の位置関係には特異性を感じられるのである。このような観点から、今回検出された集落は特別な性格をもつ集落ではないかと推定されるのであるが、前述したように、これを即、祭祀に結びつけることは今回は差し控えるべきで、今後の調査事例の増加を待って、再度検討すべき問題であろう。

#### 註

- (1) 岩大東市史によると「南地区では三ヵ所から方形の小堅穴住居址を発見した。堅穴の大きさは、辺長約二メートル、深さは五〇センチメートルあり、その内部からおびただしい量の前期弥生式土器や磨製石斧、石庖丁、打製石鏃、獸骨、淡水貝殻、炭化米などを発掘した。」とある。  
『大東市史』1973大東市教育委員会
- (2) 『寺川・北条遺跡発掘調査報告書』1987大東市教育委員会  
※傾斜地での検出のため低部側が流失しているため全体の規模は不明である。柱穴は2個確認されており、壁溝内より甕体部片、床面より小型甕、鉢が出土している。また、同時に検出された土坑内より手縫形土器が出土している。
- (3) 命名者は浜田耕作で、熊本県上益城郡嘉島町井寺古墳の扉み石に見られるこの種の文様に着目したのが最初である。  
浜田耕作・梅原末治「肥後に於ける装飾ある古墳及横穴」『京都帝国大学文科大学考古学研究報告一』1912
- (4) 『岩波日本史辞典』1990岩波書店

- (5)『中垣内遺跡(関西電力株式会社架空送電線鉄塔No.23建替え等に伴う発掘調査報告書)』2004大東市教育委員会
- (6)『中垣内遺跡(大阪産業大学校舎建設等に伴う発掘調査報告書)』2005大東市教育委員会



遺物觀察表

木製品觀察表



## 遺物一覧表・観察表

総数(件)

| 序<br>号 | 出<br>所   | 名<br>称          | 遺物名     | 遺物分<br>類   | 地名         | 種類             | 性質             | 形狀の特徴                       | 口頭傳<br>承                       | 体感                             | 色彩        | 粘土         | 時間       | 因考                       |
|--------|----------|-----------------|---------|------------|------------|----------------|----------------|-----------------------------|--------------------------------|--------------------------------|-----------|------------|----------|--------------------------|
| 1      | 六<br>六   | 七<br>月<br>第一回発掘 | SII-01  | 黑色釉<br>化土器 | 伊勢原<br>(上) | 口盤<br>高脚<br>直腹 | 口盤<br>高脚<br>直腹 | 外側に黒く磨かれた中に内側に白い<br>色が付いた土器 | 外、灰陶                           | 外、<br>表面は土の跡がある<br>底面は内側を磨いてある | 朱色<br>淡褐色 | 赤褐色<br>淡褐色 | 午後<br>午後 | 内側は土の跡がある<br>底面は内側を磨いてある |
| 2      | 三<br>三   | 八<br>月<br>第二回発掘 | SEI-01  | 白色<br>化土器  | 伊勢原<br>(上) | 口盤<br>高脚<br>直腹 | 口盤<br>高脚<br>直腹 | 内側に黒く磨かれた中に内側に白い<br>色が付いた土器 | 内、<br>表面は土の跡がある<br>底面は内側を磨いてある | 外、<br>表面は土の跡がある<br>底面は内側を磨いてある | 朱色<br>淡褐色 | 赤褐色<br>淡褐色 | 午後<br>午後 | 内側は土の跡がある<br>底面は内側を磨いてある |
| 3      | 六<br>六   | 四<br>月<br>第三回発掘 | SIII-01 | 白色<br>化土器  | 伊勢原<br>(上) | 口盤<br>高脚<br>直腹 | 口盤<br>高脚<br>直腹 | 内側に黒く磨かれた中に内側に白い<br>色が付いた土器 | 外、<br>表面は土の跡がある<br>底面は内側を磨いてある | 外、<br>表面は土の跡がある<br>底面は内側を磨いてある | 朱色<br>淡褐色 | 赤褐色<br>淡褐色 | 午後<br>午後 | 内側は土の跡がある<br>底面は内側を磨いてある |
| 4      | 八<br>八   | 五<br>月<br>第四回発掘 | SIV-01  | 白色<br>化土器  | 伊勢原<br>(上) | 口盤<br>高脚<br>直腹 | 口盤<br>高脚<br>直腹 | 内側に黒く磨かれた中に内側に白い<br>色が付いた土器 | 外、<br>表面は土の跡がある<br>底面は内側を磨いてある | 外、<br>表面は土の跡がある<br>底面は内側を磨いてある | 朱色<br>淡褐色 | 赤褐色<br>淡褐色 | 午後<br>午後 | 内側は土の跡がある<br>底面は内側を磨いてある |
| 5      | 九<br>九   | 六<br>月<br>第五回発掘 | SI-01   | 黑色釉<br>化土器 | 伊勢原<br>(上) | 口盤<br>高脚<br>直腹 | 口盤<br>高脚<br>直腹 | 内側に黒く磨かれた中に内側に白い<br>色が付いた土器 | 外、<br>表面は土の跡がある<br>底面は内側を磨いてある | 外、<br>表面は土の跡がある<br>底面は内側を磨いてある | 朱色<br>淡褐色 | 赤褐色<br>淡褐色 | 午後<br>午後 | 内側は土の跡がある<br>底面は内側を磨いてある |
| 6      | 12<br>12 | 7<br>月<br>第六回発掘 | SE-01   | 黑色釉<br>化土器 | 伊勢原<br>(上) | 口盤<br>高脚<br>直腹 | 口盤<br>高脚<br>直腹 | 内側に黒く磨かれた中に内側に白い<br>色が付いた土器 | 外、<br>表面は土の跡がある<br>底面は内側を磨いてある | 外、<br>表面は土の跡がある<br>底面は内側を磨いてある | 朱色<br>淡褐色 | 赤褐色<br>淡褐色 | 午後<br>午後 | 内側は土の跡がある<br>底面は内側を磨いてある |
| 7      | 12<br>12 | 八<br>月<br>第七回発掘 | SE-02   | 黑色釉<br>化土器 | 伊勢原<br>(上) | 口盤<br>高脚<br>直腹 | 口盤<br>高脚<br>直腹 | 内側に黒く磨かれた中に内側に白い<br>色が付いた土器 | 外、<br>表面は土の跡がある<br>底面は内側を磨いてある | 外、<br>表面は土の跡がある<br>底面は内側を磨いてある | 朱色<br>淡褐色 | 赤褐色<br>淡褐色 | 午後<br>午後 | 内側は土の跡がある<br>底面は内側を磨いてある |
| 8      | 12<br>12 | 六<br>月<br>第八回発掘 | SE-02   | 黑色釉<br>化土器 | 伊勢原<br>(上) | 口盤<br>高脚<br>直腹 | 口盤<br>高脚<br>直腹 | 内側に黒く磨かれた中に内側に白い<br>色が付いた土器 | 外、<br>表面は土の跡がある<br>底面は内側を磨いてある | 外、<br>表面は土の跡がある<br>底面は内側を磨いてある | 朱色<br>淡褐色 | 赤褐色<br>淡褐色 | 午後<br>午後 | 内側は土の跡がある<br>底面は内側を磨いてある |
| 9      | 12<br>12 | 一<br>月<br>第九回発掘 | SE-02   | 黑色釉<br>化土器 | 伊勢原<br>(上) | 口盤<br>高脚<br>直腹 | 口盤<br>高脚<br>直腹 | 内側に黒く磨かれた中に内側に白い<br>色が付いた土器 | 外、<br>表面は土の跡がある<br>底面は内側を磨いてある | 外、<br>表面は土の跡がある<br>底面は内側を磨いてある | 朱色<br>淡褐色 | 赤褐色<br>淡褐色 | 午後<br>午後 | 内側は土の跡がある<br>底面は内側を磨いてある |
| 10     | 12<br>12 | 一<br>月<br>第十回発掘 | SI-02   | 黑色釉<br>化土器 | 伊勢原<br>(上) | 口盤<br>高脚<br>直腹 | 口盤<br>高脚<br>直腹 | 内側に黒く磨かれた中に内側に白い<br>色が付いた土器 | 外、<br>表面は土の跡がある<br>底面は内側を磨いてある | 外、<br>表面は土の跡がある<br>底面は内側を磨いてある | 朱色<br>淡褐色 | 赤褐色<br>淡褐色 | 午後<br>午後 | 内側は土の跡がある<br>底面は内側を磨いてある |

| 登録番号        | 登録年月       | 島名    | 島の位置 | 島の面積                     | 島の周囲 | 島の形状 | 島の特徴 | 島の面積 | 島の周囲 | 島の形状 | 島の特徴 | 島の面積 | 島の周囲 | 島の形状 | 島の特徴 |
|-------------|------------|-------|------|--------------------------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| 11 14 15    | 平成25年5月01日 | 石垣島   | 沖縄県  | 21.7~25.5km <sup>2</sup> | 外海   | 外海   | 外海   | 外    | 外    | 外海   | 外海   | 外    | 外    | 外海   | 外海   |
| 12 16 18    | 平成25年5月01日 | 宮古島   | 沖縄県  | 14.5~16.0km <sup>2</sup> | 内海   | 内海   | 内海   | 外    | 外    | 内海   | 内海   | 外    | 外    | 内海   | 内海   |
| 13 16 ~     | 平成25年5月01日 | 久高島   | 沖縄県  | 11.0~11.5km <sup>2</sup> | 内海   | 内海   | 内海   | 外    | 外    | 内海   | 内海   | 外    | 外    | 内海   | 内海   |
| 14 16       | 平成25年5月01日 | 喜界島   | 沖縄県  | 7.4~8.0km <sup>2</sup>   | 内海   | 内海   | 内海   | 外    | 外    | 内海   | 内海   | 外    | 外    | 内海   | 内海   |
| 15 17 18 19 | 平成25年5月01日 | 宮古島   | 沖縄県  | 13.0~13.5km <sup>2</sup> | 内海   | 内海   | 内海   | 外    | 外    | 内海   | 内海   | 外    | 外    | 内海   | 内海   |
| 16 18       | 平成25年5月01日 | 石垣島   | 沖縄県  | 11.0~11.5km <sup>2</sup> | 内海   | 内海   | 内海   | 外    | 外    | 内海   | 内海   | 外    | 外    | 内海   | 内海   |
| 17 21 22    | 平成25年5月01日 | 西表島   | 沖縄県  | 11.0~11.5km <sup>2</sup> | 内海   | 内海   | 内海   | 外    | 外    | 内海   | 内海   | 外    | 外    | 内海   | 内海   |
| 18 21       | 平成25年5月01日 | 東表島   | 沖縄県  | 11.0~11.5km <sup>2</sup> | 内海   | 内海   | 内海   | 外    | 外    | 内海   | 内海   | 外    | 外    | 内海   | 内海   |
| 19 21 22    | 平成25年5月01日 | 八重山諸島 | 沖縄県  | 11.0~11.5km <sup>2</sup> | 内海   | 内海   | 内海   | 外    | 外    | 内海   | 内海   | 外    | 外    | 内海   | 内海   |
| 20 21 22    | 平成25年5月01日 | 南大東島  | 沖縄県  | 11.0~11.5km <sup>2</sup> | 内海   | 内海   | 内海   | 外    | 外    | 内海   | 内海   | 外    | 外    | 内海   | 内海   |





| 登録番<br>号 | 登録年<br>月日  | 行政区   | 名稱    | 説明                | 種類                | 部屋             | 面積             | 床面積   | 軒高                   | 体形                       | 壁面                 | 地台                 | 構造                 | 備考 |
|----------|------------|-------|-------|-------------------|-------------------|----------------|----------------|---|----------------------|--------------------------|--------------------|--------------------|--------------------|----|
| 11-22    | 平成17年7月22日 | 第4音楽街 | SS-10 | -                 | 4F<br>小(1)室<br>上階 | 口径<br>内<br>外   | (7.0)          | 床面積2.4坪の半分の部屋<br>「11.5坪の部屋を11.1坪に縮<br>ききたい」 | 外<br>外チラ<br>内<br>内チラ | 外<br>外壁は内側につけた<br>外壁へテラス | 外<br>外壁<br>内<br>内壁 | 外<br>外壁<br>内<br>内壁 | 外<br>外壁<br>内<br>内壁 |    |
| 42-25    | 平成17年7月25日 | 第4音楽街 | SS-11 | 三色釉瓦<br>瓦屋根<br>土蔵 | 要<br>要<br>要       | 口径<br>高高<br>高高 | 15.0<br>(6.8)  | 床面積11.7坪の部屋<br>「11.5坪の部屋を11.1坪に縮<br>ききたい」   | 外<br>外チラ<br>内<br>内チラ | 外<br>外壁は内側につけた<br>外壁へテラス | 外<br>外壁<br>内<br>内壁 | 外<br>外壁<br>内<br>内壁 | 外<br>外壁<br>内<br>内壁 |    |
| 43-25    | 平成17年7月25日 | 第4音楽街 | SS-11 | 三色釉瓦<br>瓦屋根<br>土蔵 | 要<br>要<br>要       | 口径<br>高高<br>高高 | 15.0<br>(21.0) | 床面積11.7坪の部屋<br>「11.5坪の部屋を11.1坪に縮<br>ききたい」   | 外<br>外チラ<br>内<br>内チラ | 外<br>外壁は内側につけた<br>外壁へテラス | 外<br>外壁<br>内<br>内壁 | 外<br>外壁<br>内<br>内壁 | 外<br>外壁<br>内<br>内壁 |    |
| 44-25    | 平成17年7月25日 | 第4音楽街 | SS-11 | 三色釉瓦<br>瓦屋根<br>土蔵 | 要<br>要<br>要       | 口径<br>高高<br>高高 | 15.0<br>(21.0) | 床面積11.7坪の部屋<br>「11.5坪の部屋を11.1坪に縮<br>ききたい」   | 外<br>外チラ<br>内<br>内チラ | 外<br>外壁は内側につけた<br>外壁へテラス | 外<br>外壁<br>内<br>内壁 | 外<br>外壁<br>内<br>内壁 | 外<br>外壁<br>内<br>内壁 |    |
| 45-25    | 平成17年7月25日 | 第4音楽街 | SS-11 | 三色釉瓦<br>瓦屋根<br>土蔵 | 要<br>要<br>要       | 口径<br>高高<br>高高 | 15.0<br>(21.0) | 床面積11.7坪の部屋<br>「11.5坪の部屋を11.1坪に縮<br>ききたい」   | 外<br>外チラ<br>内<br>内チラ | 外<br>外壁は内側につけた<br>外壁へテラス | 外<br>外壁<br>内<br>内壁 | 外<br>外壁<br>内<br>内壁 | 外<br>外壁<br>内<br>内壁 |    |
| 46-25    | 平成17年7月25日 | 第4音楽街 | SS-11 | 三色釉瓦<br>瓦屋根<br>土蔵 | 要<br>要<br>要       | 口径<br>高高<br>高高 | 15.0<br>(11.5) | 床面積11.7坪の部屋<br>「11.5坪の部屋を11.1坪に縮<br>ききたい」   | 外<br>外チラ<br>内<br>内チラ | 外<br>外壁は内側につけた<br>外壁へテラス | 外<br>外壁<br>内<br>内壁 | 外<br>外壁<br>内<br>内壁 | 外<br>外壁<br>内<br>内壁 |    |
| 47-25    | 平成17年7月25日 | 第4音楽街 | SS-11 | 三色釉瓦<br>瓦屋根<br>土蔵 | 要<br>要<br>要       | 口径<br>高高<br>高高 | 15.0<br>(11.2) | 床面積11.7坪の部屋<br>「11.5坪の部屋を11.1坪に縮<br>ききたい」   | 外<br>外チラ<br>内<br>内チラ | 外<br>外壁は内側につけた<br>外壁へテラス | 外<br>外壁<br>内<br>内壁 | 外<br>外壁<br>内<br>内壁 | 外<br>外壁<br>内<br>内壁 |    |
| 48-25    | 平成17年7月25日 | 第4音楽街 | SS-11 | 三色釉瓦<br>瓦屋根<br>土蔵 | 要<br>要<br>要       | 口径<br>高高<br>高高 | 15.0<br>(11.2) | 床面積11.7坪の部屋<br>「11.5坪の部屋を11.1坪に縮<br>ききたい」   | 外<br>外チラ<br>内<br>内チラ | 外<br>外壁は内側につけた<br>外壁へテラス | 外<br>外壁<br>内<br>内壁 | 外<br>外壁<br>内<br>内壁 | 外<br>外壁<br>内<br>内壁 |    |
| 49-25    | 平成17年7月25日 | 第4音楽街 | SS-15 | -                 | 内壁<br>下階          | 高高             | 10.8           | 13.1<br>今更に広めの部屋を狭め<br>外壁へテラス               | 外<br>外壁<br>内<br>内壁   | 外<br>外壁は内側につけた<br>外壁へテラス | 外<br>外壁<br>内<br>内壁 | 外<br>外壁<br>内<br>内壁 | 外<br>外壁<br>内<br>内壁 |    |
| 50-25    | 平成17年7月25日 | 第4音楽街 | SS-15 | -                 | 内壁<br>上階          | 高高             | 10.8           | 13.2<br>外壁は広めの部屋を狭め<br>外壁へテラス               | 外<br>外壁<br>内<br>内壁   | 外<br>外壁は内側につけた<br>外壁へテラス | 外<br>外壁<br>内<br>内壁 | 外<br>外壁<br>内<br>内壁 | 外<br>外壁<br>内<br>内壁 |    |



| 品種    | 原産地  | 花期 | 播種期   | 播種量 | 播種                          | 苗期 | 施肥の特徴                       | 剪定                 | 施肥     | 施肥     | 施肥     | 施肥     |
|-------|------|----|-------|-----|-----------------------------|----|-----------------------------|--------------------|--------|--------|--------|--------|
| 61-32 | 上(区) | 5月 | 5月(1) | -   | 播種量<br>1kg/10m <sup>2</sup> | 播種 | 外、タマゴのひのき粉を混ぜて撒く。<br>外(木)木床 | 内に肥料を撒く。<br>内(木)木床 | 外(木)木床 | 内(木)木床 | 外(木)木床 | 内(木)木床 |
| 62-32 | 上(区) | 5月 | 5月(1) | -   | 播種量<br>1kg/10m <sup>2</sup> | 播種 | 外、タマゴのひのき粉を混ぜて撒く。<br>内(木)木床 | 内に肥料を撒く。<br>内(木)木床 | 外(木)木床 | 内(木)木床 | 外(木)木床 | 内(木)木床 |
| 63-33 | 上(区) | 5月 | 5月(1) | -   | 播種量<br>1kg/10m <sup>2</sup> | 播種 | 外、タマゴのひのき粉を混ぜて撒く。<br>内(木)木床 | 内に肥料を撒く。           | 外(木)木床 | 内(木)木床 | 外(木)木床 | 内(木)木床 |
| 64-34 | 上(区) | 5月 | 5月(1) | -   | 播種量<br>1kg/10m <sup>2</sup> | 播種 | 外、タマゴのひのき粉を混ぜて撒く。<br>内(木)木床 | 内に肥料を撒く。           | 外(木)木床 | 内(木)木床 | 外(木)木床 | 内(木)木床 |
| 65-35 | 上(区) | 5月 | 5月(1) | -   | 播種量<br>1kg/10m <sup>2</sup> | 播種 | 外、タマゴのひのき粉を混ぜて撒く。<br>内(木)木床 | 内に肥料を撒く。           | 外(木)木床 | 内(木)木床 | 外(木)木床 | 内(木)木床 |
| 66-37 | 上(区) | 5月 | 5月(1) | -   | 播種量<br>1kg/10m <sup>2</sup> | 播種 | 外、タマゴのひのき粉を混ぜて撒く。<br>内(木)木床 | 内に肥料を撒く。           | 外(木)木床 | 内(木)木床 | 外(木)木床 | 内(木)木床 |
| 67-37 | 上(区) | 5月 | 5月(1) | -   | 播種量<br>1kg/10m <sup>2</sup> | 播種 | 外、タマゴのひのき粉を混ぜて撒く。<br>内(木)木床 | 内に肥料を撒く。           | 外(木)木床 | 内(木)木床 | 外(木)木床 | 内(木)木床 |
| 68-37 | -    | 7月 | 7月(1) | -   | 播種量<br>1kg/10m <sup>2</sup> | 播種 | 外、タマゴのひのき粉を混ぜて撒く。<br>内(木)木床 | 内に肥料を撒く。           | 外(木)木床 | 内(木)木床 | 外(木)木床 | 内(木)木床 |
| 70-37 | 上(区) | 7月 | 7月(1) | -   | 播種量<br>1kg/10m <sup>2</sup> | 播種 | 外、タマゴのひのき粉を混ぜて撒く。<br>内(木)木床 | 内に肥料を撒く。           | 外(木)木床 | 内(木)木床 | 外(木)木床 | 内(木)木床 |







| 標本<br>番号 | 科名  | 学名 | 種類   | 固有地名  | 固有地名<br>の意味 | 地理          | 分類         | 外見の特徴  |                         | 備註     | 参考 | 備考 |
|----------|-----|----|------|-------|-------------|-------------|------------|--------|-------------------------|--------|----|----|
|          |     |    |      |       |             |             |            | 外      | 内                       |        |    |    |
| 100. 13  | ナメル | IP | 黒鷺山  | ST 62 | -           | 片角島<br>新道   | 新丸<br>新道   | 25.3mm | 暗褐色の毛被                  | 外<br>内 | -  | -  |
| 101. 47  | ナメル | IP | 切妻御所 | ST 62 | -           | 片角島<br>切妻   | 切妻<br>切妻   | 13.5mm | 外側は黒い<br>内側は白い          | 外<br>内 | -  | -  |
| 102. 83  | ナメル | IP | 三井ノ瀬 | ST 62 | -           | 片角島<br>三井ノ瀬 | 三井<br>三井ノ瀬 | 10.5mm | 外側は黒い<br>内側は白い<br>内側は黒い | (H)    | -  | -  |
| 103. 54  | ナメル | IP | 10区  | -     | 20世         | 片角島<br>10区  | 10区<br>10区 | 10.5mm | 外側は黒い<br>内側は白い          | 外<br>内 | -  | -  |
| 104. 35  | ナメル | IP | 20世  | -     | 20世         | 片角島<br>20世  | 20世<br>20世 | 10.5mm | 外側は黒い<br>内側は白い          | 外<br>内 | -  | -  |
| 105. 35  | ナメル | IP | 30区  | -     | 30世         | 片角島<br>30区  | 30世<br>30区 | 10.5mm | 外側は黒い<br>内側は白い          | 外<br>内 | -  | -  |
| 106. 35  | ナメル | IP | 40区  | -     | 40世         | 片角島<br>40区  | 40世<br>40区 | 10.5mm | 外側は黒い<br>内側は白い          | 外<br>内 | -  | -  |
| 107. 55  | ナメル | IP | 50区  | -     | 50世         | 片角島<br>50区  | 50世<br>50区 | 10.5mm | 外側は黒い<br>内側は白い          | 外<br>内 | -  | -  |
| 108. 55  | ナメル | IP | 60区  | -     | 60世         | 片角島<br>60区  | 60世<br>60区 | 10.5mm | 外側は黒い<br>内側は白い          | 外<br>内 | -  | -  |
| 109. 55  | ナメル | IP | 70区  | -     | 70世         | 片角島<br>70区  | 70世<br>70区 | 10.5mm | 外側は黒い<br>内側は白い          | 外<br>内 | -  | -  |

| 登録番号   | 地名   | 地区   | 漁港名   | 漁港等級  | 船名    | 種別  | 用途   | 船舶の特徴 |     | 外観  | 内観                              | 底面                              | 侧面                              | 船首  | 船尾                              | 船名  |
|--------|------|------|-------|-------|-------|-----|------|-------|-----|-----|---------------------------------|---------------------------------|---------------------------------|-----|---------------------------------|-----|
|        |      |      |       |       |       |     |      | 船籍    | 船籍港 |     |                                 |                                 |                                 |     |                                 |     |
| 110 55 | -    | 1726 | 第三港頭前 | 千葉港   | 千葉港   | -   | 小型汽船 | 口進    | 内船  | 内ナデ | 外、(J.SVH-1)黒灰色<br>内、(J.SVH-2)朱色 | 見事な艤装と船体の<br>組合せで、古風な船          | 内、(J.SVH-1)黒灰色<br>外、(J.SVH-2)朱色 | 内ナデ | 内、(J.SVH-1)黒灰色<br>外、(J.SVH-2)朱色 | 内ナデ |
| 111 56 | 千葉 王 | 1726 | 第三港頭前 | 千葉港   | 千葉港   | -   | 小型汽船 | 口進    | 内船  | 内ナデ | 外、(J.SVH-1)黒灰色<br>内、(J.SVH-2)朱色 | 内、(J.SVH-1)黒灰色<br>外、(J.SVH-2)朱色 | 内ナデ                             | 内ナデ | 内、(J.SVH-1)黒灰色<br>外、(J.SVH-2)朱色 | 内ナデ |
| 112 56 | 千葉 三 | 1726 | 第三港頭前 | 千葉港   | 千葉港   | -   | 小型汽船 | 口進    | 内船  | 内ナデ | 外、(J.SVH-1)黒灰色<br>内、(J.SVH-2)朱色 | 内、(J.SVH-1)黒灰色<br>外、(J.SVH-2)朱色 | 内ナデ                             | 内ナデ | 内、(J.SVH-1)黒灰色<br>外、(J.SVH-2)朱色 | 内ナデ |
| 113 56 | -    | 4791 | 4802  | 第三港頭前 | 千葉港   | -   | 小型汽船 | 口進    | 内船  | 内ナデ | 外、(J.SVH-1)黒灰色<br>内、(J.SVH-2)朱色 | 内、(J.SVH-1)黒灰色<br>外、(J.SVH-2)朱色 | 内ナデ                             | 内ナデ | 内、(J.SVH-1)黒灰色<br>外、(J.SVH-2)朱色 | 内ナデ |
| 114 56 | -    | 338  | -     | 1726  | 第三港頭前 | 千葉港 | 小型汽船 | 口進    | 内船  | 内ナデ | 外、(J.SVH-1)黒灰色<br>内、(J.SVH-2)朱色 | 内、(J.SVH-1)黒灰色<br>外、(J.SVH-2)朱色 | 内ナデ                             | 内ナデ | 内、(J.SVH-1)黒灰色<br>外、(J.SVH-2)朱色 | 内ナデ |
| 115 56 | -    | 416  | -     | 1726  | 第三港頭前 | 千葉港 | 小型汽船 | 口進    | 内船  | 内ナデ | 外、(J.SVH-1)黒灰色<br>内、(J.SVH-2)朱色 | 内、(J.SVH-1)黒灰色<br>外、(J.SVH-2)朱色 | 内ナデ                             | 内ナデ | 内、(J.SVH-1)黒灰色<br>外、(J.SVH-2)朱色 | 内ナデ |
| 116 56 | -    | 105  | -     | 1726  | 第三港頭前 | 千葉港 | 小型汽船 | 口進    | 内船  | 内ナデ | 外、(J.SVH-1)黒灰色<br>内、(J.SVH-2)朱色 | 内、(J.SVH-1)黒灰色<br>外、(J.SVH-2)朱色 | 内ナデ                             | 内ナデ | 内、(J.SVH-1)黒灰色<br>外、(J.SVH-2)朱色 | 内ナデ |
| 117 56 | -    | 335  | -     | 1726  | 第三港頭前 | 千葉港 | 小型汽船 | 口進    | 内船  | 内ナデ | 外、(J.SVH-1)黒灰色<br>内、(J.SVH-2)朱色 | 内、(J.SVH-1)黒灰色<br>外、(J.SVH-2)朱色 | 内ナデ                             | 内ナデ | 内、(J.SVH-1)黒灰色<br>外、(J.SVH-2)朱色 | 内ナデ |
| 118 56 | -    | 216  | -     | 1726  | 第三港頭前 | 千葉港 | 小型汽船 | 口進    | 内船  | 内ナデ | 外、(J.SVH-1)黒灰色<br>内、(J.SVH-2)朱色 | 内、(J.SVH-1)黒灰色<br>外、(J.SVH-2)朱色 | 内ナデ                             | 内ナデ | 内、(J.SVH-1)黒灰色<br>外、(J.SVH-2)朱色 | 内ナデ |
| 119 56 | 千葉 五 | -    | 1726  | -     | 第三港頭前 | 千葉港 | 小型汽船 | 口進    | 内船  | 内ナデ | 外、(J.SVH-1)黒灰色<br>内、(J.SVH-2)朱色 | 内、(J.SVH-1)黒灰色<br>外、(J.SVH-2)朱色 | 内ナデ                             | 内ナデ | 内、(J.SVH-1)黒灰色<br>外、(J.SVH-2)朱色 | 内ナデ |

| 標<br>本<br>番<br>号 | 地<br>名      | 地<br>質      | 地<br>形 | 地<br>質<br>組<br>合                   | 地<br>形 | 地<br>質 | 地<br>質 | 形態の特徴          | 口述説    | 体形 | 足形 | 翅上 | 翅膀 | 備<br>考      |
|------------------|-------------|-------------|--------|------------------------------------|--------|--------|--------|----------------|--------|----|----|----|----|-------------|
| 120 56           | 千<br>人<br>山 | 火<br>成<br>岩 | 山<br>地 | 黑色<br>砂<br>岩<br>(C)<br>火<br>成<br>岩 | 山<br>地 | 全<br>巖 | 9.2m   | 背面<br>側面<br>凹凸 | 外<br>内 | -  | -  | -  | -  | 古<br>老<br>代 |
| 121 57           | 千<br>人<br>山 | 火<br>成<br>岩 | 山<br>地 | 黑色<br>砂<br>岩<br>(C)                | 山<br>地 | 全<br>巖 | 6.2m   | 背面<br>側面<br>凹凸 | [P]    | -  | -  | -  | -  | 古<br>老<br>代 |
| 122 58           | 千<br>人<br>山 | 火<br>成<br>岩 | 山<br>地 | 火<br>成<br>岩<br>(C)                 | 山<br>地 | 全<br>巖 | 16.5   | 背面<br>側面<br>凹凸 | 外<br>内 | -  | -  | -  | -  | 古<br>老<br>代 |
| 123 59           | 千<br>人<br>山 | 火<br>成<br>岩 | 山<br>地 | 火<br>成<br>岩<br>(C)                 | 山<br>地 | 全<br>巖 | 5.9    | 背面<br>側面<br>凹凸 | [P]    | -  | -  | -  | -  | 古<br>老<br>代 |
| 124 60           | 千<br>人<br>山 | 火<br>成<br>岩 | 山<br>地 | 火<br>成<br>岩<br>(C)                 | 山<br>地 | 全<br>巖 | 6      | 背面<br>側面<br>凹凸 | 外<br>内 | -  | -  | -  | -  | 古<br>老<br>代 |
| 125 61           | 千<br>人<br>山 | 火<br>成<br>岩 | 山<br>地 | 火<br>成<br>岩<br>(C)                 | 山<br>地 | 全<br>巖 | 41.5m  | 背面<br>側面<br>凹凸 | [P]    | -  | -  | -  | -  | 古<br>老<br>代 |
| 126 62           | 千<br>人<br>山 | 火<br>成<br>岩 | 山<br>地 | 火<br>成<br>岩<br>(C)                 | 山<br>地 | 全<br>巖 | 11.6   | 背面<br>側面<br>凹凸 | 外<br>内 | -  | -  | -  | -  | 古<br>老<br>代 |
| 127 63           | 千<br>人<br>山 | 火<br>成<br>岩 | 山<br>地 | 火<br>成<br>岩<br>(C)                 | 山<br>地 | 全<br>巖 | 8.7    | 背面<br>側面<br>凹凸 | [P]    | -  | -  | -  | -  | 古<br>老<br>代 |
| 128 64           | 千<br>人<br>山 | 火<br>成<br>岩 | 山<br>地 | 火<br>成<br>岩<br>(C)                 | 山<br>地 | 全<br>巖 | 5.7    | 背面<br>側面<br>凹凸 | [P]    | -  | -  | -  | -  | 古<br>老<br>代 |
| 129 65           | 千<br>人<br>山 | 火<br>成<br>岩 | 山<br>地 | 火<br>成<br>岩<br>(C)                 | 山<br>地 | 全<br>巖 | 3.1    | 背面<br>側面<br>凹凸 | 外<br>内 | -  | -  | -  | -  | 古<br>老<br>代 |
| 130 66           | 千<br>人<br>山 | 火<br>成<br>岩 | 山<br>地 | 火<br>成<br>岩<br>(C)                 | 山<br>地 | 全<br>巖 | 0.8    | 背面<br>側面<br>凹凸 | [P]    | -  | -  | -  | -  | 古<br>老<br>代 |

木製品観察表

(単位  
cm)

| 番号<br>No. | 種類<br>No. | 固形<br>No. | 地区 | 遺構面              | 遺構・場<br>位        | 製品名        | 重量<br>Kg<br>厚<br>mm<br>寬<br>mm |      |     | 形態の特徴                                      | 木取り<br>板目 | 遺存状況                  | 樹種    |
|-----------|-----------|-----------|----|------------------|------------------|------------|--------------------------------|------|-----|--|-----------|-----------------------|-------|
|           |           |           |    |                  |                  |            | 先                              | 中    | 後   |  |           |                       |       |
| ①         | 13        | 十九        | 7  | 第4遺構面            | SE-02            | ヘラ状木製品     | 39.6                           | 3.2  | 1.0 | 全体にやすりをかけたようになめらか                          | 板目        | 良好                    | -     |
| ②         | 13        | -         | 7  | 第4遺構面            | SE-02            | ら?         | 15.0                           | 2.0  | 1.5 | 棒状を呈し、先端部分を削出し、錐状にしている                     | 芯持ち       | 普通                    | -     |
| ③         | 23        | 十九        | 7  | 第4遺構面            | SK-10            | 人形木製品      | 26.4                           | 12.6 | 0.6 | 木目が直線に下りる。上部の穴は貫通する                        | 板目        | ひびが入る                 | -     |
| ④         | 23        | -         | 7  | 第4遺構面            | SK-10            | 不明         | 19.0                           | 5.0  | 0.8 | 全体に薄く、円孔を1ヵ所に穿つ                            | 板目        | 痛みが激しく残りやすい           | -     |
| ⑤         | 23        | 十九        | 7  | 第4遺構面            | SK-10            | なすび型農耕具    | 39.4                           | 4.4  | 0.6 | 先端部分、全体に薄い                                 | 板目        | 痛みが激しい                | カシ類か? |
| ⑥         | 23        | -         | 7  | 第4遺構面            | SK-10            | 柄?         | 41.8                           | 5.0  | 3.1 | つる状のものを巻いた跡、先端に炭化粙が付着、貝の付着有り               | 板目        | 良好                    | -     |
| ⑦         | 23        | -         | 7  | 第4遺構面            | SK-10            | なすび型農耕具    | 15.2                           | 5.6  | 0.7 | 先端部分。122とは別物                               | 板目        | 良好                    | -     |
| ⑧         | 23        | -         | 7  | 第4遺構面            | SK-10            | 手斧柄        | -                              | -    | -   | つる状の巻き物の跡が2ヵ所                              | 板目        | もろく痛みが激しい             | -     |
| ⑨         | 23        | -         | 7  | 第4遺構面            | SK-10            | 柄?         | 9.3                            | 2.6  | 2.7 | 棒状を呈する                                     | 板目        | 全体に腐食が激しい             | -     |
| ⑩         | 24        | 十八        | 7  | 第4遺構面            | SK-10            | えぶり        | 38.4                           | 25.0 | 1.5 | 柄孔有り、方孔を2ヵ所に穿たれており、支柱木を挿入したものか?            | 板目        | ひびが入る                 | カシ類か? |
| ⑪         | 29        | -         | 14 | 第4遺構面            | SK-15            | 不明         | 60.6                           | 20.6 | 3.8 | 板状を呈し、加工跡が残る                               | 板目        | ひびが入る                 | -     |
| ⑫         | 38        | -         | 7  | 第4遺構面            | SI-01            | 不明、何かの部材か? | 19.7                           | 4.5  | 1.0 | 1.3×3.0の方形の穴があり、突いたよな使用痕が無効に残る             | 板目        | 普通                    | -     |
| ⑬         | 38        | -         | 7  | 第4遺構面            | SI-01            | 不明         | 21.2                           | 12.7 | 0.9 | 板状を呈する。左上の穴のみ貫通                            | 板目        | 全体的に腐食が激しい            | -     |
| ⑭         | 48        | -         | 6  | 第3遺構面<br>(第4遺構面) | SD-05<br>(ST-02) | 棒状木製品      | 68.0                           | 1.9  | 2.1 | 加工跡が残る                                     | 板目        | スコップによる雷貫通            | -     |
| ⑮         | 49        | 十七        | 7  | 第4遺構面            | ST-02            | 直弧文板材      | 29.3                           | 8.1  | 7.0 | 直弧文を割り出し、右端に円形のきれいな穴が貫通するが、全体がどのよな形になるかは不明 | 板目        | 虫食いと思われる穴の穴が見られる。普通   | -     |
| ⑯         | 50        | 十九        | 1  | 第4遺構面            | ST-02            | 手斧柄        | -                              | -    | -   | 先端は三方に張り出している(削り出している)                     | 板目        | 焼けで炭化している部分有り         | -     |
| ⑰         | 50        | -         | 7  | 第4遺構面            | ST-02            | 舟形木製品      | 29.0                           | 8.9  | 3.2 | 縁に快りがあり、容器か?                               | 芯持ち       | ひびが入る                 | -     |
| ⑱         | 50        | -         | 6  | 第4遺構面            | ST-02            | こま         | 11.1                           | 6.5  | 3.4 | 中央部がくびれる                                   | 芯持ち       | 良好                    | -     |
| ⑲         | 50        | 十九        | 1  | 第4遺構面            | ST-02            | 編錆         | 12.1                           | 7.9  | 5.2 | 中央を削り凹みをつくる                                | 芯持ち       | 全体の腐食がひどい             | -     |
| ⑳         | 50        | -         | 6  | 第4遺構面            | ST-02            | 木製庖丁       | 10.8                           | 4.5  | 0.5 | 片刃状。先端と思われる                                | 板目        | ひびが入っている              | -     |
| ㉑         | 50        | -         | 7  | 第4遺構面            | ST-02            | 板状木製品      | 19.2                           | 4.5  | 0.7 | 下部に穿孔が2箇所あり、箱の仕切り板か?                       | 板目        | 全体的にもろく、割れた部分から腐食が激しい | -     |
| ㉒         | 50        | -         | 6  | 第4遺構面            | ST-02            | 刀型木製品      | 48.4                           | 2.4  | 1.4 | 棒状を呈し、中央部が平たく、その一部が鋸く尖る                    | 板目        | 5つに折れています             | -     |
| ㉓         | 51        | -         | 6  | 第4遺構面            | ST-02            | 尖頭棒        | 27.2                           | -    | 1.8 | 棒の両端を削って一端は尖らせる                            | 芯持ち       | 良好                    | -     |
| ㉔         | 51        | -         | 11 | 第4遺構面            | ST-02            | 木刀         | 62.0                           | 2.4  | 1.6 | 棒状を呈し、刃部片端はにぶく尖る                           | 板目        | 全般的に腐食が激しい            | -     |
| ㉕         | 51        | -         | 7  | 第4遺構面            | ST-02            | 棒状木製品      | 37.5                           | 2.8  | 2.2 | 棒状を呈し、先端を尖らせている                            | 板目        | 全般的に腐食が激しい            | -     |
| ㉖         | 51        | -         | 7  | 第4遺構面            | ST-02            | 弓          | 17.1                           | 3.6  | 3.2 | 端部は鋸く切られ痕が削り出されている                         | 板目        | 良好                    | -     |
| ㉗         | 51        | -         | 6  | 第4遺構面            | ST-02            | 火續うず       | 25.8                           | 1.5  | 2.2 | 焼けた跡が残る(焼跡も)                               | 芯持ち       | 3つに折れています             | -     |
| ㉘         | 52        | -         | 6  | 第4遺構面            | ST-02            | 板状木製品      | 41.1                           | 6.6  | 1.2 | 板状を呈し、上部に細い針状のもので傷つけたあと                    | 板目        | 2つに分解しています            | -     |
| ㉙         | 52        | 十九        | 1  | 第4遺構面            | ST-02            | 編錆         | 14.7                           | 9.2  | 7.1 | 方孔があり周囲を抉っている                              | 芯持ち       | 良好                    | -     |
| ㉚         | 52        | -         | 6  | 第4遺構面            | ST-02            | 編錆         | 15.9                           | 8.4  | 4.6 | 半分欠損し、かまぼこ状を呈する。方孔があり。植物遺体が付着              | 板目        | 普通                    | -     |
| ㉛         | 52        | -         | 7  | 第4遺構面            | ST-02            | 不明         | 28.6                           | 7.3  | 1.0 | 上端左右に穿孔が1つずつ                               | 板目        | 裏面は腐食が激しい             | -     |
| ㉜         | 59        | 十八        | 1  | 第4遺構面            | ST-02            | えぶり        | 36.3                           | 18.9 | 2.5 | 柄を溢すための穴があり、数多くの擦過傷が残る                     | -         | -                     | -     |
| ㉝         | 60        | -         | 5  | -                | 淨化構造             | 鍵          | 23.9                           | 20.4 | 3.8 | 未製品で、中央の凹みは穿孔しようとした跡(黒凸部)、焼けた跡が残る          | 板目        | カシ類か?                 | -     |

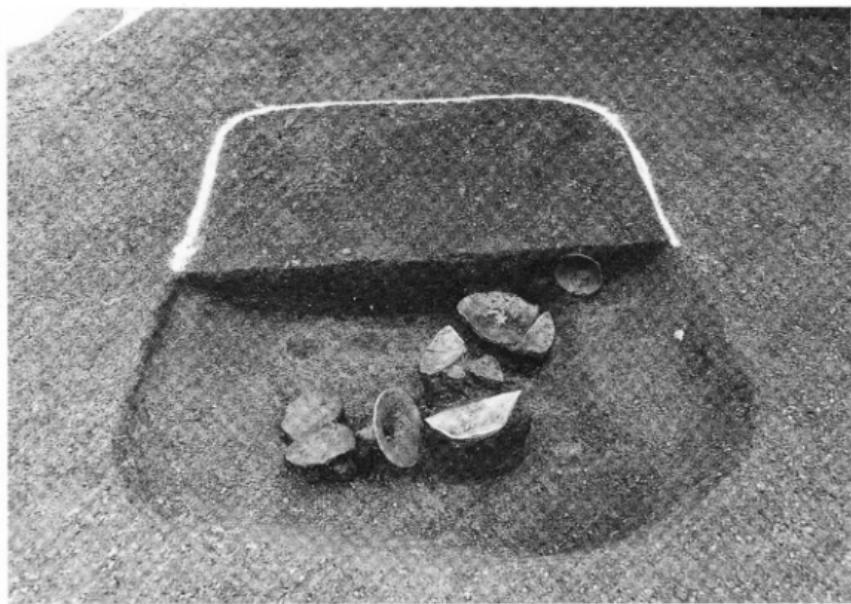
# 図 版

図版一 遺構(第4遺構面)



全景(西より)

図版二 遺構(第4遺構面)



SK-07(北東より)

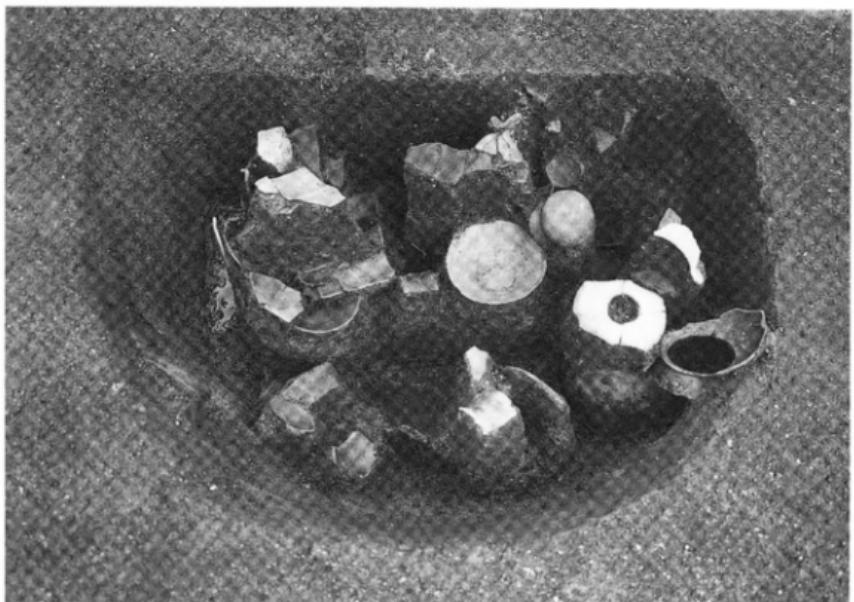


SK-10上層(北西より)

図版三 遺構（第4遺構面）



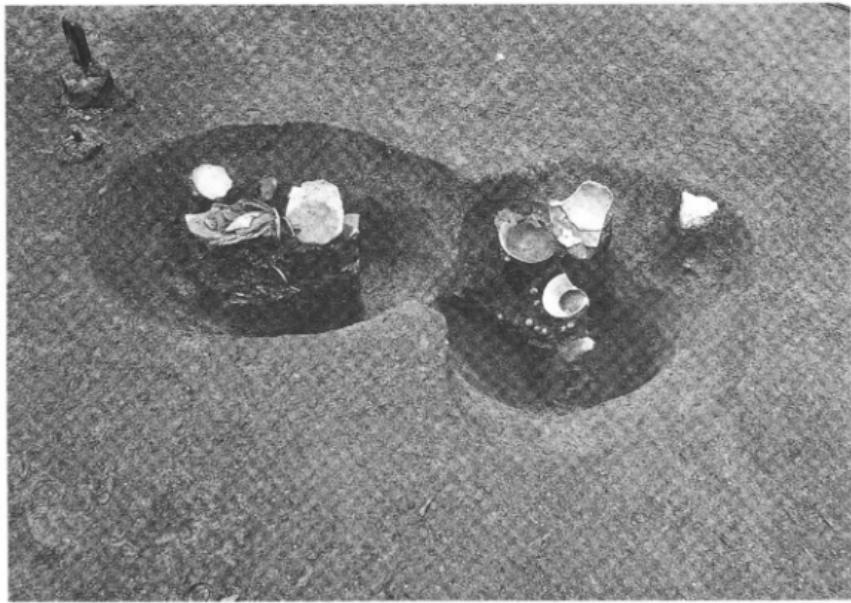
SK-11 下層（南西より）



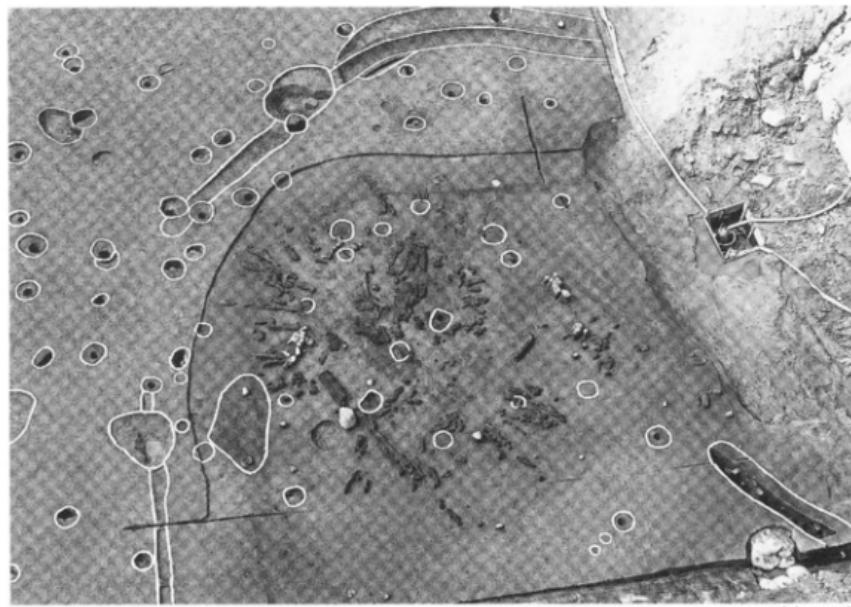
SK-15（北より）

図版四

遺構(第4遺構面)



SK-19・20(南西より)

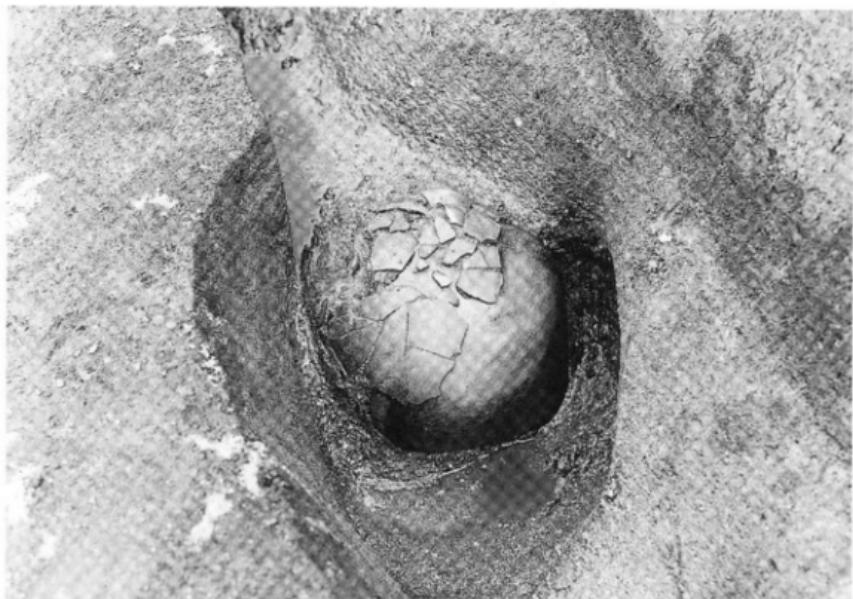


SB-01(東より)

図版五 遺構（第4遺構面）



SI-01(東より)



10区東側側溝土器棺出土状況(南より)

SE-02



7

SE-02



8

SB-01



1

SB-01



3

SB-01



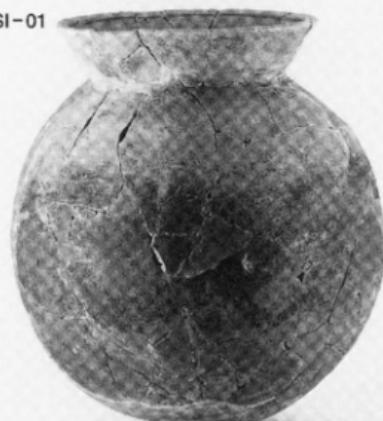
5

SI-01



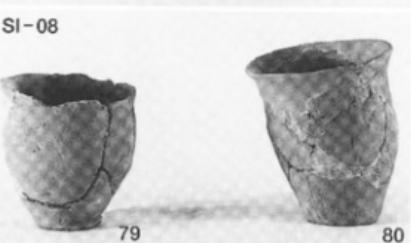
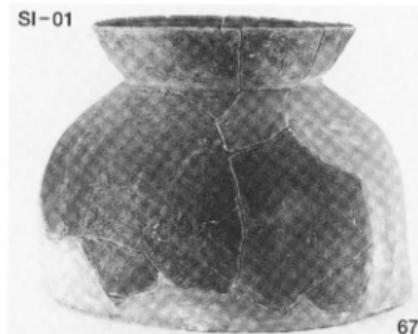
66

SI-01

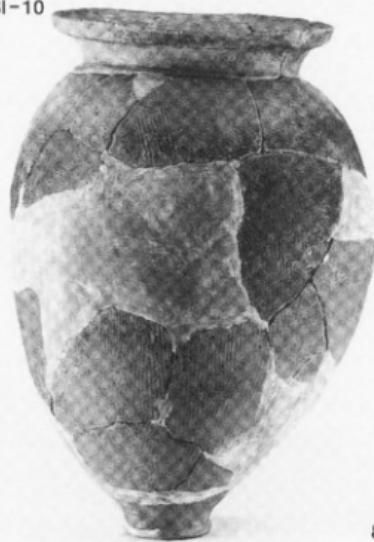


70

圖版七 遺物（土器・土製品）



SI-10



86

SK-07



14

SK-10



25

SK-09



16

SK-10



19

SK-07



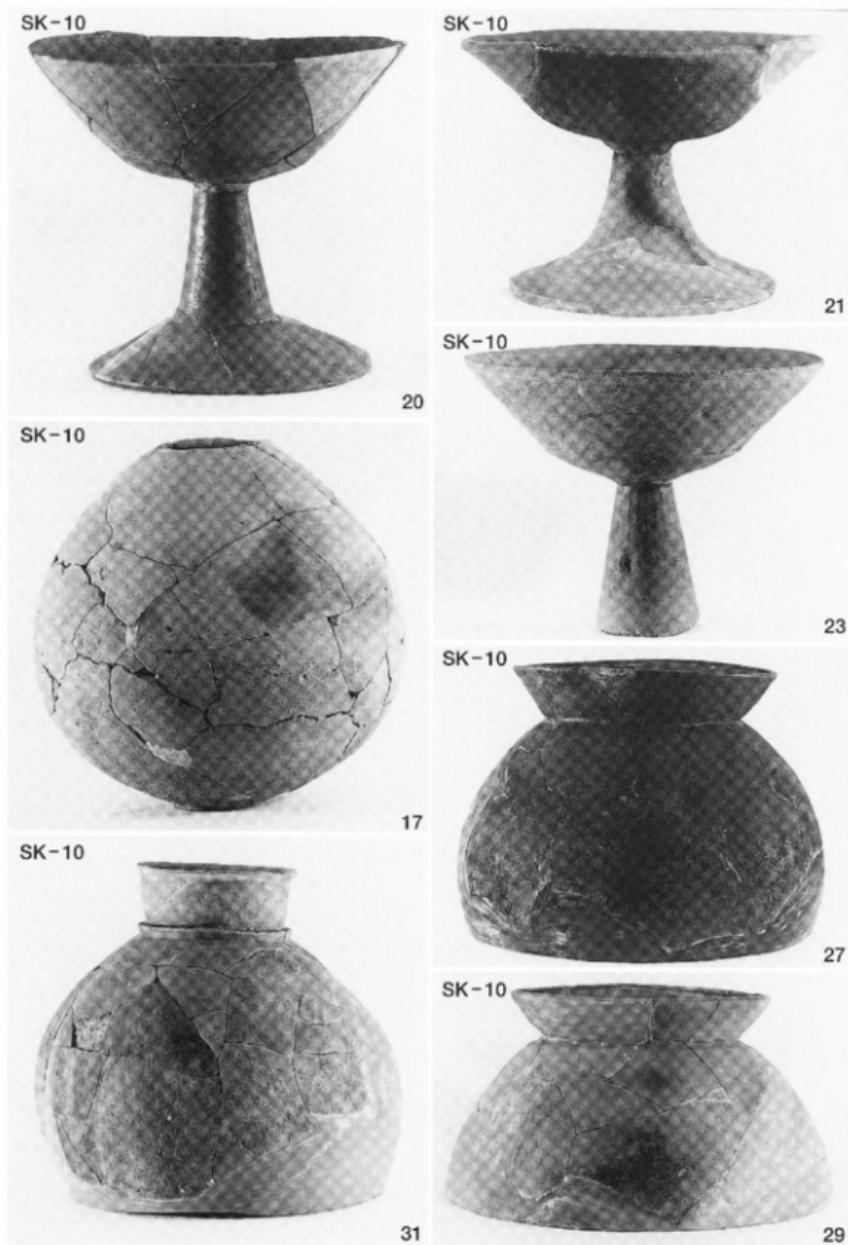
12

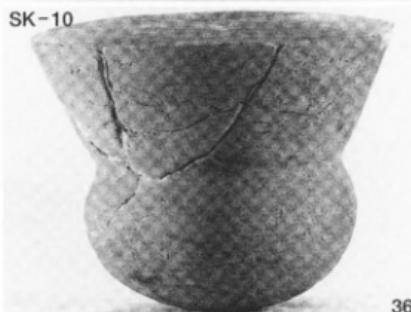
SK-08



15

図版九 遺物（土器）





図版十一 遺物(土器)



図版十二 遺物(土器)

SK-15



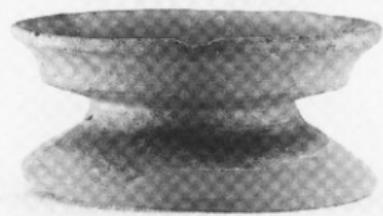
53

SK-15



49

SK-15



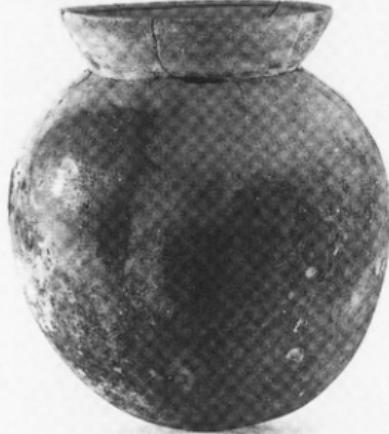
52

SK-15



55

SK-15



54

SK-15



56

図版十三 遺物（土器）

SK-17



SK-19



SK-20



58

62

SK-17



63

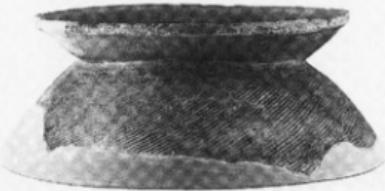
60

SK-19



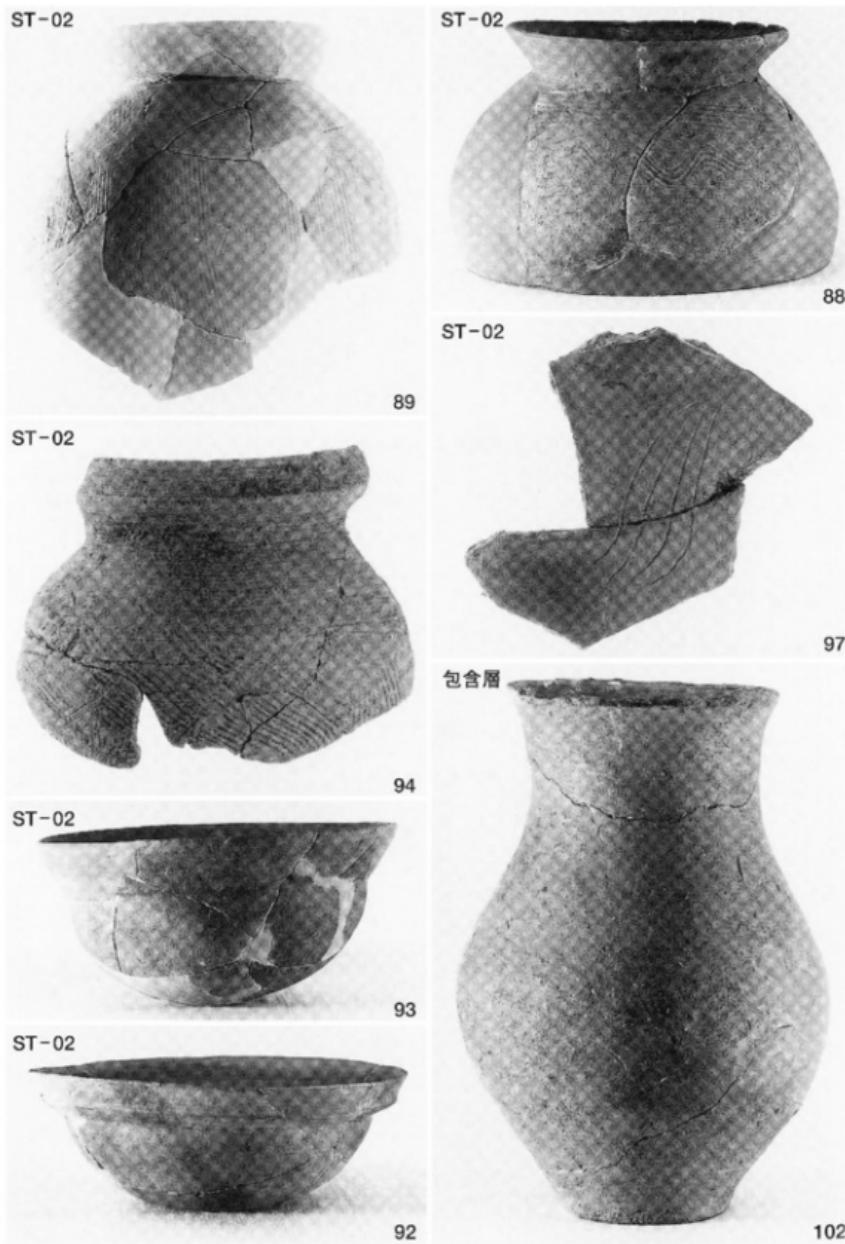
61

SK-27



64

図版十四 遺物(土器)



圖版十五 遺物（土器・土製品）

105

包含層



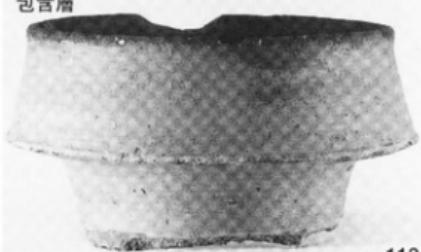
111

包含層



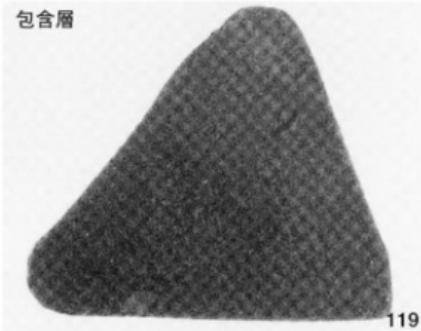
112

包含層



119

包含層

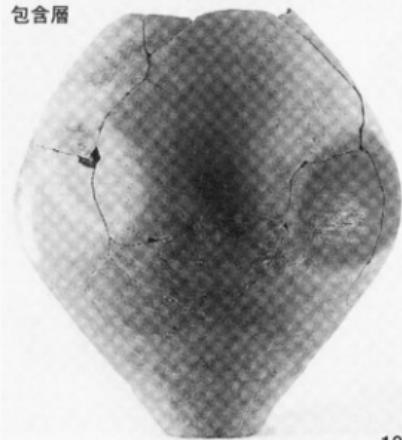


103

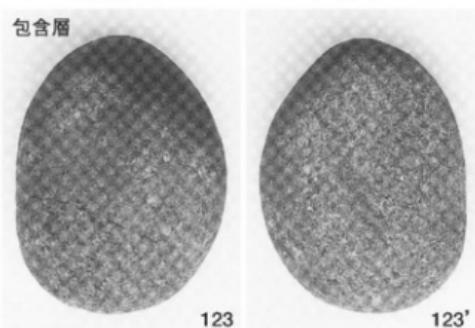
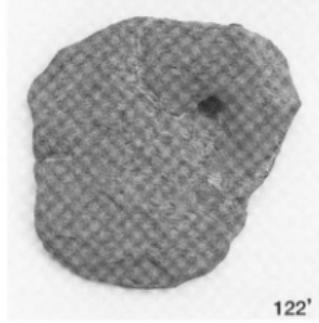
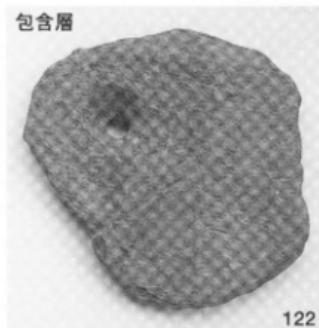
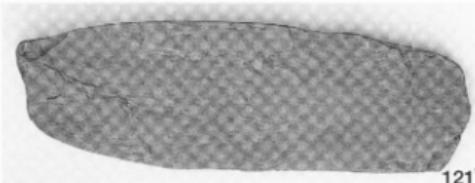
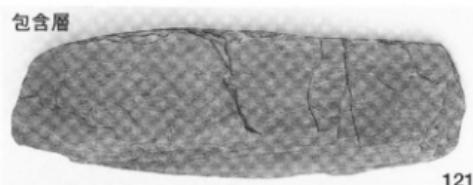
包含層



包含層



圖版十六 遺物（石製品・骨角製品）



圖版十七 遺物（石製品・骨角製品・金属製品・木製品）

ST-02



101



100

SK-10

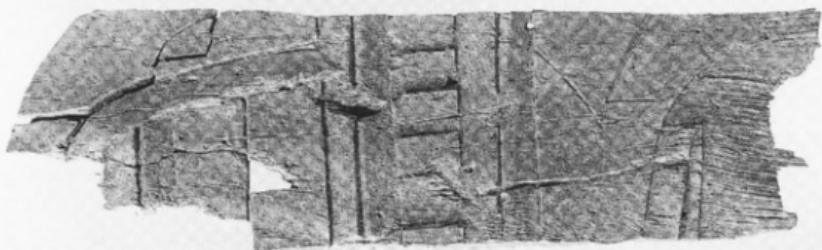


SK-06



11

ST-02

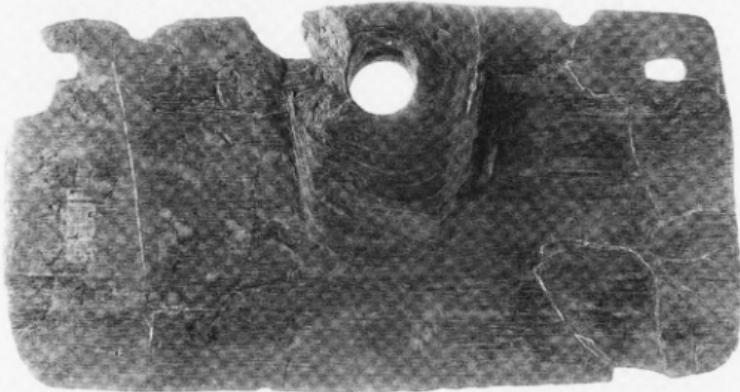


15

包含層

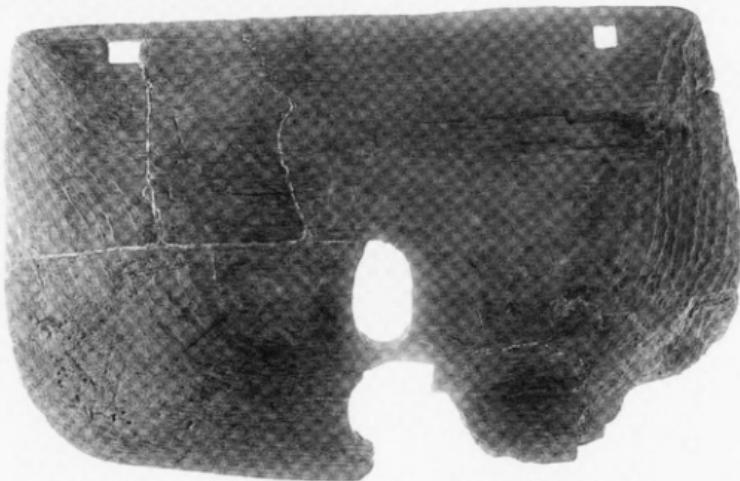
図版十八

遺物（木製品）



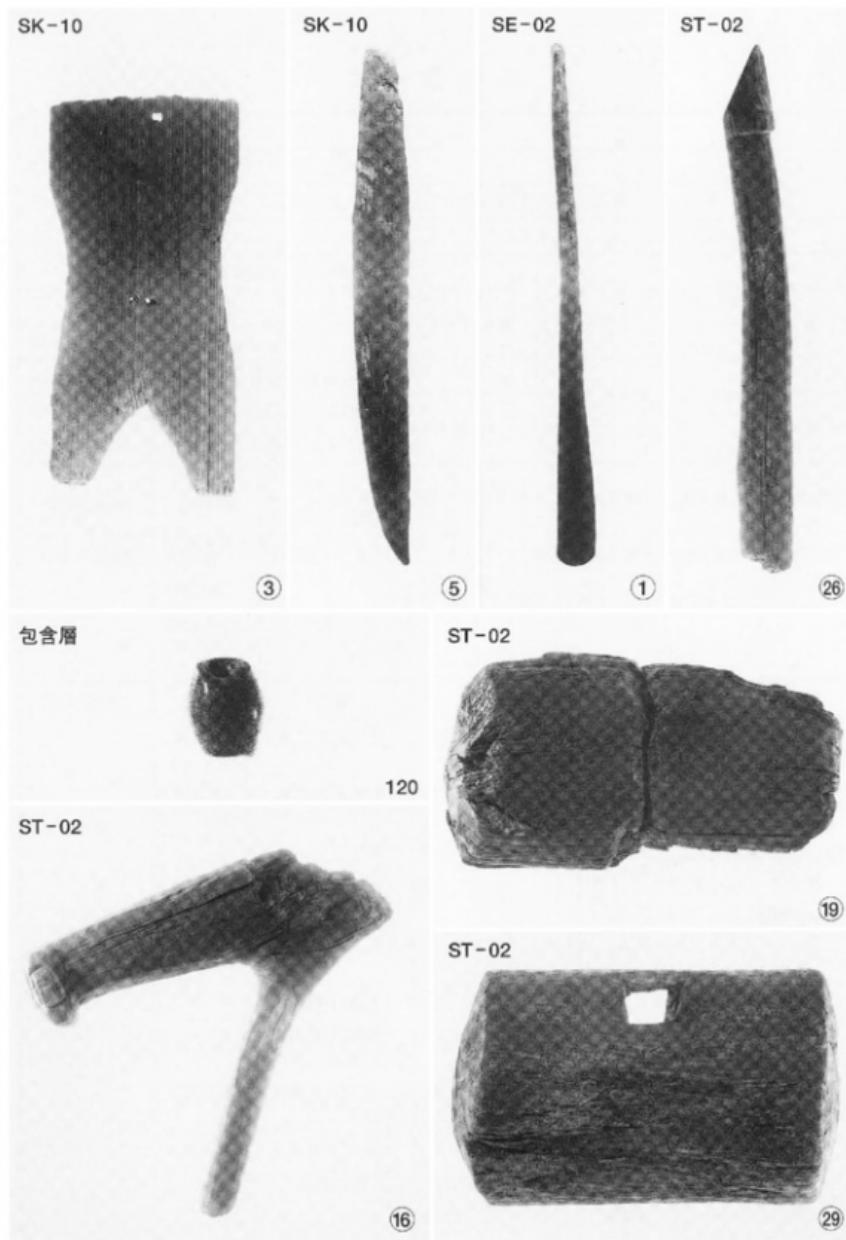
③

SK-10



⑩

図版十九 遺物（石製品・木製品）



## 報告書抄録

| ふりがな              | なかがいといせき   |                   |    |                             |                    |  |   |              |
|-------------------|--|-------------------|----|-----------------------------|--------------------|--|---|--------------|
| 書名                | 中垣内遺跡  |                   |    |                             |                    |  |   |              |
| 副書名               | 学校法人大阪産業大学校舎(12号館)新築工事に伴う                                    |                   |    |                             |                    |  |   |              |
| 卷次                |  |                   |    |                             |                    |  |   |              |
| シリーズ名             | 大東市埋蔵文化財調査報告   |                   |    |                             |                    |  |   |              |
| シリーズ番号            | 第22集   |                   |    |                             |                    |  |   |              |
| 編集者名              | 黒田淳  |                   |    |                             |                    |  |   |              |
| 編集機関              | 大東市教育委員会   |                   |    |                             |                    |  |   |              |
| 所在地               | 〒574-0074 大阪府大東市谷川1-1-1 TEL 072-874-2181                     |                   |    |                             |                    |  |   |              |
| 発行年月日             | 2005年(平成17年)3月31日  |                   |    |                             |                    |  |   |              |
| 所収遺跡名             | 所在地  | コード               |    | 北緯                          | 東経                 | 調査期間   | 調査面積  | 調査原因         |
|                   |  | 市町村               | 遺跡 |                             |                    |  |   |              |
| なかがいといせき<br>中垣内遺跡 | おおさかふ<br>大阪府<br>だいとうし<br>大東市<br>なかがいと<br>中垣内<br>いちょうの<br>4丁目 | 27218             | 4  | 34°<br>42'<br>17"           | 135°<br>38'<br>35" | 1987年6月23日<br>5<br>1987年10月15日                           | 714m <sup>2</sup>                                   | 大学校舎<br>新築工事 |
| 所収遺跡名             | 種別   | 主な時代              |    | 主な遺構                        |                    | 主な遺物   | 特記事項  |              |
| 中垣内遺跡             | 集落跡  | 弥生時代中期            |    | 土器棺墓                        |                    | 弥生土器   | 土器棺   |              |
|                   | 集落跡  | 古墳時代前期            |    | 溝、土坑、井戸、<br>掘立柱建物、竪穴<br>住居、 |                    | 庄内式～布留<br>式土器、木製品、<br>金属製品、<br>石製品、骨角<br>製品、獸骨(イ<br>ノシシ) | 焼失竪穴住居<br>東海系の土器<br>直弧文入木製品、<br>素文鏡、<br>骨製根拠、棗<br>玉 |              |
|                   |  | 古墳時代後期～<br>奈良平安時代 |    | 溝、土坑、ピット                    |                    |  |   |              |
|                   | 耕作地  | 中世～近世             |    | 耕作痕(鋤溝)、<br>土坑              |                    | 瓦器、土師器、<br>染付け   |   |              |
|                   | 耕作地  | 近世以降              |    | 耕作痕(鋤溝)、<br>杭列、溝            |                    | 染付け、<br>土師器  |   |              |

|       |
|-------|
| 印刷物番号 |
| 16-94 |

---

大東市埋蔵文化財調査報告第22集

## 中垣内遺跡

—学校法人大阪産業大学校舎(12号館)新築工事に伴う—

2005年3月31日発行

編集・発行 大東市教育委員会

〒574-8555 大東市谷川1丁目1番1号

TEL. 072-872-2181

印刷・製本 西村印刷株式会社

〒634-0021 大阪市都島区都島本通5丁目15番3号

TEL. 06-6925-6555

---

